

国史跡 乙訓古墳群
井ノ内車塚古墳の調査

～ 遺物編 ～

2024

長岡京市教育委員会

編集 公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター

国史跡 乙訓古墳群
井ノ内車塚古墳の調査

～ 遺物編 ～

2024

長岡京市教育委員会

編集 公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター



(1) 横穴式石室の須恵器



(2) 普通円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪



(1) 石見型埴輪



(2) 形象埴輪

序 文

本書は、国指定史跡乙訓古墳群の一基である井ノ内車塚古墳の調査成果をまとめたものです。乙訓古墳群は、京都盆地の西南部、桂川右岸に点在する古墳群です。古墳時代前期初頭から終末期までの首長墓が連続と築造された全国的にも稀な地域であることから、国史跡に指定されています。

井ノ内車塚古墳は、長岡京市の市域北西部に位置し、古墳時代後期の芝・井ノ内古墳群に属する前方後円墳です。大阪大学を主体とした測量調査により、およその規模・形状が知られることになりましたが、その詳細は不明な古墳でありました。

一方で、本古墳の周辺で実施してきた開発に伴う発掘調査によって、円墳や方墳、木棺墓、土壇墓などの複数種類の埋葬施設を持つ墳墓が発見され、本古墳群における古墳時代の階層が明らかになるなど、その重要性が指摘されてきました。

そこで、本古墳の範囲確認調査を計画し、平成11・23～28年度に調査を実施したところ、造り出しを持つ墳丘構造や横穴式石室、多彩な埴輪などを確認し、隣接する2基の前方後円墳との関係から、首長系譜を探るための貴重な成果を得られました。さらに本古墳が造られた年代は、518年に継体大王が「弟国宮」を本市付近に遷都した時期とも近く、その価値は本市だけでなく、我が国において非常に重要度の高い史跡と言えます。

本市ではこのような貴重な文化資源の保存をはかり、文化的活動・憩いの場として活用するため、古墳及び周辺用地を平成30年度に公有化しました。また、地域全体の文化財保存・活用計画を策定し、地域の歴史・文化を活かしたまちづくりや、文化財に親しむことができる環境の整備を主要な施策として取り上げ、市内の文化財や景観を活かした全市的な周遊ネットワークの構築を目指しています。

最後になりましたが、発掘調査にあたり数々のご助力をいただきました土地所有者や地元協力者の方々、ご指導・ご助言をいただいた諸先生方並びに調査を担当していた公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センターなどの関係機関に深く感謝いたします。本書が文化財保護の普及・啓発の一助となり、また地域学習の資料として広く活用いただければ幸いです。

令和6年3月

長岡京市教育委員会

教育長 西村文則

凡 例

1. 本書は、京都府長岡京市井ノ内向井芝4に所在する井ノ内車塚古墳に関する報告書である。
2. 井ノ内車塚古墳は、2016（平成28）年3月1日に「国史跡 乙訓古墳群」として一括指定された古墳11基の1基である。
3. 本書は、長岡京市教育委員会が平成23～28年度に国庫補助事業として実施した、井ノ内車塚古墳第4～9次調査の発掘調査報告書遺物編である。なお、遺構編については、令和2年度に『国史跡 乙訓古墳群 井ノ内車塚古墳の調査～遺構編～』『長岡京市文化財調査報告書』第77冊（2021）として刊行している。
4. 本書では、井ノ内車塚古墳に関連する遺物について報告し、総括は次年度以降に刊行する予定である。
5. 井ノ内車塚古墳第1～9次調査の概要や面積などは、「第2章 調査経過」に示した。
6. 井ノ内車塚古墳の所在地は、長岡京跡の右京二条四坊十五町にもあたるため、調査では長岡京跡に関わる遺構、遺物の確認も併せて行った。このため各調査には、以下の長岡京跡右京域の調査回数と地区名が割り当てられている。
第3次調査 右京第647次調査（GKT-4地区） 第4次調査 右京第1028次調査（GKT-5地区）
第5次調査 右京第1045次調査（GKT-6地区） 第6次調査 右京第1068次調査（GKT-7地区）
第7次調査 右京第1092次調査（GKT-8地区） 第8次調査 右京第1119次調査（GKT-9地区）
第9次調査 右京第1145次調査（GKT-10地区）
7. 各調査では複数の調査区が設定されている。本書では、個別調査区の呼称を「調査回数-番号」に統一したため、概要報告のトレンチ名から以下のように変更した。
第3次調査北トレンチを3-1調査区 同南トレンチを3-2調査区
第7次調査北トレンチを7-1調査区 同中央トレンチを7-2調査区 同南トレンチを7-3調査区
8. 本書で使用する地形区分は、とくに断らない限り「長岡京市域地形分類図」『長岡京市史』資料編一（1991年）によった。
9. 本書で使用している方位と国土座標値は、世界測地系の第VI系によっている。
10. 各章（注）に示した報告書のうち使用頻度の高いものは、『長岡京市埋蔵文化財発掘調査資料選』（十二）公益財団法人長岡京市埋蔵文化財センター（2023年）に従って略記した。
11. 本書の執筆は、第3章第1・2・5節と第5章第1・3節を山本輝雄（元当センター職員）、第4章を原秀樹が行い、その他を主に中島哲夫が行った。全体の編集等は、技術補佐員の佐藤陽子をはじめ整理員の協力のもと中島が行った。

本文目次

第1章 位置と環境	1
第2章 調査経過	5
第3章 古墳に伴う出土遺物	9
第1節 横穴式石室の副葬品	9
第2節 墳丘出土の土器	13
第3節 円筒埴輪	17
第4節 形象埴輪	43
第5節 土製品	71
第4章 古墳時代以外の遺物	72
第1節 長岡京期・平安時代の土器	72
第2節 中世以降の土器	72
第3節 石製品	75
第4節 金属製品	76
第5章 まとめ	80
第1節 古墳時代の須恵器	80
第2節 埴輪	82
第3節 須恵質陶棺	83

卷 頭 図 版 目 次

土器・埴輪

- 卷頭図版1 (1) 横穴式石室の須恵器
(2) 普通円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪

埴輪

- 卷頭図版2 (1) 石見型埴輪
(2) 形象埴輪

図 版 目 次

横穴式石室の副葬品

図版 1 管玉と須恵器

横穴式石室の副葬品と墳丘出土の土器

図版 2 (1) 横穴式石室出土の須恵器

(2) 墳丘出土の土器

円筒埴輪

図版 3 普通円筒埴輪

図版 4 普通円筒埴輪

図版 5 普通円筒埴輪

図版 6 普通円筒埴輪

図版 7 朝顔形円筒埴輪

図版 8 円筒埴輪

形象埴輪

図版 9 石見型埴輪

図版 10 石見型埴輪

図版 11 石見型埴輪

図版 12 人物形埴輪

図版 13 動物形埴輪

図版 14 家形埴輪

図版 15 器財形埴輪

その他の遺物

図版 16 (1) 墳丘出土の土製品

(2) 古墳時代以外の主な遺物

挿 図 目 次

第1章 位置と環境	
第1図 井ノ内車塚古墳と周辺の発掘調査地位置図 (1/5000)	1
第2図 乙訓地域の主な古墳 (1/60000)	2
第3図 乙訓地域の主な古墳編年表	3
第4図 井ノ内車塚古墳と周辺の古墳分布図 (1/12000)	4
第2章 調査経過	
第5図 井ノ内車塚古墳調査区配置図 (1/500)	5
第6図 井ノ内車塚古墳墳丘測量図 (1/200)	6
第7図 井ノ内車塚古墳の墳丘と調査区全体図 (1/200)	7
第3章 古墳に伴う出土遺物	
第1節 横穴式石室の副葬品	
第8図 ガラス製管玉実測図 (1/2)	9
第9図 横穴式石室出土の須臾器実測図 (1/4)	11
第2節 墳丘出土の土器	
第10図 墳丘出土の古墳時代の土器実測図 (1/4)	15
第3節 円筒埴輪	
第11図 普通円筒埴輪模式図	17
第12図 普通円筒埴輪実測図1 (1/6)	19
第13図 普通円筒埴輪実測図2 (1/6)	20
第14図 普通円筒埴輪実測図3 (1/6)	21
第15図 普通円筒埴輪実測図4 (1/6)	22
第16図 朝顔形円筒埴輪模式図	28
第17図 朝顔形円筒埴輪実測図1 (1/6)	29
第18図 朝顔形円筒埴輪実測図2 (1/6)	30
第19図 円筒埴輪実測図1 (1/6)	35
第20図 円筒埴輪実測図2 (1/6)	36
第21図 ヘラ記号実測図 (1/4)	41

第4節 形象埴輪

第22図	石見型埴輪模式図	43
第23図	石見型埴輪実測図1 (1/6)	44
第24図	石見型埴輪実測図2 (1/6)	45
第25図	石見型埴輪実測図3 (1/6)	46
第26図	石見型埴輪実測図4 (1/6)	47
第27図	石見型埴輪実測図5 (1/6)	48
第28図	石見型埴輪実測図6 (1/6)	49
第29図	石見型埴輪実測図7 (1/6)	50
第30図	人物形埴輪実測図 (1/6)	56
第31図	動物形埴輪実測図1 (1/6)	57
第32図	動物形埴輪実測図2 (1/6)	58
第33図	動物形埴輪実測図3 (1/6)	59
第34図	家形埴輪実測図1 (1/6)	61
第35図	家形埴輪実測図2 (1/6)	63
第36図	器財形埴輪実測図 (1/6)	64
第37図	器財形埴輪・種別不明埴輪実測図 (1/6)	65

第5節 土製品

第38図	陶棺実測図 (1/4)	71
第39図	土製品実測図 (1/4)	71

第4章 古墳時代以外の遺物

第40図	長岡京期・平安時代の土器実測図 (1/4)	73
第41図	中世以降の土器実測図1 (1/4)	74
第42図	中世以降の土器実測図2 (1/4)	75
第43図	石製品実測図 (1/2・1/4)	76
第44図	金属製品実測図 (1/2)	77

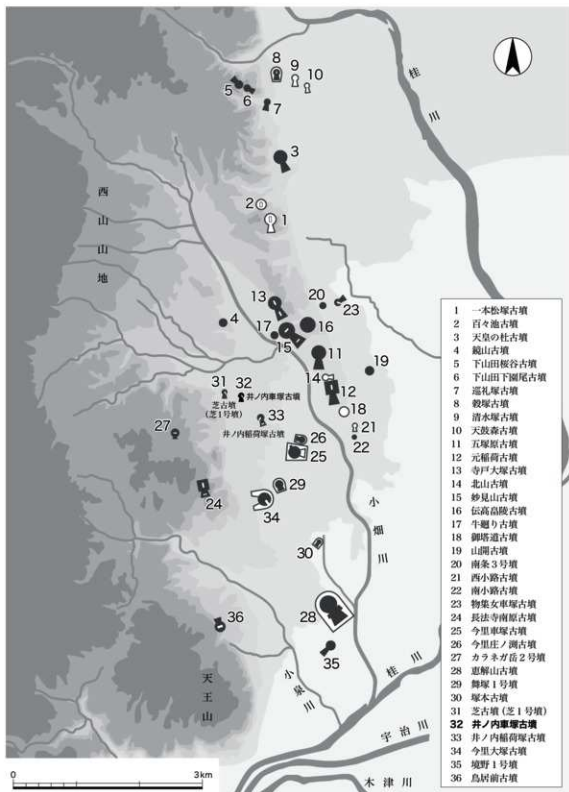
付 表 目 次

第2章 調査経過	
付表-1 井ノ内車塚古墳調査履歴一覧表	5
第3章 古墳に伴う出土遺物	
付表-2 横穴室石室出土の須恵器観察表	12
付表-3 墳丘出土の古墳時代の土器観察表	16
付表-4 普通円筒埴輪観察表	23～27
付表-5 朝顔形円筒埴輪観察表	31～34
付表-6 円筒埴輪観察表	37～40
付表-7 ヘラ記号を持つ円筒埴輪観察表	41・42
付表-8 石見型埴輪観察表1	51・52
付表-9 石見型埴輪観察表2	53・54
付表-10 形象埴輪観察表	66～70
付表-11 陶棺・土製品観察表	71
第4章 古墳時代以外の遺物	
付表-12 古墳時代以外の土器・石製品・金属製品観察表	77～79
付表-13 報告書抄録	86

2 乙訓古墳群と井ノ内車塚古墳

動向は、乙訓地域のみならずヤマト王権の大王墓と連動し、古墳時代全体の政治的な動向を窺うものとして研究が行われてきた⁽²⁾。

乙訓古墳群は北から葛野、向日丘陵、長岡、大山崎と呼ばれる大きく4つのグループに分けら



第2図 乙訓地域の主な古墳 (1/60000)

れる。前期初頭に向日丘陵での首長墓築造が始まり、中期には乙訓地域南の平野部に最大規模の恵解山古墳が築かれる。中期末から後期には一転して小集団の首長墓が見られるようになり、終末期には各グループに古代寺院が造営されている。

井ノ内車塚古墳は、4つのグループのうち小畑川右岸から西山山地裾部の長岡グループに属する。後期前半の前方後円墳であり、西から東方向へ緩やかに傾斜する標高48m前後の低位段丘1上に前方部を南に向けて立地している。

周辺の古墳・古墳群（第4図）

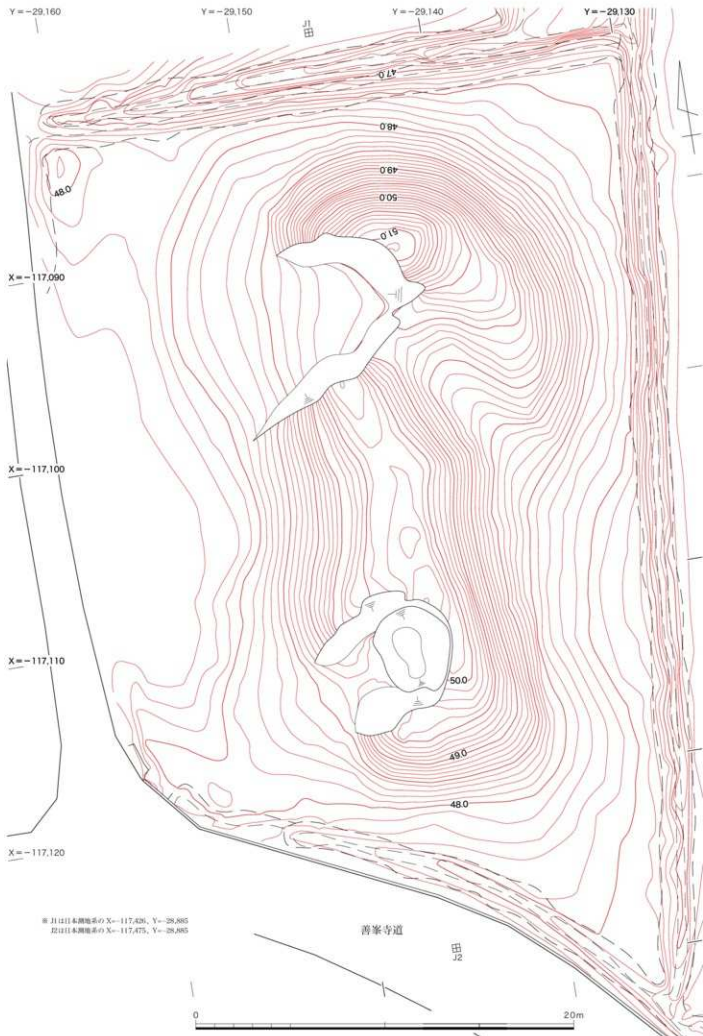
前述したように井ノ内車塚古墳の周辺では、古墳時代中期末から後期を中心とする大小の古墳が分布調査や発掘調査などで確認されている。また、江戸時代から明治時代の絵図や地籍図、地誌などの歴史資料にも、古墳の存在を示唆する内容が見られることから、さらに多くの古墳が存在した可能性が高い。以下では、そうした古墳を紹介してみたい。

芝古墳（芝1号墳） 京都市西京区大原野石見町に所在する全長約32mの前方部を南に向けた前方後円墳である。京都市文化市民局による発掘調査によって、外表施設として埴輪、周溝を備え、後円部のみ2段築成となる可能性が示されている。埴輪は、普通円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪のみであり、形象埴輪はこれまでのところ確認されていない。造り出しは備えていないが、後円部東側で陸橋と考えられる張り出しが確認されている。埋葬施設は右片袖式の横穴式石室であり、石室の平面形態や出土遺物などから、井ノ内稲荷塚古墳に先行して築造されたことが明らかにされた⁽³⁾。

井ノ内稲荷塚古墳 長岡京市井ノ内小西に所在する全長46mの前方部を南東に向けた前方後円墳である。これまでに、5次にわたる発掘調査が実施されており、段築、葺石、埴輪を有しないこと、埋葬施設は後円部に右片袖式の横穴式石室、前方部に木棺直葬の埋葬施設が確認されている。横穴式石室から、装身具、武器、武具、馬具、工具、土師器、須恵器などが、また木棺直葬墓からは装身具や武器、須恵器など多彩な副葬品が出土している⁽⁴⁾。

時期	平野	向日丘陵	長岡	大山崎
前期	1期	五輪塚 元輪府		
	2期	一本杉塚 寺ノ内塚 北山		
	3期	百々塚 妙高山	長法寺南塚	埴野1
	4期	天聖の社 石山古墳	今宮車塚	
中期	5期	彌山 牛廻り	カサキ塚 藤原山古墳 今宮庄ノ内 高野前	
	6期			
	7期	下山田原 福丸塚 熊倉3		
	8期	下山田原 下野塚 野塚	井ノ内 埴野1 埴野2 芝古墳(芝1) 井ノ内車塚古墳	
後期	9期	南本塚 物産女塚	芝 井ノ内稲荷塚	
	10期	天鼓森		
終末期	標原寺	宝雲院南塚	今宮大塚 乙訓寺 山崎南寺	

第3図 乙訓地域の主な古墳編年表



※ 井山日本測地所の X=-117,426, Y=-29,895
 足山日本測地所の X=-117,475, Y=-29,895

第6図 井ノ内車塚古墳墳丘測量図 (1/200)

-2調査区)の軸に沿った2箇所に調査区を設定して行われた。調査では墳丘の大部分が盛土によることが明らかになり、墳丘裾部の盛土から全長36mに復元された。また、周溝の存在が明らかになり、埴輪片が出土するなどの成果が得られた。この調査では、後円部と前方部の攪乱坑の壁面精査も実施された。調査は、福永伸哉氏(大阪大学助教授・当時)と清家章氏(同助手・当時)が担当し、概要報告は福永・清家・藤井章徳・長友朋子・惣那敏三・寺前直人の各氏で纏められた。

第4次調査(2011(平成23)年9月14日～10月26日、調査面積38㎡) 第4次調査以降は、国庫補助事業として長岡京市教育委員会から委託を受けた財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが調査を実施した。調査区は、後円部南東側のくびれ部(4-2調査区)と前方部の南東隅(4-1調査区)に設定した。墳丘盛土の構築状況が明らかになり、4-2調査区では埴輪片がまとまって出土するなどの成果が得られた。⁽⁹⁾調査は山本輝雄が担当した。

第5次調査(2012(平成24)年7月9日～9月17日、調査面積87㎡) 後円部の北東側(5-1調査区)と前方部東側(5-2調査区)に調査区を設定した。5-2調査区では前方部東側面の裾部と盛土の状況が明らかになり、裾部に樹立されたと考えられる埴輪がまとまって出土するなどの成果が得られた。⁽¹⁰⁾調査は山本が担当した。

第6次調査(2013(平成25)年8月7日～10月2日、調査面積63㎡) 墳頂部(6-1調査区)と西側くびれ部(6-2調査区)に調査区を設定した。6-2調査区では、西側くびれ部とその裾部に樹立されたと考えられる埴輪片がまとまって出土した他、後円部に盛土で付設された造り出しの可能性のある高まりを検出した。⁽¹¹⁾調査は原秀樹が、概要報告を山本が担当した。

第7次調査(2014(平成26)年8月28日～10月17日、調査面積78㎡) 後円部北西側(7-1調査区)、後円部西側(7-2調査区)、前方部西側(7-3調査区)に調査区を設定した。7-2調査区では、第6次調査で検出された盛土による高まりが後円部の西側に付設された造り出しであることを明らかにした。⁽¹²⁾調査は中島皆夫が担当した。

第8次調査(2015(平成27)年8月20日～11月25日、調査面積148㎡) 調査に先駆けて10cm等高線による墳丘などの再測量作業を行った。調査区は前方部南東側(8-1調査区)、後円部南東側(8-2調査区)、後円部南東側の攪乱坑内(8-3調査区)、後円部西側の攪乱坑内(8-4調査区)、造り出し(8-5調査区)に設定した。8-1調査区では前方部前面の周溝が途切れること、8-5調査区では後円部に付加された造り出しの全貌を明らかにした。また、8-3調査区において横穴式石室の存在を示す赤色顔料と須恵器片を確認した。⁽¹³⁾調査は中島が担当した。

また、2016(平成28)年2月22・23日には、金田明大氏、西村康氏、石松智子氏(国立文化財機構奈良文化財研究所)の協力により地中探査が行われた。

第9次調査(2016(平成28)年10月3日～12月21日、調査面積53㎡) 8-3調査区を拡張し、横穴式石室の推定位置に調査区を設定した。調査では、横穴式石室玄室奥壁と東側壁の一部を確認し、右片袖式の横穴式石室の存在を明らかにした。⁽¹⁴⁾調査は中島が担当した。

第3章 古墳に伴う出土遺物

第1節 横穴式石室の副葬品

埋葬施設は、8-3調査区と9調査区の2箇所で開催した調査により横穴式石室であることが判明したものである。横穴式石室は後部に設けられていて、南東方向に開口する右片袖式と考えられているが、天井石はもとより石室石材の大半が大きく抜き取られていることなど、後世に大きな改変を受けていたため、旧状を保持している部位は玄室の基底石などごくわずかであった。したがって、副葬品と考えられる出土遺物は、埋葬時の原位置を留めた状態のものが皆無であることはもとより、その種類や数量も極めて乏しくて限定されているものと考えられる。以下では、出土した遺物の概要を説明する。

1. ガラス製管玉（第8図、図版1）

9調査区から須恵器類に共伴して出土した装身具であり、土器以外の副葬品としては唯一のものである。管玉は、円筒形を呈する全長1.9cm、径0.6cmの大きさがある完形品で、孔径は約0.2cmであった。気泡を含み、全体的に風化していることによって粗雑な感じになっている。表面は平滑ではなく、面取りされたようにうっすらと数条の稜がついていた。色調は濃紺色を呈しており、おそらく鉛ガラスではないかと考えられる。

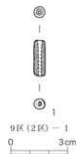
2. 須恵器（第9図、附表-2、巻頭図版1、図版1・2）

須恵器には、杯身・杯蓋・無蓋高杯・短頸壺・広口壺・有蓋脚付壺・蓋・甕・器台・甕などの器種を確認することができた。いずれも破損品であって、完形品はもとより全形の分かる個体は少数であった。以下、器種ごとに分けてその概要を説明する。

杯身（6・7）は、蓋の受け部から内傾気味に立ち上がる口縁部と丸味を帯びた底部からなる形態で、口縁端部を丸くおさめ、口径11.5cm前後、器高4.4cm前後の法量があった。7の口縁部外面には、短く平行する2条の線刻が認められた。底部外面の回転ヘラケズリは、底部の半分程度の範囲であり、ともに反時計回りに施されていた。外面に自然軸が付着しているが、さらに7では火燂とみられる痕跡も認められた。

杯蓋（2～5）は、垂直に近く立ち上がる口縁部と比較的平坦な天井部からなる形態で、天井部と口縁部の境には稜を有する。いずれも口縁端部内面に明瞭な段をもち、口径13.6cm前後、器高4.3cm前後の大きさがある。天井部外面の回転ヘラケズリは、不明な5以外は反時計回りである。天井部を中心とする外面には、自然軸の付着が認められた。

無蓋高杯（10）は、脚部を欠失した杯部の破片である。口縁部が外傾気味に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめている。口縁部の中程に



第8図 ガラス製管玉
実測図(1/2)

段を有し、段よりも下には柳描波状文を1条施している。口縁部の内外面は回転ナデを施しているが、底部外面は回転ヘラケズリ調整している。底部外面には、脚部の透し孔を開ける際につけられた傷が2箇所で確認でき、その位置によって欠損した脚部の透し孔は3方であったと考えられる。

短頸壺(13)は、肩が大きく張る体部と、内傾気味に短く立ち上がる口縁部からなる壺で、底部は大きく欠損している。口縁端部を丸くおさめ、口径8.3cm、体部最大径は13.3cmに復元することができた。

蓋(8・9)は、深みのある椀を倒立させた形態で、天井部の頂部につまみを貼り付け、口径9.2cm前後、器高4.6cm前後である。おそらく口径が小さな短頸壺の蓋になるのではないかと考えられる。口縁部と回転ヘラケズリ調整した天井部との境に段をもち、口縁端部は9が緩やかに外反して丸くおさめているのに対して、8は内傾する段をもつ。つまみも8と9とでは異なっていて、8は径3.1cmで、中央部が大きく窪んでおり、一方、9は径が2.5cm、中央部が窪まずに平坦に仕上げられていた。ともに外面全体には、自然釉が付着している。

有蓋脚付壺(14)は、球形に近い体部から外上方に開く口頸部がつき、杯身のような蓋を受ける立ち上がりをもつ口縁部からなる形態で、欠損しているが体部の下半には脚部をそなえているものと考えられる。頸部の外面には、沈線と柳描列点文をそれぞれ2条ずつ施して加飾している。頸部から体部にかけての外面には、自然釉の付着が認められる。

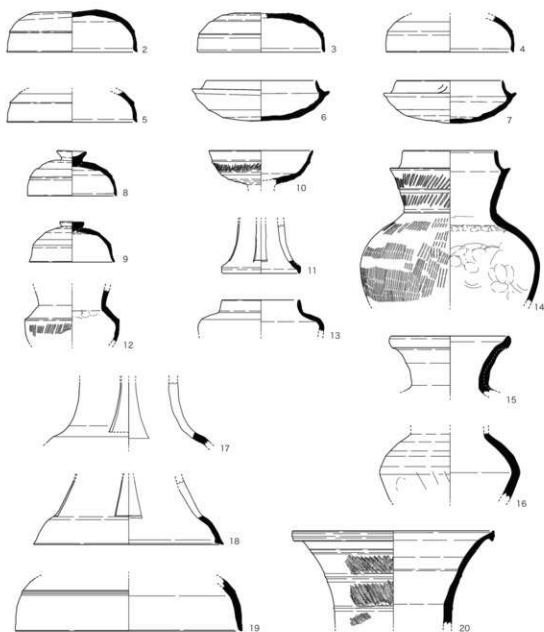
脚部片(11)は、長方形の透し孔があり、脚部部の外面下半には自然釉が付着する。高杯の脚部の可能性が濃厚だが、あるいは14のような有蓋脚付壺の脚部と考える余地もある。

広口壺には、口縁部片(15)と体部片(16)がある。15は外上方に開く口縁部をもち、口縁端部を直立気味に肥厚させている。内外面には、緑灰色を呈した自然釉が厚く付着している。16は球形に近い体部の破片で、体部内面の下半は未調整である。体部上位の外面には、自然釉の付着が認められた。

壺(12)は、口縁部と底部を欠失する頸部から体部にかけての破片である。体部は肩が張り、その下位には柳描列点文を施している。体部外面の上位にのみ自然釉の付着を認めることができた。

器台(17～19)は、高杯形と考えられる器台の脚部片であり、長方形と推察される透し孔を穿っている。脚部部が大きく膨らむ形態で、19の外面には沈線を3条巡らせている。裾部の径は18が20cm、19が24cmに復元することができた。いずれの外面にも、自然釉の付着を認めることができた。

甕(20)は、大きく外上方に延びる口縁部から頸部にかけての破片で、口縁端部を上下に拡張させている。頸部の外面には、断面三角形を呈する低い突帯を3条以上巡らせ、突帯間にそれぞれ柳描波状文を施して加飾している。口径は21.3cmに復元でき、胎土は比較的緻密で、色調は灰色を呈し、硬質に焼成されている。内外面には、自然釉の付着が認められる。



8-3区-2・6・14・17・20 9区(1区)-3・4・7・8・12・18
 9区(2区)-9・11・13・15・16・19 9区(4区)-5

0 20cm

第9図 横穴式石室出土の須恵器実測図(1/4)

付表-2 横穴式石室出土の須恵器観察表

種類	器形	番号	法 量 (cm)		色 調	調 査 察	出土調査区	備 考
			口径(径)	器高(幅) 底径(厚)				
須 恵 器	杯蓋	2	13.8	4.5	- 灰色	外面：口縁部は回転ナデ、天井部はヘラケズリ 内面：回転ナデ	8-3 調査区	口縁部外面の一部に自然釉が付着
		3	13.6	4.2	- 暗灰色	外面：口縁部は回転ナデ、天井部はヘラケズリ 内面：回転ナデ	9 調査区 (1 区)	外面の一部に自然釉が付着
		4	13.5	(3.8)	- 灰色	外面：口縁部は回転ナデ、天井部はヘラケズリ 内面：回転ナデ	9 調査区 (1 区)	
		5	13.8	(3.4)	- 褐灰色	外面：口縁部は回転ナデ、天井部はヘラケズリ 内面：回転ナデ	9 調査区 (4 区)	
	杯身	6	11.7	4.3	- 灰色	外面：回転ヘラケズリの底部以外は回転ナデ 内面：回転ナデ	8-3 調査区	外面に自然釉が付着
		7	11.3	4.5	- 灰色	外面：回転ナデと回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	9 調査区 (1 区)	口縁部外面にヘラ記号
	蓋	8	9.4 つまみ径 3.1	4.8	- 灰色	外面：口縁部は回転ナデ、天井部は回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	9 調査区 (1 区)	外面に自然釉が付着
		9	9.0 つまみ径 2.5	4.3	- 暗灰色	外面：口縁部は回転ナデ、天井部は回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	9 調査区 (2 区)	外面に自然釉が付着
	無蓋高杯	10	11.0	(3.7)	- 灰色	外面：回転ナデと回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	9 調査区 (2 区)	口縁部外面に飾描波状文を施す 内外面の一部に自然釉が付着
	脚部	11	-	(5.3)	9.0 灰色	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	9 調査区 (2 区)	裾部外面に自然釉が付着
	腹	12	-	(5.3)	- 淡褐灰色	外面：回転ナデ 内面：口頸部は回転ナデ、体部はナデ	9 調査区 (1 区)	体部外面に沈線と飾描列点文を施す 頸部から体部にかけて自然釉が付着
	短頸壺	13	8.3	(3.4)	体部 最大径 13.3 灰色	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	9 調査区 (2 区)	体部に自然釉が付着
	有蓋脚付壺	14	10.0	(16.2)	体部 最大径 19.0 灰色～ 青灰色	外面：口縁部から頸部の中間ナデ、体部は平行タタキ 内面：口縁部から頸部の中間ナデ、体部はナデ	8-3 調査区	頸部に沈線と飾描列点文を施す 頸部から体部にかけて自然釉が付着
広口壺	15	12.3	(6.2)	- 灰褐色	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	9 調査区 (2 区)	内外面ともに自然釉が厚く付着	
	16	-	(7.2)	- 暗灰色	外面：回転ナデ 内面：体部上半が回転ナデ、下半は未調整	9 調査区 (2 区)	肩部外面に自然釉が付着	
器台	17	-	(6.7)	- 灰色	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	8-3 調査区	脚部に長方形の透孔 外面に自然釉が付着	
	18	-	(6.9)	20.0 灰色	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	9 調査区 (1 区)	脚部に長方形の透孔 外面に自然釉が付着	
	19	-	(5.6)	24.0 褐灰色	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	9 調査区 (2 区)	外面に自然釉が付着 裾部外面に沈線を3条施す	
甗	20	21.3	(10.0)	- 灰色	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	8-3 調査区	頸部外面に突帯と飾描波状文を施す 内外面ともに自然釉が厚く付着	

第2節 墳丘出土の土器

墳丘の各所から出土している古墳時代の遺物のうち、大半を占めているのが円筒や形象などの埴輪類であり、次いで須恵器や土師器などの土器類が続き、他に少量の土製品がある。そのうち土器類については、もちろん墳丘上に供献されたと考えられるもの、石室が破壊された際に副葬品の一部が粉れ込んだものなど、いくつかの可能性を想定することができるが、旧状を保持した状態のものはなく、両者を区別することは困難であった。

1. 須恵器（第10図21～33、附表-3、図版2）

須恵器には、杯身・杯蓋・広口壺・脚付壺・高杯ないし壺の蓋・甕・器台・甕などの器種を確認することができた。

杯蓋は、21が口縁部から天井部にかけての破片で、両者の境に稜は認められない。22はほぼ完形に復元できた個体で、口縁部と天井部との境に稜があり、口縁端部の内面に段を有する。外面に施された回転ヘラケズリは、天井部のほぼ全体におよび、ケズリの回転方向は反時計回りである。外面の一部に自然軸の付着が認められた。23は器高が低く、口径が8.7cmに復元できる小型の杯G蓋で、口縁部内面のかえりが受け部よりも下に出る形態。頂部を欠失しているため、つまみの有無は不明で、天井部の調整は回転ヘラケズリによる。杯Hの身になる可能性も考えられる。21・23が後円部の5-1調査区、22が西くびれ部付近の6-2調査区から出土した。

杯身には、5-1調査区から出土した24、西くびれ部にあたる7-2調査区出土の25、それに東側前方部に設定した5-2調査区の26などがある。24は器高が5.1cmとやや高く、口径が12.4cmある口縁部の端部内面に段を有している。底部外面は、反時計回りの回転ヘラケズリを施して調整し、内面の中心には同心円の当て具痕が明瞭に残る。25は、口縁部が欠損しているため、口径や器高の詳細は不明である。底部外面に施された反時計回りの回転ヘラケズリは、底部の半分ほどでその範囲は狭い。26は、杯Gの身と考えられるもので、口縁部は歪んでいる。底部外面はヘラオコシのままで、回転ヘラケズリによる調整をしていない。天井部がやや丸くなっているので、杯H蓋と考える余地も充分にありうる。

27は、有蓋高杯もしくは短頸壺の蓋と考えられる天井部のつまみ片である。つまみは扁平で、頂部は大きく窪んでいる。外面に付着した自然軸のため不明瞭ではあるが、天井部に櫛描列点文とみられる痕跡が観察できた。前方部東隅部の4-1調査区から出土した。

28は、甕の頸部と考えられる破片で、4-2調査区からの出土。外面には、櫛描列点文が上下2段に施されており、内外面ともに自然軸が付着していた。

広口壺には、29が頸部、30が底部、そして31のほぼ完形に復元できた個体があり、29・30は東くびれ部付近の4-2調査区、31は西造り出し部の8-5調査区から出土している。29は、口頸部外面に櫛描波状文を施し、自然軸が内外面ともに認められた。30は、丸味を帯びた底部で、外面を反時計回りにヘラケズリ調整して仕上げている。31は、大きく外反する

口頸部をもち、口縁端部は上下に拡張させる。頸部外面には、櫛描波状文を2段にわたって施し、体部の上半部外面はカキメ調整によって仕上げている。体部の内面は、ナデを施すことによって同心円の当て具痕を消している。

32は、器台の杯部と脚部の接合部と考えられる破片である。脚部には、方形とみられる透孔が開けられているが、その数は不明である。脚部との接合部にあたる杯部外面には、タタキの痕跡が認められた。8-5調査区からの出土。

甕(33)は、4-2調査区から出土した口径が25.4cmに復元できる口縁部片で、口縁端部をやや肥厚させている。内外面の一部には、自然釉が付着していた。

2. 土師器(第10図34・35、附表-3、図版2)

土師器には、ほぼ完形に復元できた個体と口縁部の破片がそれぞれ1点ずつあり、ともに4-2調査区から出土したものである。

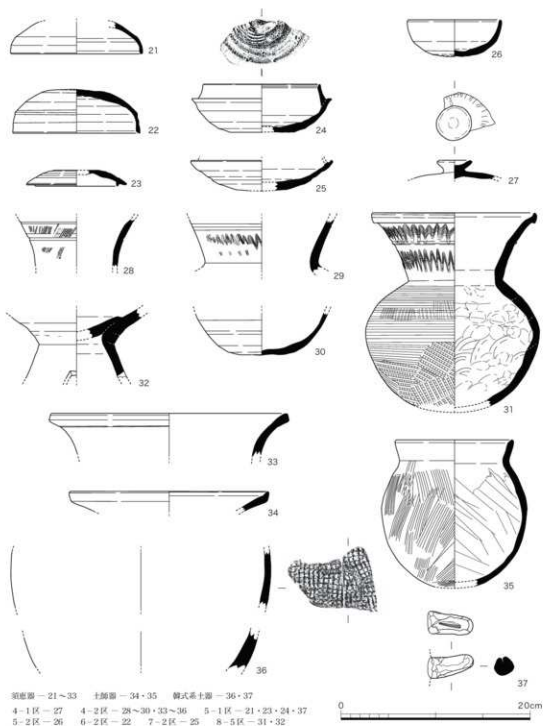
34は、口径が21.2cmに復元できる口縁部片で、口縁端部を上方向につまみ上げている。胎土は緻密、色調は淡赤褐色を呈しており、内外面ともヨコナデにより調整している。

35は、ほぼ全形に分かる状態に復元できた個体で、普通円筒埴輪の破片などと共に出土した。くの字状に緩やかに外反する口縁部とやや胴長の体部をもつ形態で、口縁端部内面には段を有し、底部は丸底である。外面の調整は、体部から底部にかけて斜め方向にハケメを施し、口縁部はヨコナデ調整してハケを消し去っている。内面は、口縁部をヨコナデ調整、体部以下は斜め方向に板状のナデを加えて仕上げている。胎土は比較的緻密で、硬質に焼成され、色調は赤褐色を呈している。口径12.3cm、器高15.5cm以上、体部最大径は15.4cmに復元することができた。

3. 韓式系土器(第10図36・37、附表-3、図版2)

36は、全体の形態は不明であるが、壺の体部と考えられる破片で、土師器の場合と同じく4-2調査区から出土した。全体に摩滅しているが、内面はナデ調整、外面には格子目のタタキ痕が認められた。胎土は精良、緻密で、土師質に焼成されているが、堅く焼き締められている。色調は、淡灰褐色を呈する。

37は、5-1調査区で出土した甕の把手と考えられる破片である。把手は、やや先が細くなる棒状の形態で、横断面は円形を呈し、上部の中央に切り込みを浅く入れる特徴がある。胎土に砂粒を含んでおり、軟質(土師質)に焼成されている。色調は、淡褐色を呈する。



第10図 墳丘出土の古墳時代の土器実測図 (1/4)

付表-3 墳丘出土の古墳時代の土器観察表

種類	器形	番号	法 量 (cm)			色 調	調 整	出土調査区	備 考
			口径(φ)	器高(㎜)	底径(φ)				
須恵器	杯蓋	21	14.0	(3.4)	-	灰色	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	5-1 調査区	
		22	13.5	6.5	-	暗青灰色	外面：口縁部は回転ナデ、天井部は回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	6-2 調査区	外面に自然軸が付着
	杯G蓋	23	8.7	1.8	-	灰色	外面：天井部は回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	5-1 調査区	
	杯身	24	12.4	5.1	-	灰色	外面：口縁部は回転ナデ、底部は回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、同心円の当て具痕	5-1 調査区	
		25	-	(4.1)	-	暗灰色	外面：底部は回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ	7-2 調査区	
	杯G	26	10.0	3.9	-	青灰色	外面：口縁部は回転ナデ、底部はヘラオコシ 内面：回転ナデ	5-2 調査区	口縁部が歪む
	蓋	27	つまみ径 3.7	(1.9)	-	青灰色	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	4-1 調査区	外面に自然軸が付着
	壺	28	-	(5.0)	-	青灰色	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	4-2 調査区	内外面に自然軸が付着
	広口壺	29	-	(5.6)	-	灰色	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	4-2 調査区	口頸部に柳葉波状文を施す
		30	-	(4.4)	体部 最大径 18.5	青灰色	外面：回転ヘラケズリ 内面：回転ナデ、ナデ	4-2 調査区	
		31	17.2	(20.5)	-	灰色	外面：口縁部は回転ナデ、体部はタタキの後にカキメを施す 内面：口縁部は回転ナデ、体部はナデで同心円の当て具痕を消す	8-5 調査区	頸部外面に柳葉波状文を2段施す
	器台	32	-	(7.4)	-	黄灰色	外面：回転ナデ、杯部にタタキ痕 内面：回転ナデ	8-5 調査区	脚部に透孔
	甗	33	25.4	(4.6)	-	灰色	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	4-2 調査区	内外面の一部に自然軸が付着
土師器	壺	34	21.2	(2.1)	-	淡赤褐色	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	4-2 調査区	
		35	12.3	(15.5)	体部 最大径 15.4	赤褐色	外面：口縁部はヨコナデ、体部～底部は斜め方向のハケメ 内面：口縁部はヨコナデ、体部に斜め方向の板状のナデ	4-2 調査区	
輪式糸土器	壺	36	-	(10.0)	体部 最大径 27.5	淡灰褐色	外面：格子目タタキ 内面：ナデ	4-2 調査区	外面の底部付近に痕がわずかに付着
	瓶	37	(4.8)	把手径 1.9～ 2.4	-	淡褐色	外面：ナデ	5-1 調査区	瓶の把手、上部に切り込みを入れる

第3節 円筒埴輪

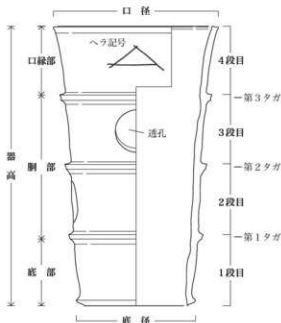
円筒埴輪は墳丘裾部の各調査区で出土している。とくに多く出土したのが後円部西側に付加された造り出しから西側くびれ部にかけての調査区（6-2、7-2、8-5調査区）であり、次いで東側くびれ部から前方部東側の調査区（4-2、5-2調査区）であった。ここでは、普通円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪の順に概要を記載する。なお、種別不明の円筒埴輪、ヘラ記号は、普通円筒埴輪の項にまとめて記載した。また、円筒埴輪に含めた第20図102～104・109などは、形象埴輪の基部の可能性がある。

1. 普通円筒埴輪（第11～15・19～21図、附表-4・6・7、巻頭図版1、図版3～6・8）

形態と法量（第11図） 普通円筒埴輪の基本的な形態は、底部から口縁部に向かって緩やかに外傾するか直線的に立ち上がる筒状を呈す。体部は3条のタガによって4段に区切られ、2段目と3段目に2個一対の透孔を直交する位置に配置する。底部から口縁部まで全形を窺えるものは9個体（第12図38・40～43、第15図57～60）を数える。焼成時の焼け歪みにより、口縁部が大きく拉げて長楕円形となるもの（第12図38・41、第15図59・60）が見られた。また、底部から上が片側へ歪むもの（第19図89）も認められる。

法量は、器高が39.6～50.8cm、口径17.6～34.6cm、底径12.4～21.6cmと大きな幅が認められる。口径については、前述した焼け歪みによって口縁部の平面形が楕円形を呈する個体や、直立する口縁部形態の個体などを除外すれば、平均的な口径は23.2～27.4cmであった。底径については、径の小さいものが焼け歪みなどによって底部から2段目にかけて大きく開くもの（第15図58）がある他、形象埴輪の基部と考えられるものもあるため判然としない。器高について各段に分けて記載すれば、底面から第1タガ上端部までの高さは7.3～14.6cm、第1タガ上端部から第2タガ上端部までの高さが8.0～14.2cm、第2タガ上端部から第3タガ上端部までの高さが9.5～14.0cm、第3タガ上端部から口縁部までの高さが7.5～12.4cmであった。1～4段目の高さが均一に近いが、1・4段目がやや低い個体が多いことから、全体的に見れば、第12図42・43のようなタガ間が10cm前後で器高40cm程度の低い個体から、第12図38・41のようなタガ間が13cm前後で器高50cmを超える個体までの差が認められた。

内外面の調整手法 外面調整は、基本的にタテハケを用いるが、タテハケに部分的



第11図 普通円筒埴輪模式図

なナデを加えるものもある。タテハケには、左上がりものと右上がりもの二者があるが、前者の割合が多数を占める。図示したものの中では、第13図48・50、第14図52・55、第15図61、第19図80・84・90・91、第20図96・106・107の12個体に右上がりのタテハケが施されていた。1段目の下半には、板状工具などで押圧を加えた底部調整を行う個体があるが、第12図42・43や第15図57・58のように比較的器高が低く歪んだ形態のものが多い傾向にある。外面のハケの条数は、比較的細かいもの（8本前後/cm）が多数を占めているが、粗いもの（5本前後/cm）や非常に細かいもの（10本以上/cm）も認められた。

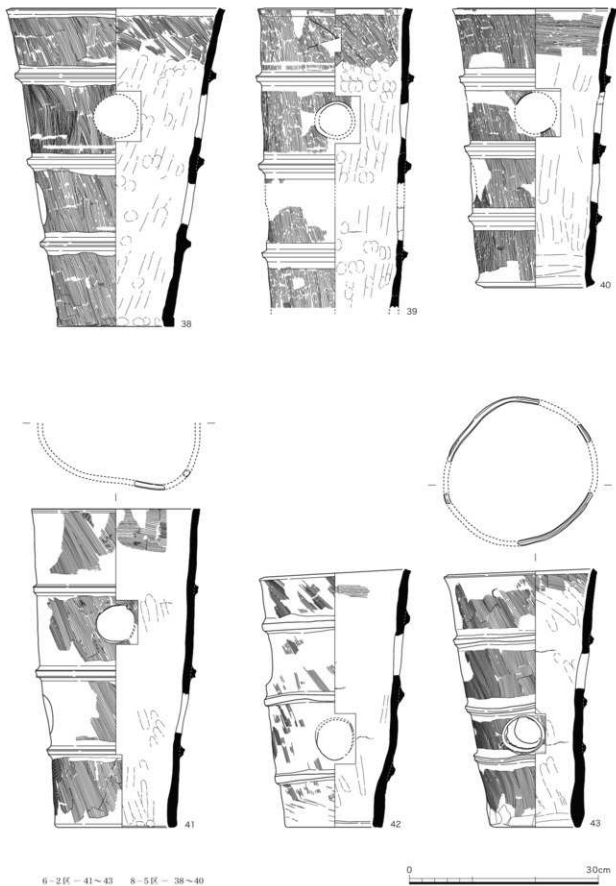
内面調整は、基本的に底部から上へタテないしナメ方向にナデを加えて仕上げ、口縁部のみにヨコないしナメ方向のハケを加えるものが多数を占める。一方、口縁部下半より下の内面にナデではなく、タテハケを施すものを5個体（第13図45・50、第19図80・90・91）確認できた。このうち、45を除く4個体の外面調整が右上がりのタテハケであり、関連を窺うことができる。なお、この一群でも口縁部内面上半には、ヨコ方向を主体としたハケが施される。また、内面上半の一部にナメ方向のハケを施すものが3個体（第13図46・49、第20図98）あるが、これらの外面調整は左上がりのタテハケであった。一方、第15図57・58のように口縁部上半の内面にハケではなく、ヨコないしナメ方向のナデを施すものが8個体認められた。ハケの条数については、比較的細かいものが多い。

底部から口縁部下半までの内面では、粘土紐積み上げ痕を残す個体が散見された。第19図89のように痕跡が比較的明瞭な個体では、底部の基部に幅5cm程の粘土帯が置かれ、その上に幅2.5cm前後の粘土紐を接合面が内傾するように積み上げていることが分かった。

口縁部の形態と調整 口縁部は、外傾する面をもつものが大半を占め、第14図56のように丸くおさめるものは非常に乏しい。端面は、水平のものと外傾するものがあり、ヨコナデを強く施すことにより凹むものが多い。また、このヨコナデが端部近くの内外面に及び、外面のタテハケや内面のハケ・ナデを消すものも数多く認められる。第15図の60は、焼け歪みによって口縁部の平面形が長楕円形を呈する。この個体では口縁端部に半径2cm程の窪みが穿たれているが、他に類例は無く、意図的なものなのか判然としなかった。

タガの形態と調整 タガは断面形状が台形を呈しているが、全体がやや下方へ傾くため、器壁からの突出はタガ上端がやや大きい。タガの突出は、全体的に低く、貼り付け時のヨコナデによって頂部の窪んでいるものが多い傾向にある。また、タガがやや不整形で端面の幅が狭い個体も認められた。貼り付け時のヨコナデはタガ上下の器壁にも及んでいるが、全周後にヨコナデが重複し途切れる箇所を残すものも確認できた。なお、断続ナデ技法を施す例は認められず、タガの明瞭な剝離面を残す例も見られなかった。一方、内面側では、タガ貼り付け時のエビオサエ痕跡を残す個体が散見された。

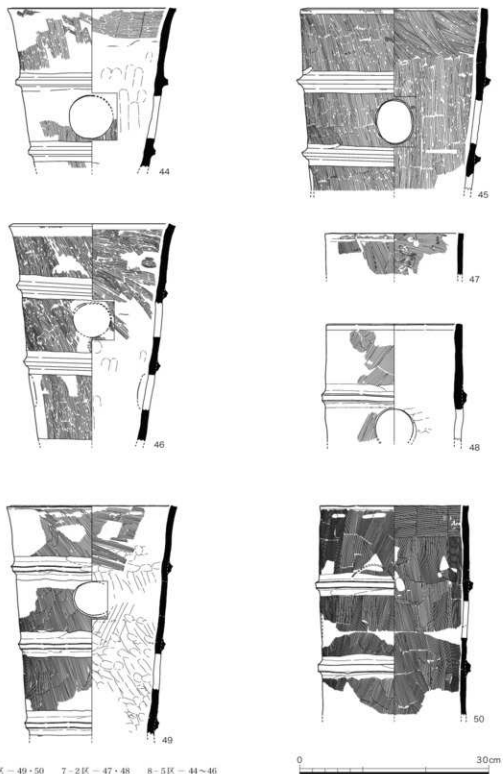
透孔の形態 透孔の形状は円形であり、2段目と3段目に2孔ずつ直交して配される。透孔は、タガ間の中央に配されるべきものであるが、上下のタガに近く偏在するものも散見される。とくに、タガ間の上に偏在する透孔では、タガ下方のヨコナデを切る例が認められた。



6-2区-41~43 8-5区-38~40

第12図 普通円筒埴輪実測図1 (1/6)

底部の形態と調整 底部は第1タガより下の器壁が厚くなり、底面付近では口縁部器壁の1.5倍程度の厚さとなるものが多い。直線的に底面に至るもの他、第19図77・83のように底部端付近が外側へ大きく張り出すものも見られる。底部調整では、底面にナデ調整を施すものが散見されるが、未調整で終えるものも多い。底面が未調整のものでは、埴輪成形時に敷かれ



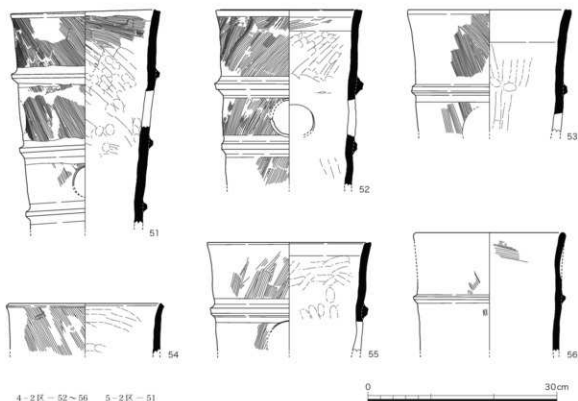
第13図 普通円筒埴輪実測図2 (1/6)

ていたであろう草木の圧痕を残すものが見られた。第19図の77では、底面から半径3cm程の挟りが認められたが、これが棒状の工具によるものかは分からなかった。また、確認例は少ないが粘土帯の接合痕跡を残すものも認められた。

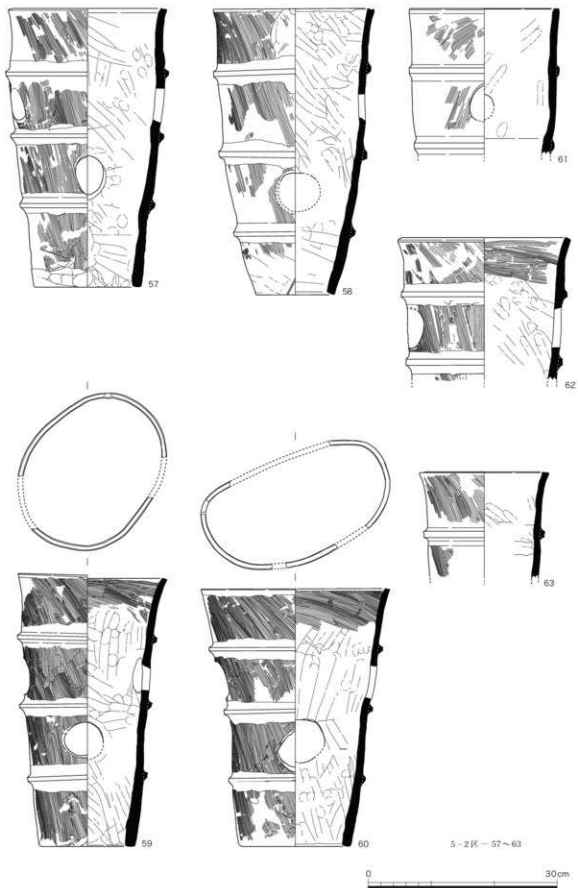
焼成 黒斑を有するものが無いことから、野焼きではなく、すべて窯害による焼成であることが分かる。硬質に仕上がっているものが主体を占めているが、軟質のものも少なからず認められる。なかには完全に須恵質に焼け上がった結果、外面の色調が茶褐色や灰褐色を呈するものも僅かではあるが認められる。

胎土 長石・石英・チャート・赤色粒子などを含むものが目立ち、まれに角閃石・雲母を含むものが見られる。砂粒の大きさは5mm以下の個体が多く、選別された胎土であると考えられるが、中には2cmを超える礫を含む個体が見られた。

ヘラ記号 ヘラ記号は、第12・21図39「×」か、第12図43「C字形」、第13・21図50「半円形」、第15・21図58「△」が2箇所、第15図61「斜線」、そして、断片で詳細は不明であるが第21図の110～122で確認することができた。ヘラ記号の配置箇所が分かるものは全て口縁部であり、2段目や3段目に施す例は確認できない。第3タガ上方のヨコナデと重複するものがあり、ヘラ記号はナデを切って施されていた。第12図41の底部外面には2条の細線が見られたが、線の太さなどヘラ記号とは趣きを異にするものであった。なお、これまでのところ、ヘラ記号の有無や種類と埴輪全体の形状や調整手法の特徴には有意な関連性を見い出せていない。



第14図 普通円筒埴輪実測図3 (1/6)



第 15 图 普通門筒埴輪実測图 4 (1/6)

付表-4 普通円墳墳輪観察表

番号	38		39		40	
法量	器高 50.8cm 口径 (34.6) cm 底径 (18.7) cm	4段目高 10.4cm 3段目高 13.8cm 2段目高 13.1cm 1段目高 13.5cm	残存高 47.7cm 口径 24.6cm	4段目高 10.9cm 3段目高 14.0cm 2段目高 14.1cm 1段目高 8.7cm 以上	器高 44.5cm 口径 26.0cm 底径 18.9cm	4段目高 10.9cm 3段目高 11.1cm 2段目高 11.1cm 1段目高 11.4cm
調整等	外面	内面	外面	内面	外面	内面
4段目 口縁部	口縁端部ヨコナデ・以下にタテハケ(左上がり)・一部にタテハケとヨコナデ	口縁端部ヨコナデ・口縁部上半にタテハケ(左上がり)・下半にタテナデ(右上がり)・部分的にユビオサエ	口縁端部ヨコナデ・以下にタテハケ(やや左上がり)・下半に一部ハケ後ヨコナデ・へう記号「x」か	口縁端部ヨコナデ・以下にタテハケ(左上がり)	口縁端部ヨコナデ・以下にタテハケ(左上がり)・一部にタテナデとヨコナデ	口縁端部ヨコナデ・口縁部上半にヨコハケ・下半にタテナデ(右上がり)・粘土組織み上げ痕跡
3段目	タテナデ(左上がり)・一部にヨコナデ・欠損のため透孔未確認	タテナデ(右上がり)・タガ裏周辺にユビオサエ	タテナデ(やや左上がり)・透孔(直径6.0cm、ほぼ中央に配置)	タテナデ(やや右上がり)・タガ裏付近にユビオサエ・粘土組織み上げ痕跡	タテナデ(左上がり)・一部にヨコナデ・欠損のため透孔未確認	タテナデ
2段目	タテナデ(左上がり)・一部にヨコナデ・透孔(直径7.0cm、ほぼ中央に配置)	タテナデ(右上がり)・タガ裏周辺にユビオサエ	タテナデ(やや左上がり)・透孔(直径5.5cm以上、下方に配置)	タテナデ(やや右上がり)・部分的にユビオサエ・透孔(直径7.0cm、ほぼ中央に配置)	タテナデ(左上がり)・一部にヨコナデ・透孔(直径7.0cm、ほぼ中央に配置)	タテナデ(やや右上がり)
1段目 底部	タテナデ(左上がり)ハケメ6本/cm 底面未調整(草木の圧痕・モミ痕含む)	タテナデ(右上がり)・タガ裏周辺にユビオサエ・底部下半にユビオサエ	タテナデ(やや左上がり)ハケメ7本/cm	タテナデ(やや右上がり)・部分的にユビオサエ・粘土組織み上げ痕跡	タテナデ(やや左上がり)ハケメ8本/cm 底面未調整(草木の圧痕)	タテナデ(ほぼ上)・下部に横方向のケズリ(時計回り)
出土調査区	8-5調査区(Y-2・3・4、X-2区)		8-5調査区(Y-3・4区 埴輪集中部)		8-5調査区(I-3区)	
胎土	にぶい黄褐色	備考:全体形状の歪みで口縁が広がっている	精良		精良	
焼成	良好		良好(硬質)		不良	
色調	にぶい黄褐色		にぶい褐色		にぶい褐色・灰黄褐色	

番号	41		42		43	
法量	器高 50.5cm 口径 26.7cm 底径 18.2 ~ 19.4cm	4段目高 12.4cm 3段目高 13.2cm 2段目高 12.6cm 1段目高 12.3cm	器高 39.6 ~ 40.1cm 口径 24.0cm 底径 15.1cm	4段目高 7.5cm 3段目高 11.8 ~ 12.0cm 2段目高 12.0 ~ 12.5cm 1段目高 8.0 ~ 8.5cm	器高 41.0cm 口径 22.6 ~ 24.3cm 底径 14.4cm	4段目高 10.0 ~ 11.0cm 3段目高 10.8 ~ 11.1cm 2段目高 8.0 ~ 8.2cm 1段目高 10.8 ~ 11.5cm
調整等	外面	内面	外面	内面	外面	内面
4段目 口縁部	口縁端部ヨコナデ・以下にタテナデ(左上がり)	口縁部上半にヨコハケ・下半にヨコナデ・粘土組織み上げ痕跡	口縁端部ヨコナデ・以下にタテナデ(左上がり)	口縁部上半にヨコハケ・下半にナデ(方向不明)	口縁端部ヨコナデ・以下にタテナデ(左上がり)・へう記号「C」字彫	口縁端部ヨコナデ・口縁部上半にヨコハケ(やや左上がり)・下半にタテナデ(左上がり)
3段目	タテナデ(左上がり)・透孔(直径5.9 ~ 6.4cm、上方に配置)	タテナデ(やや左上がり)	タテナデ(左上がり)・透孔(直径6.0 ~ 6.7cm、やや上方に配置)	ナデ(方向不明)・粘土組織み上げ痕跡	タテナデ(左上がり)・透孔(直径5.8cm、ほぼ中央に配置)	タテナデ(左上がり)・粘土組織み上げ痕跡
2段目	タテナデ(左上がり)・透孔(直径6.2cm、ほぼ中央に配置)	タテナデ(やや左上がり)	タテナデ(左上がり)・透孔(直径6.0 ~ 7.2cm、下方に配置)	ナデ(方向不明)・粘土組織み上げ痕跡	タテナデ(左上がり)・透孔(直径5.9 ~ 6.9cm、ほぼ中央に配置)・タガ下のナデと重復	タテナデ(左上がり)・粘土組織み上げ痕跡
1段目 底部	タテナデ(左上がり)・下部にヨコナデ・2本の右上がりの組織目 ハケメ6本/cm 底面ナデ	タテナデ(やや左上がり)・下半にユビオサエ後ナデ	タテナデ(左上がり)・下部にタテナデ後板状工具による調整 ハケメ10本/cm	タテナデ(やや左上がり)・下部に板状工具による調整	タテナデ(左上がり)・下部に板状工具による調整 ハケメ7本/cm	タテナデ(左上がり)・下部にヨコナデ
出土調査区	6-2調査区(埴輪B群)		6-2調査区		6-2調査区(A群B群)	
胎土	粗	備考:口縁部が増円形に歪む	精良		やや精良	備考:口縁部がやや増円形
焼成	良好(硬質)		不良		良好(硬質)	
色調	灰白褐色		灰白褐色		茶褐色	

番号	44		45		46	
法 景	残存高 25.4cm 口径 26.6cm	4 段目高 11.4cm 3 段目高 11.1cm	残存高 28.9cm 口径 (29.9) cm	4 段目高 11.4cm 3 段目高 11.5 ~ 12.9cm	残存高 34.7cm 口径 25.0cm	4 段目高 9.8 ~ 10.4cm 3 段目高 11.8 ~ 12.0cm 2 段目高 12.7cm 以上
調整等	外面		外面		外面	
4 段目 口縁部	口縁端部ヨコナデ・ 以下にタテハケ (や や左上がり)	口縁端部ヨコナデ・ 口縁部上半にヨコハ ケ (左上がり)・下 半にタテナデ (ほぼ 上)・粘土組織み上 げ痕跡	口縁端部ヨコナデ・ 以下にタテハケ (や や左上がり)	口縁端部ヨコナデ・ 口縁部上半にタテハ ケ (左上がり)・下 半にタテナデ (ほぼ 上)・粘土組織み上 げ痕跡	口縁端部ヨコナデ・ 以下にタテハケ (左 上がり)	口縁端部ヨコナデ・ 以下にヨコハケ (左 上がり)・ヨコに変化)
3 段目	タテナデ (やや左上 がり)・透孔 (直径 7.0cm、ほぼ中央に 配置)	タテナデ (ほぼ上)・ スピオサエ	タテナデ (やや左上 がり)・タガ上のナ デに終点アリ (反時計 回り)・透孔 (直 径 6.0 ~ 7.1cm、 ほぼ中央に配置)	タテナデ (ほぼ上)	タテナデ (左上がり) ・透孔 (直径 5.5 ~ 6.0cm、上方に 配置)	ヨコハケ (左上がり) ・部分的にスピ オサエ・粘土組織み 上げ痕跡
2 段目	タテナデ (やや左上 がり)・欠損のため 透孔未確認 ハケメ 7 本/cm	タテナデ (ほぼ上)・ 粘土組織み上げ痕跡	タテナデ (やや左上 がり)・タガ上のナ デに終点アリ (反時計 回り)・透孔 (上 方に配置か)・下半 は欠損のため未確認 ハケメ 6 本/cm	タテナデ (ほぼ上) ・下半は欠損のため未 確認	タテナデ (やや左上 がり)・透孔 (直径 4cm 以上、上方に 配置) ハケメ 9 本/cm	タテナデ (ほぼ上)
1 段目 底 部	-	-	-	-	-	-
表土調査区	8-5 調査区 (Y-3 区)		8-5 調査区 (Y-3・4、Z-2 区)		8-5 調査区 (Z-4 区 塙輪集中部)	
胎 土	精良		精良	備考: 楕円形。 歪みで口縁部 が広がる	精良	備考: 歪みで口縁部 が広がっている可能 性あり
焼 成	良好		良好		良好	
色 調	にぶい褐色		にぶい黄褐色・にぶい褐色		にぶい黄褐色	

番号	47		48		49	
法 景	残存高 6.7cm 口径 22.0cm		残存高 18.7cm 口径 21.4cm	4 段目高 11.3 ~ 11.6cm	残存高 36.6cm 口径 27.0cm	4 段目高 9.0 ~ 9.8cm 3 段目高 12.1 ~ 12.4cm 2 段目高 12.5cm
調整等	外面		外面		外面	
4 段目 口縁部	口縁端部ヨコナデ・ 以下にタテハケ (や や左上がり) ハケメ 8 本/cm	ヨコハケ (左上がり) ・部分的にスピ オサエ	口縁端部ヨコナデ・ 以下にタテハケ (右 上がり)	口縁端部ヨコナデ・ 以下にヨコナデ (右 上がり)	口縁端部ヨコナデ・ 以下にタテハケ (左 上がり)	口縁端部ヨコナデ・ 以下にヨコハケ (や や左上がり)
3 段目	-	-	タテナデ (右上がり) ・タガ上のナ デに終点アリ (反時計 回り)・透孔 (直径 6.7cm、上寄りか) ハケメ 6 本/cm	ヨコナデ (右上がり) ・粘土組織み上 げ痕跡	タテナデ (左上がり) に終点アリ (時計 回り)・透孔 (直径 5.6cm、上方に配置)	タテナデ (左上がり) ・部分的にスピ オサエ・粘土組織み上 げ痕跡
2 段目	-	-	-	-	タテナデ (左上がり) ・タガ上のナ デに終点アリ (時計 回り)・透孔 (上方に 配置)	タテナデ (左上がり) ・部分的にスピ オサエ・粘土組織み上 げ痕跡
1 段目 底 部	-	-	-	-	タテナデ・タガ上の ナデに終点アリ (時 計回り)・下半は欠 損のため未確認 ハケメ 7 本/cm	タテナデ (左上がり) ・部分的にスピ オサエ・下半は欠損 のため未確認
表土調査区	7-2 調査区 (A-5 区)		7-2 調査区 (E-5 区 塙輪集中部)		7-1 調査区 (2 区 塙輪集中部)	
胎 土	精良		精良		やや精良	
焼 成	良好		良好		良好	
色 調	にぶい褐色		褐色		にぶい褐色	

番号	50		51		52	
法 景	残存高 33.3cm 口径 23.6cm	4 段目高 12.3cm 3 段目高 12.9cm	残存高 34.9cm 口径 23.8cm	4 段目高 9.7~9.9cm 3 段目高 11.2~11.7cm 2 段目高 10.1cm	残存高 27.8cm 口径 23.2cm	4 段目高 11.8cm 3 段目高 9.5cm
調整等	外面	内面	外面	内面	外面	内面
4 段目 口縁部	口縁端部ヨコナデ・以下にタテハケ(やや右上がり)・部分的にヨコナデ、ヘラ記号「半円形」	口縁部上半にヨコハケ(真横)・下半にタテハケ(真上)	口縁端部ヨコナデ・以下にタテハケ(左上がり)	口縁端部ヨコナデ・口縁部上半にヨコハケ(左上がり)・下半にタテナデ(左上がり)	口縁端部ヨコナデ・以下にタテハケ(右上がり)	口縁端部ヨコナデ・口縁部上半にヨコハケ(右上がり)・下半にタテナデ(右上がり)
3 段目	タテハケ(やや右上がり)・タガ下のナデに終点アリ(時計回り)・透孔(直径 5.9cm、やや上方に配置)	タテハケ(やや左上がり)・粘土組織み上げ痕跡	タテハケ(左上がり)・タガ下のナデに重なりアリ(方向不明)・透孔(直径 5.7cm、やや下方に配置)	タテナデ(左上がり)・タガ裏にユビオサエ	タテハケ(右上がり)・透孔(直径 6.2cm、ほぼ中央に配置)・タガ上のナデと重複	摩滅のため調整不 明、粘土組織み上げ痕跡
2 段目	タテハケ(やや右上がり)・タガ下のナデに終点アリ(時計回り)・欠損のため透孔未確認 ハケメ 13 本/cm	タテハケ(やや左上がり)・粘土組織み上げ痕跡	タテハケ(左上がり)・透孔(直径 5.7cm、やや下方に配置) ハケメ 7 本/cm	タテナデ(左上がり)・タガ裏にユビオサエ	タテハケ(右上がり)・欠損のための透孔未確認 ハケメ 5 本/cm	タテナデ(左上がり)・粘土組織み上げ痕跡
1 段目 底部	--	--	--	--	--	--
出土調査区	7-1 調査区(2区 埴輪集中部)		5-2 調査区(埴輪集まり1)		4-2 調査区(中央土坑)	
胎 土	精良	備考:ヘラ記号は3 段目タガ上のナデと 重複	やや良	良好(硬質)	やや良	良好
焼 成	良好		良好(硬質)		良好	
色 調	ぶい黄褐色		黄土灰色		橙灰褐色	

番号	53		54		55	
法 景	残存高 19.4cm 口径 26.0cm	4 段目高 12.2cm	残存高 8.0cm 口径 25.0cm		残存高 17.2cm 口径 26.0cm	4 段目高 10.4cm
調整等	外面	内面	外面	内面	外面	内面
4 段目 口縁部	口縁端部ヨコナデ・以下にタテハケ(左上がり)	口縁部上半にヨコナデ・下半にタテナデ(右上がり)主体	口縁端部ヨコナデ・以下にタテハケ(左上がり)	口縁端部ヨコナデ・以下にヨコナデ(左上がり)・ユビオサエ	口縁端部ヨコナデ・以下にタテハケ(右上がり)	口縁端部ヨコナデ・以下にヨコナデ(やや右上がり)主体・タテナデ・ユビオサエ
3 段目	タテハケ(左上がり)・透孔 ハケメ 8 本/cm	タテナデ(右上がり)主体・タガ裏にユビオサエ	--	--	タテハケ(右上がり)・透孔(上方に配置)・タガ下のナデと重複 ハケメ 6 本/cm	タテナデ・ユビオサエ
2 段目	--	--	--	--	--	--
1 段目 底部	--	--	--	--	--	--
出土調査区	4-2 調査区(中央土坑)		4-2 調査区(中央土坑)		4-2 調査区(中央土坑)	
胎 土	やや精良		やや精良		やや精良	
焼 成	良好(硬質)		良好		不良	
色 調	灰褐色(肌色)		灰褐色(肌色)		橙灰褐色	

番号	56		57		58	
法 景	残存高 18.6cm 口径 24.2cm	4 段目高 10.2cm	器高 44.2cm 口径 25.2cm 底径 16.8cm	4 段目高 10.1cm 3 段目高 9.8cm 2 段目高 11.1cm 1 段目高 13.3cm	器高 45.4cm 口径 25.8cm 底径 12.4cm	4 段目高 9.5～9.9cm 3 段目高 12.7～13.1cm 2 段目高 12.8cm 1 段目高 10.1cm
調整等	外面	内面	外面	内面	外面	内面
4 段目 口縁部	口縁端部ヨコナデ・ 以下にタテハケ(左 上がり)	口縁端部ヨコナデ・ 以下にタテハケ(左 上がり)	口縁端部ヨコナデ・ 以下にタテハケ(左 上がり)	口縁端部ヨコナデ・ 口縁部上半にヨコナ デ(左上がり)・下 半にタテナデ(右上 がり)・ユビオサエ	口縁端部ヨコナデ・ 以下にタテハケ(左 上がり)・部分的に ナデ、へう記号「△」 2 箇所	口縁端部ヨコナデ・ 以下にヨコナデ(左 上がり)・部分的に ユビオサエ
3 段目	タテハケ(やや左上 がり)、欠損のため 透孔未確認	摩滅のため調整不明	タテハケ(やや左上 がり)、透孔(直径 5.5cm、ほぼ中央に 配置)	タテナデ(左上が り)・タガ裏にユビ オサエ、粘土組織み 上げ痕跡	タテハケ(左上が り)、透孔(直径 4.5cm 以上、やや 上方に配置)	ヨコナデ(左上が り)・部分的にユビ オサエ、粘土組織み 上げ痕跡
2 段目	-	-	タテハケ(やや左上 がり)、透孔(直径 6.5～7.0cm、下方 に配置・タガ上のナ デと重複)	上半にタテナデ(左 上がり)・下半にヨ コナデ(やや右上 がり)・ユビオサエ、 粘土組織み上げ痕跡	タテハケ(やや左上 がり)、透孔(直径 7.0cm、ほぼ中央に 配置)	ヨコナデ(左上がり)
1 段目 底 部	-	-	タテハケ(やや左上 がり)・下半にタテハケ 換板状工具による調整 ハケメ 6 本/cm 底面未調整(草木の圧 痕)	上半にヨコナデ 下部にユビオサ エ、粘土組織み 上げ痕跡	上半にタテハケ(左 上がり)・下半に板 状工具による調整 ハケメ 6 本/cm	ヨコナデ(左上が り)・部分的にユビ オサエ
出土調査区	4-2 調査区(中央土坑)		5-2 調査区(埴輪溜まり 2)		5-2 調査区(埴輪溜まり 2)	
胎 土	やや精良		やや良		やや良	
焼 成	不良		良好(硬質)		良好	
色 調	橙灰褐色		乳橙灰色		乳橙灰白色	
					備考：へう記号は 4 段目に 2 箇所	

番号	59		60		61	
法 景	器高 43.3cm 口径 20.7～ 23.4cm 底径 15.1cm	4 段目高 9.8cm 3 段目高 10.7～11.0cm 2 段目高 11.3～11.5cm 1 段目高 11.0～11.4cm	器高 40.9cm 口径 17.0～ 30.6cm 底径 17.5cm	4 段目高 9.3cm 3 段目高 9.7～9.9cm 2 段目高 10.8cm 1 段目高 10.8～10.9cm	残存高 23.1cm 口径 23.8cm	4 段目高 9.4cm 3 段目高 11.9cm
調整等	外面	内面	外面	内面	外面	内面
4 段目 口縁部	口縁端部ヨコナデ・ 以下にタテハケ(左 上がり)	口縁端部ヨコナデ・ 以下にヨコハケ(や や左上がり)・下部 にタテナデ(右上が り)	口縁端部ヨコナデ・ 以下にタテハケ(左 上がり)、口縁端部 に U 字状の窪み	口縁端部ヨコナデ・ 以下にヨコハケ(左 上がり)・下部にタ テナデ(右上がり)	口縁端部ヨコナデ・ 以下にタテナデ(右 上がり)・へう記号 「斜線(右上がり)」	口縁端部ヨコナデ・ 以下にタテナデ(右 上がり)
3 段目	タテハケ(やや左上 がり)、透孔(直径 5.7cm、やや下方に 配置)	タテナデ(右上が り)・ユビオサエ、 粘土組織み上げ痕跡	タテハケ(左上が り)、透孔(直径 5.8cm、ほぼ中央に 配置)	タテナデ(右上が り)・部分的にユビ オサエ、粘土組織み 上げ痕跡	タテハケ(右上が り)、透孔(直径 4.6 ～6.0cm、やや上 方に配置) ハケメ 7 本/cm	タテナデ(右上がり)
2 段目	タテハケ(やや左上 がり)、透孔(直径 5.7cm、やや下方に 配置)	上半にヨコナデとユ ビオサエ・下半にタ テナデ(左上がり)	タテハケ(左上が り)、透孔(直径 6.8cm、やや下方と 上方に配置)	タテナデ(左上が り)・部分的にユビ オサエ、粘土組織み 上げ痕跡	-	-
1 段目 底 部	タテハケ(やや左上 がり)・下部に底部 調整 ハケメ 9～11 本/cm 底面ナデか(棒状・ 木片の圧痕)	タテナデ(左上がり)	タテハケ(左上が り)・下部にナ デハケメ 9 本/cm 底面ナデ(草木の圧 痕)	タテナデ(左上が り)・部分的にユビ オサエ・下部にナ デ、粘土組織み上げ 痕跡	-	-
出土調査区	5-2 調査区 (埴輪溜まり 2・南東部埴輪溜まり 2)		5-2 調査区(埴輪溜まり 2・3)		5-2 調査区(埴輪溜まり 3)	
胎 土	やや良		やや良		やや粗	
焼 成	良好(硬質)		良好(硬質)		不良	
色 調	乳灰褐色・茶褐色		乳灰褐色・茶褐色		明灰褐色	

番号	62		63	
法 量	残存高 22.7cm 口径 27.4cm	4 段目高 8.6cm 3 段目高 10.7cm	残存高 16.8cm 口径 20.6cm	4 段目高 9.4cm
調査等	外面	内面	外面	内面
4 段目 口縁部	口縁端部ヨコナデ・ 以下にタテハケ (左 上がり)	口縁端部ヨコナデ・ 以下にヨコハケ (左 上がり)・タガ裏に ユビオサエ	口縁端部ヨコナデ・ 以下にタテハケ (左 上がり)	口縁部上半にヨコナ デ・下半にタテナデ (左上がり)、粘土組 積み上げ痕跡
3 段目	タテハケ (やや左上 がり)、タガ下に張り 付け痕、透孔 (直 径 6.6cm、ほぼ中 央に配置)	タテナデ (左上が り)・部分的にユビ オサエ・タガ裏にユ ビオサエ、粘土組積 み上げ痕跡	タテハケ (左上が り)、透孔 ハケメ 6 本/cm	ヨコナデ、粘土組積 み上げ痕跡
2 段目	タテハケ (やや左上 がり)、下半は欠損 のため未確認 ハケメ 7 本/cm	-	-	-
1 段目 底 部	-	-	-	-
出土調査区	5-2 調査区 (埴輪留まり 2)		5-2 調査区 (埴輪留まり 2)	
胎 土	粗		やや粗	
焼 成	良好 (硬質)		良好 (硬質)	
色 調	乳橙灰色		橙褐色	

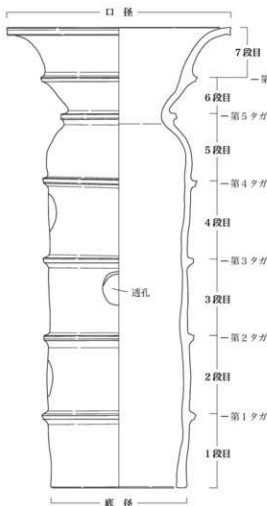
※ 観察表中「-」は、欠損のための確認できなかったことを示す。

2. 朝顔形円筒埴輪 (第16～18図、附表-5、巻頭図版1、図版7)

朝顔形円筒埴輪は13個体を図示した。しかし、第19・20図に示した円筒埴輪のなかには、朝顔形円筒埴輪である個体も含まれているものと考えられる。以下に朝顔形円筒埴輪の特徴を記載するが、タガ・透孔の形態、焼成・胎土などは普通円筒埴輪の項を参照されたい。なお、これまでのところ朝顔形円筒埴輪にヘラ記号を施す個体は確認されていない。

形態と度量 (第16図) 朝顔形円筒埴輪の基本的な形態は、4段構成の普通円筒埴輪の上に5段目となる肩部と、6・7段目に大きく外反する口縁部を載せる。各段はタガによって区切られ、透孔は2段目と3段目、そして普通円筒埴輪には見られない4段目にも配置されている。各段の透孔は普通円筒埴輪と同様の2個一対であり、段毎に直交した位置に配置される。5段目の肩部の形態には、肩の張りが弱いもの(第17図64・第18図72)と、肩の張りが強いもの(第17図65、第18図71)が見られる。口縁部は大きく外反して立ち上がるが、内面6段目の屈曲は不明瞭であった。

度量は、全形を窺えるものが2個体(第17図64・65)に限られるが、器高が73cm前後、口径は32.2～42.2cm、底径18.0～21.6cmを測る。4段目までの高さや底径は、普通円筒埴輪のなかでも器高45cm前後のものに近い値であった。

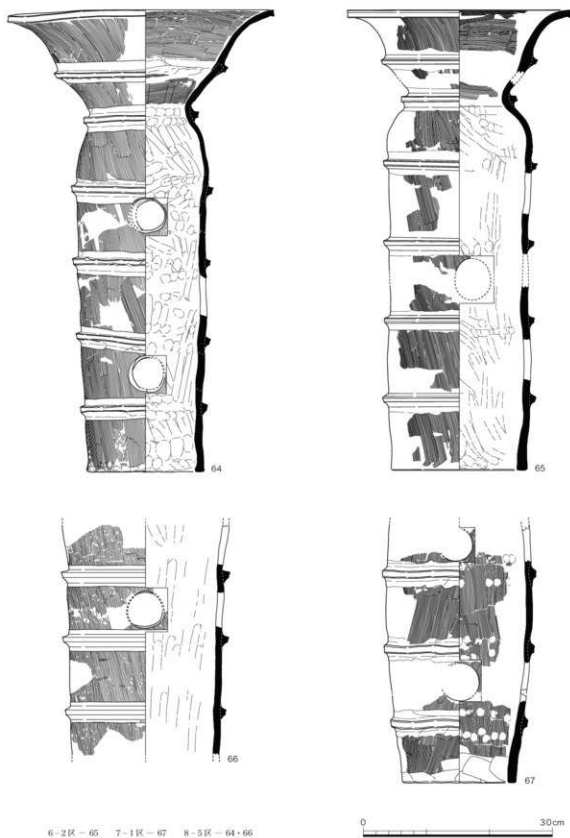


第16図 朝顔形円筒埴輪模式図

内外面の調整手法 普通円筒埴輪と同様に外面調整には、基本的にタテハケを用いる。タテハケには、左上がりと右上がりのものがあるが、前者の割合が多数を占めることも普通円筒埴輪と共通している。

内面調整は、基本的に底部から上へタテ方向ないしナメ方向にナデを加えて仕上げ上げるが、5段目のナデはナメ方向やヨコ方向に変化するものが多い。そして、6・7段目の口縁部のみはヨコ方向ないしナメ方向のハケを加えるものが多数を占める。第17図67は、1～4段目の内面調整にナデではなく、タテハケを施す唯一の個体である。この個体の外面調整には右上がりのタテハケが施されており、普通円筒埴輪と同様な関連性を指摘できる。

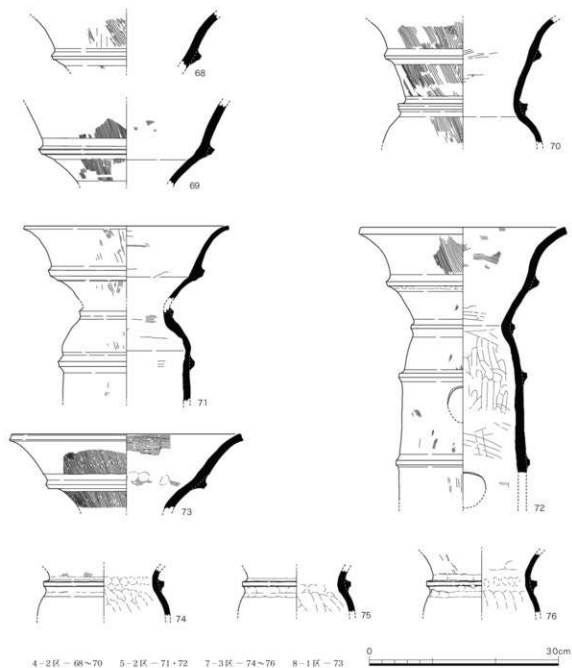
口縁部の形態と調整 大きく外反する口縁部の口縁端部は、端面をもつものに限られる。端面は、垂直に近いものと外傾する



第17図 朝顔形円筒埴輪実測図1 (1/6)

ものがあり、強いヨコナデによって凹むものが多い。

底部の形態と調整 朝顔形円筒埴輪の底部を確認できたのは3個体（第17図64・65・67）に留まる。64・65では基部付近の外面に強いユビオサエが、67では基部付近の内外面にケズリ調整が認められた。こうした調整を施すことにより、この3例では底部端付近の著しい肥厚や外側への大きな張り出しがない形態に仕上げられたものと考えられる。



第18図 朝顔形円筒埴輪実測図2 (1/6)

付表-5 朝顔形円筒埴輪観察表

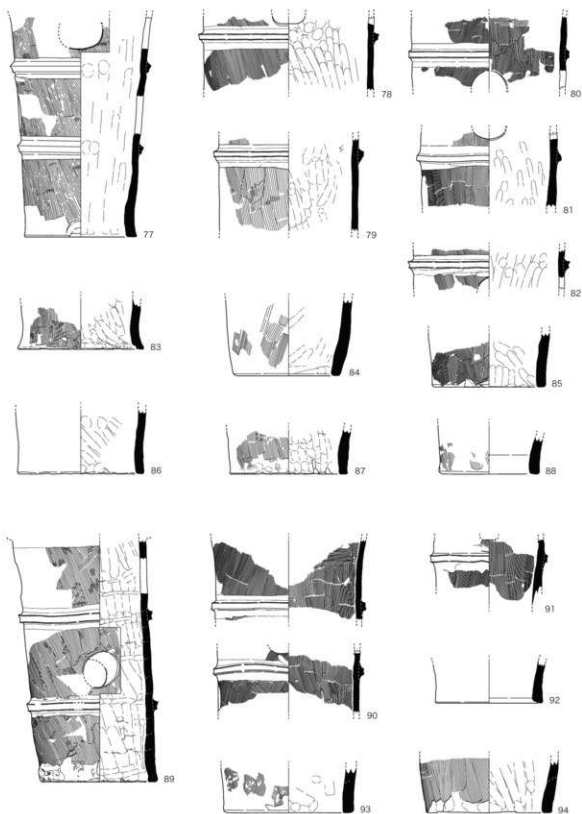
番 号	64	
法 量	器高 73.4cm 口径 42.2cm 底径 18.6cm	7段目高 9.0～9.9cm 6段目高 7.2～7.4cm 5段目高 10.7～11.4cm 4段目高 11.5～11.7cm 3段目高 11.8～12.7cm 2段目高 10.5～11.8cm 1段目高 10.2～10.4cm
調整等	外面	内面
7段目 口縁部	口縁端部ヨコナデ、以下にタテハケ（やや左上がり）	ヨコハケ（真横・左上がり）
6段目	タテハケ（やや左上がり）、タガ下に凹み多数アリ	ヨコハケ（右上がり）・タガ裏にヨコハケ後ヨコナデ、粘土組織み上げ痕跡
5段目	タテハケ（やや左上がり）	タテナデ（左上がり）・部分的にユビオサエ・タガ裏にユビオサエ、粘土組織み上げ痕跡
4段目	タテハケ（やや左上がり）、透孔（直径5.6cm、上方に配置・タガ下のナデと重複）	タテナデ（右上がり）・ユビオサエ、粘土組織み上げ痕跡
3段目	タテハケ（やや左上がり主体）、透孔（直径6.2cm、上方に配置）	タテナデ（右上がり）・ユビオサエ・タガ裏にユビオサエ、粘土組織み上げ痕跡
2段目	タテハケ（やや左上がり）、透孔（直径5.9cm、やや上方に配置）、タガ下ナデ終点（反時計回り）	タテナデ（右上がり）・タガ裏にユビオサエ、粘土組織み上げ痕跡
1段目 底 部	タテハケ（やや左上がり）・下部にユビオサエ後ハケ、タガ下ナデ終点（反時計回り） ハケメ7本/cm 底面未調査（草木の圧痕・粘土部の接合痕）	タテナデ（左上がり）・ユビオサエ・タガ裏にユビオサエ、粘土組織み上げ痕跡
出土調査区	8-5調査区（H・Y・Z-3、Z-1区）	
胎 土	やや粗	備考：口縁部が歪む
焼 成	良好	
色 調	にぶい褐色	

番号	65		66		67		68	
法量	器高73.0cm 口径38.5cm 底径21.6cm	7段目高7.9cm 5段目高10.2 ~10.5cm 4段目高12.4 ~12.6cm 2段目高 12.7cm 1段目高 11.5cm	残存高36.7cm		残存高41.0cm 底径18.0cm		残存高9.0cm	
調整等	外面	内面	外面	内面	外面	内面	外面	内面
7段目 口縁部	口縁端部ヨコナデ、以下にタテハケ(やや左上がり)	ヨコハケ(真横主体)	-	-	-	-	上半は欠損のため未確認・下半にタテハケ(左上がり)	上半は欠損のため未確認・下半は調整のため調整不明
6段目	タテハケ(やや左上がり)	ヨコハケ(やや左上がり)	-	-	-	-	タテハケ(やや左上がり)・下半は欠損のため未確認 ハケメ6本/cm	摩滅のため調整不明・下半は欠損のため未確認
5段目	タテハケ(やや左上がり主体)	タテナデ(左上がり)・部分的にユビオサエ、粘土細積み上げ痕跡	-	-	-	-	-	-
4段目	タテハケ(やや左上がり)・透孔(直径6.0cm、上方に配置)	タテナデ(真上・左上がり)・粘土細積み上げ痕跡	タテハケ(やや左上がり)・透孔(やや下方に配置か)	タテナデ(やや右上がり)	上半は欠損のため未確認・下半にタテハケ(やや右上がり)・透孔	上半は欠損のため未確認・下半にタテハケ(やや左上がり)	-	-
3段目	タテハケ(やや左上がり)・透孔(やや上方に配置か)	タテナデ(真上・左上がり)・タガ裏にユビオサエ	タテハケ(やや左上がり)・透孔(直径5.9cm、ほぼ中央に配置)	タテナデ(やや右上がり)	タテハケ(やや右上がり)・透孔未確認	タテハケ(やや左上がり)・タガ裏に上下2列のユビオサエ	-	-
2段目	タテハケ(やや左上がり)・透孔(やや上方に配置か)	タテナデ(真上・左上がり)・タガ裏にユビオサエ	タテハケ(やや左上がり)・透孔未確認	タテナデ(やや右上がり)	タテハケ(やや右上がり)・透孔(直径6.3cm、上方に配置)	タテハケ(やや左上がり)・タガ裏に上下2列のユビオサエ	-	-
1段目 底部	タテハケ(やや左上がり)・下部にナデ ハケメ9本/cm 底面ナデ	タテナデ(左上がり)・下部にナデ	タテハケ(やや左上がり)・下半は欠損のため未確認 ハケメ6本/cm	タテナデ(やや右上がり)・下半は欠損のため未確認	タテハケ(やや右上がり)・下部にタテハケ後ユビオサエ・ケズリ(時計回り)・タガ上のナデに終点(時計回り) ハケメ10本/cm 底面未調整	タテハケ(やや左上がり)・タガ裏に上下2列のユビオサエ・下部にケズリ(時計回り)	-	-
出土調査区	6-2調査区		8-5調査区(H4-3、1-3区)		7-1調査区(2区 塙輪集中部)		4-2調査区(中央土坑)	
胎土	やや精良		精良		やや精良		やや良	
焼成	良好(硬質)		良好		良好		不良	
色調	黄褐色・灰褐色		にぶい黄褐色・灰黄褐色		褐色		橙灰褐色	

番号	69		70		71		72	
法量	残存高 13.0cm		残存高 19.3cm	6段目高 7.6cm	残存高 27.4cm 口徑 32.2cm	7段目高 7.0cm 6段目高 6.5cm 5段目高 8.0cm	残存高 42.0cm 口徑 32.2cm	7段目高 8.6cm 6段目高 6.9cm 5段目高 7.6cm 4段目高 13.9cm
調整等	外面	内面	外面	内面	外面	内面	外面	内面
7段目 口縁部	上半は欠損のため未確認・下半にタテハケ(やや左上がり)	上半は欠損のため未確認・下半にヨコハケ(摩滅)	上半は欠損のため未確認・下半にタテハケ(やや左上がり主体)	上半は欠損のため未確認・下半にヨコハケ(やや右上がり)	口縁部ヨコナデ・以下にタテハケ(摩滅)	ヨコハケ(やや左上がり)	口縁部ヨコナデ・以下にタテハケ(左上がり)	ヨコハケ(やや左上がり)
6段目	タテハケ(やや左上がり)ハケメ9本/cm	ヨコハケ(摩滅)	タテハケ(やや左上がり)主体	摩滅のため調整不明	タテハケ(摩滅)	ヨコハケ(やや左上がり)、粘土組積み上げ痕跡	タテハケ(摩滅)、タガ下に凹み多数アリ	ヨコナデ、粘土組積み上げ痕跡
5段目	-	-	タテハケ(やや左上がり)ハケメ6本/cm	摩滅のため調整不明	タテハケ(摩滅)	ヨコハケ(やや左上がり)、粘土組積み上げ痕跡	タテハケ(摩滅)	タテナデ(ほぼ真上)
4段目	-	-	-	-	タテハケ(摩滅)・下半は欠損のため未確認	ヨコハケ(やや左上がり)・下半は欠損のため未確認	タテナデ(摩滅)、透孔(上方に配置)	タテナデ(ほぼ真上)
3段目	-	-	-	-	-	-	タテナデ(摩滅)、透孔・下半は欠損のため未確認ハケメ6本/cm	タテナデ(ほぼ真上)、粘土組積み上げ痕跡・下半は欠損のため未確認
2段目	-	-	-	-	-	-	-	-
1段目 底部	-	-	-	-	-	-	-	-
出土調査区	4-2調査区(中央土坑)		4-2調査区(中央土坑)		5-2調査区(埴輪留まり2)		5-2調査区(埴輪留まり2)	
胎土	やや精良		やや良		やや良		やや良	
焼成	不良		良好		不良		良好	
色調	黄褐色・橙灰白色		橙灰褐色		乳橙灰白色		乳橙灰色	

番 号	73		74		75		76	
	残存高 11.9cm 口径 36.0cm	7 段目高 8.0cm	残存高 7.5cm		残存高 6.7cm		残存高 9.5cm	
法 量								
調整等	外面	内面	外面	内面	外面	内面	外面	内面
7 段目 口縁部	口縁部ヨコナデ・以下にタチハケ(やや左上がり)	口縁部上半にヨコハケ(真横主体)・下半にナデ	-	-	-	-	-	-
6 段目	タチハケ(やや左上がり)・下半は欠損のため未確認 ハケメ7本/cm	ナデ・タガ裏にヨコハケ(やや左上がり)・ユビオサエ・下半は欠損のため未確認	上半は欠損のため未確認・下半にタチハケ(右上がり)	上半は欠損のため未確認・下半にナデ(方向不明)	上半は欠損のため未確認・下半は摩擦のため調整不明	上半は欠損のため未確認・下半にナデ(方向不明)	上半は欠損のため未確認・下半にタチハケ(真上)	上半は欠損のため未確認・下半にナデ(方向不明)
5 段目	-	-	摩擦のため調整不明・タガの上下に貼り付け板アリ・下半は欠損のため未確認	タチナデ(左上がり)・タガ裏にユビオサエ・下半は欠損のため未確認	摩擦のため調整不明・下半は欠損のため未確認	タチナデ(左上がり)・タガ裏にユビオサエ・下半は欠損のため未確認	摩擦のため調整不明・下半は欠損のため未確認	タチナデ(左上がり)・タガ裏にユビオサエ・下半は欠損のため未確認
4 段目	-	-	-	-	-	-	-	-
3 段目	-	-	-	-	-	-	-	-
2 段目	-	-	-	-	-	-	-	-
1 段目 底 部	-	-	-	-	-	-	-	-
出土調査区	8-1 調査区 (2-3 区)		7-3 調査区 (3 区)		7-3 調査区 (4 区)		7-3 調査区 (3 区 植輪集中部)	
胎 土	やや精良		粗		粗		やや精良	
焼 成	良好		良好		良好		良好	
色 調	にぶい褐色		にぶい褐色		にぶい褐色		褐色	

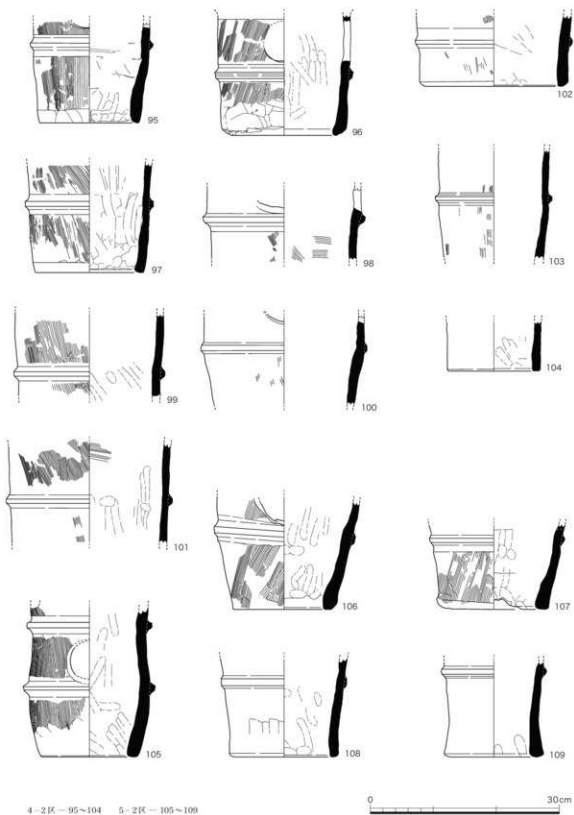
※ 観察表中「-」は、欠損のため確認できなかったことを示す。



5-1区-92 6-2区-84・88
 7-1区-89~91・93・94 7-2区-78~83・85~87
 8-5区-77

0 30cm

第19図 円筒埴輪実測図1 (1/6)



第20図 円筒埴輪実測図2 (1/6)

付表-6 円筒埴輪観察表

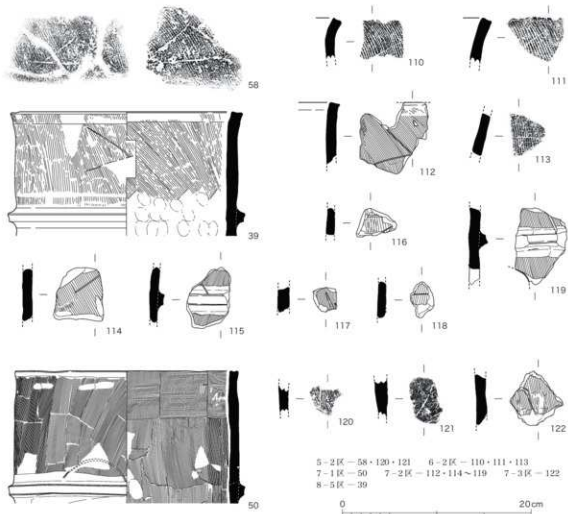
番号	77		78		79	
法 量	残存高 35.1cm 底径 17.5cm	2 段目高 12.7 ~ 12.9cm 1 段目高 14.4 ~ 14.6cm	残存高 11.8cm	2 段目高 8.0cm 以上	残存高 14.8cm	2 段目高 12.6cm 以上
調整等	外面	内面	外面	内面	外面	内面
4 段目	-	-	-	-	-	-
3 段目	上半は欠損のため未確認・タナハク(やや左上がり)、透孔(下方に配置か)	上半は欠損のため未確認・タナナデ(やや右上がり)	上半は欠損のため未確認・下半はタナハク(やや左上がり)、透孔(下方に配置)	上半は欠損のため未確認・下半はタナナデ(やや左上がり)、粘土組織み上げ痕跡	上半は欠損のため未確認・タナハク(やや左上がり)、透孔(やや左上がり)、透孔未確認	上半は欠損のため未確認・タナナデ(やや左上がり)後ナデ・タガ裏にユビオサエ
2 段目	タナハク(やや左上がり)主体、タガ下のナデに終点アリ(反時計回り)、透孔(下方に配置)	タナナデ(やや右上がり)・タガ裏にユビオサエ	タナハク(やや左上がり)、透孔	タナナデ(やや左上がり)、粘土組織み上げ痕跡	タナハク(やや左上がり)、タガ下方のナデに終点アリ、透孔ハケメ 5~6 本/cm	タナナデ(やや左上がり)・部分的にユビオサエ
1 段目 底 部	タナハク(やや左上がり)・下部にタナハケメ 5~6 本/cm 底面未調整	タナナデ(やや右上がり)・タガ裏にユビオサエ	-	-	-	-
出土層区	8-5 調査区 (Y-3・4, Z-3・4 区)		7-2 調査区 (C-5 区)		7-2 調査区 (D-4 区)	
胎 土	精良	備考: 底部に半径約 3cm の快り	精良	備考: 普通円筒埴輪であれば透孔から 2 段目のタガと考えられる	精良	備考: 普通円筒埴輪であれば 3~4 段目の可能性も考えられる
焼 成	良好		良好		良好	
色 調	にぶい褐色		にぶい黄褐色		にぶい黄褐色	
番号	80		81		82	
法 量	残存高 11.7cm		残存高 11.9cm		残存高 6.5cm	
調整等	外面	内面	外面	内面	外面	内面
4 段目	上半は欠損のため未確認・下半はタナハク(やや右上がり)	上半未確認・中位にヨコハケ(やや右上がり)・下部にタナハク(やや左上がり)	-	-	-	-
3 段目	タナハク(やや右上がり)、透孔。下半は欠損のため未確認ハケメ 11 本/cm	タナハク(やや右上がり)・粘土組織み上げ痕跡、下半は欠損のため未確認	-	-	上半は欠損のため未確認・下半はタナハク(やや左上がり)、透孔未確認ハケメ 8 本/cm	タナナデ(やや右上がり)・タガ裏にユビオサエ、下半は欠損のため未確認
2 段目	-	-	上半は欠損のため未確認・下半はタナハク(僅かに左上がり)、透孔	上半は欠損のため未確認・下半はタナナデ(やや左上がり)	タナハク(やや左上がり)、タガ下のナデに終点(反時計回り)、透孔。下半は欠損のため未確認	タナナデ(やや右上がり)・タガ裏にユビオサエ、下半は欠損のため未確認
1 段目 底 部	-	-	タナハク(僅かに右上がり)、タガ下ナデに終点。下半は欠損のため未確認ハケメ 8 本/cm	タナナデ(やや左上がり)、下半は欠損のため未確認	-	-
出土層区	7-2 調査区		7-2 調査区 (E-5 区 埴輪集中部)		7-2 調査区 (G-5 区)	
胎 土	やや精良	備考: 内面のヨコハケと透孔から 3 段目のタガと考えられる	やや粗	備考: 透孔及び下段階層の厚さから 1 段目である可能性が高い	精良	備考: 普通円筒埴輪であれば 3~4 段目の可能性もある
焼 成	良好		良好		良好	
色 調	褐色		にぶい黄褐色		にぶい褐色	
番号	83		84		85	
法 量	残存高 7.2cm 底径 20.0cm	1 段目高 7.2cm 以上	残存高 12.0cm 底径 17.0cm	1 段目高 12.0cm 以上	残存高 8.6cm 底径 18.0cm	1 段目高 8.6cm 以上
調整等	外面	内面	外面	内面	外面	内面
4 段目	-	-	-	-	-	-
3 段目	-	-	-	-	-	-
2 段目	-	-	-	-	-	-
1 段目 底 部	上半は欠損のため未確認・下半はタナハク(やや左上がり)ハケメ 7 本/cm 底面ユビオサエ	上半は欠損のため未確認・下半はタナナデ(左上がり)・下部にユビオサエ、粘土組織み上げ痕跡	タナハク(やや右上がり)・下部に底部調整ハケメ 5~7 本/cm 底面ナデ	タナナデ(右上がり)・下部にヨコナデ	タナハク(やや左上がり)・右上がり)ハケメ 9 本/cm 底面未調整(棒状の圧痕)	タナナデ(真上から左上がりに変化)
出土層区	7-2 調査区 (A-5 区)		6-2 調査区		7-2 調査区 (E-4 区 埴輪集中部)	
胎 土	精良		粗		やや精良	
焼 成	良好		良好		良好	
色 調	にぶい褐色		灰白褐色		にぶい黄褐色	

番号	86		87		88	
法 量	残存高 10.3cm 底径 20.2cm	1 段目高 10.3cm 以上	残存高 7.1cm 底径 18.6cm	1 段目高 7.1cm 以上	残存高 7.8cm 底径 16.0cm	1 段目高 7.8cm 以上
調整等	外面	内面	外面	内面	外面	内面
4 段目	-	-	-	-	-	-
3 段目	-	-	-	-	-	-
2 段目	-	-	-	-	-	-
1 段目 底 部	厚紙のため調整不明 底面未調整(棒状の 圧痕・粘土層の接合 痕)		上部にユビオサエ・ 以下にタテナデ(左 上がり)・下部にユ ビオサエ		タテナデ(やや左上 がり)・下部にタ テナデナデ/cm 底面ユビオサエ	
出土調査区	7-2 調査区 (A・B-1・2 区)		7-2 調査区 (E-3 区)		6-2 調査区	
胎 土	やや精良		精良		やや精良	
焼 成	不良		良好		良好	
色 調	にぶい褐色		にぶい黄褐色		灰白褐色	
番号	89		90		91	
法 量	残存高 38.4cm 底径 18.6cm	2 段目高 14.1cm 1 段目高 13.3 ~ 13.8cm	残存高 18.0cm	4 段目高 10.0cm 以上 2 段目高 8.0cm 以上	残存高 10.4cm	1 段目高 7.9cm 以上
調整等	外面	内面	外面	内面	外面	内面
4 段目	-	-	上半は欠損のため未 確認・下半にタテナ ケ(やや右上がり)	上半は欠損のため未 確認・下半にヨコハ ケ(真横)・タテナ ケ(真上主体)・部 分的にユビオサエ	-	-
3 段目	タテナケ(左上が り)・透孔(直径 5.5cm、ほぼ中央に 配置)	タテナデ(やや左上 がり)・ヨコナデ(真 横)・粘土組織み 上げ痕跡	タテナケ(やや右上 がり)・タゲ下のナ デに貼り付け時の凹 み、透孔	-	-	-
2 段目	タテナケ(やや左上 がり)・透孔(直径 6.8cm、やや下 方に配置)	タテナデ(僅かに左 上がり)・タガ裏に ユビオサエ・粘土組 織み上げ痕跡	タテナケ(やや右上 がり)・透孔、下半 は欠損のため未確 認	タテナケ(真上・や や左上がり)・下半 は欠損のため未確 認	上半は欠損のため未 確認・タテナケ(真 上)	上半は欠損のため未 確認・タテナケ(真 上)
1 段目 底 部	タテナケ(やや左上 がり)・下部にナデ、 タガ上のナデに貼り 付け痕の凹み ハケメ 6 本/cm 底面ナデ(圧痕)	タテナデ(やや左上 がり)・タガ裏にヨ コナデ(真横)・下 部にヨコナデ(やや 右上がり)・粘土組 織み上げ痕跡	-	-	タテナケ(やや右上 がり)・タゲ下のナ デに鉄点アリ(時計 回り)・以下は欠損 のため未確認	タテナケ(やや左上 がり)・下部にナデ、 以下は欠損のため未 確認
出土調査区	7-1 調査区 (3 区 埴輪集中部)		7-1 調査区 (2 区 埴輪集中部)		7-1 調査区 (3 区)	
胎 土	精良		精良		やや粗	
焼 成	良好		良好		良好	
色 調	にぶい黄褐色		にぶい黄褐色		にぶい黄褐色	
番号	92		93		94	
法 量	残存高 6.8cm 底径 17.0cm	1 段目高 6.8cm 以上	残存高 7.2cm 底径 20.6cm	1 段目高 7.2cm 以上	残存高 8.7cm 底径 20.0cm	1 段目高 8.7cm 以上
調整等	外面	内面	外面	内面	外面	内面
4 段目	-	-	-	-	-	-
3 段目	-	-	-	-	-	-
2 段目	-	-	-	-	-	-
1 段目 底 部	ナデ(方向不明)・ 部分的にヘラ状工具 によるケズリ 底面ナデ	ナデ(方向不明)	タテナケ(やや左上 がり) ハケメ 7 本/cm 底面未調整(草木の 圧痕)	ナデ後板ナデ(方向 不明)	タテナケ(やや左上 がり)・下部にユビ オサエ ハケメ 7 本/cm 底面未調整	タテナデ(左上が り)・粘土組織み 上げ痕跡
出土調査区	5-1 調査区		7-1 調査区 (6 区)		7-1 調査区 (7 区)	
胎 土	やや精良		やや精良		粗	
焼 成	良好		良好		良好	
色 調	淡橙褐色		にぶい褐色		褐色	

番号	95		96		97	
法量	残存高 15.9cm 底径 15.8cm	1 段目高 12.7cm	残存高 19.1cm 底径 19.6cm	2 段目高 10.0cm 程度か 1 段目高 10.0cm	残存高 17.2cm 底径 17.0cm	1 段目高 11.3cm
調整等	外面	内面	外面	内面	外面	内面
4 段目	-	-	-	-	-	-
3 段目	-	-	-	-	-	-
2 段目	上半は欠損のため未確認・下半は摩滅のため確認、下半にタテハケ(真上)、透孔	上半は欠損のため未確認・下半は摩滅のため調整不明	上半は欠損のため未確認・下半にタテハケ(やや右上がり)、透孔	上半は欠損のため未確認・下半にタテハケ(やや左上がり)、タガ裏にユビオサエ	上半は欠損のため未確認・下半にタテハケ(左上がり)、透孔未確認	上半は欠損のため未確認・下半にタテハケ(やや左上がり)
1 段目 底部	タテハケ(真上)・下部に板状工具による調整 ハケメ 6 本/cm 底面ナデ	摩滅のため調整不明・タガ裏にユビオサエ・下部にユビオサエ	タテハケ(やや右上がり)・下部にタテハケ後板状工具による調整 ハケメ 6 本/cm 底面未調整(粘土帯の接合部)	タテナデ(やや右上がり)	タテハケ(やや左上がり)・下部にタテナデ後板状工具による調整 ハケメ 6 本/cm 底面ナデ	タテナデ(やや左上がり)・部分的にユビオサエ
出土調査区	4-2 調査区(中央土坑)		4-2 調査区(中央土坑)		4-2 調査区(中央土坑)	
胎土	やや良		やや精良		やや良	
焼成	良好		不良		不良	
色調	橙灰褐色		橙灰褐色		橙灰褐色	
番号	98		99		100	
法量	残存高 11.2cm	2 段目ないし 3 段目高 6.8cm 以上	残存高 13.0cm	3 段目ないし 4 段目高 9.1cm 以上	残存高 14.0cm	1 段目ないし 2 段目高 9.4cm 以上
調整等	外面	内面	外面	内面	外面	内面
4 段目	-	-	-	-	-	-
3 段目	上半は欠損のため未確認・下半は摩滅のため調整不明、透孔(下方に配置か)	上半は欠損のため未確認・下半は摩滅のため調整不明	上半は欠損のため未確認・下半にタテハケ(やや左上がり)、透孔未確認	上半は欠損のため未確認・下半にタテナデ(左上がり)	-	-
2 段目	タテハケ(やや左上がり)、透孔未確認	ヨコハケ・タテハケ(左上がり)	タテハケ(やや左上がり)・下半は欠損のため未確認、透孔ハケメ 7 本/cm	タテナデ(左上がり)・下半は欠損のため未確認	上半は欠損のため未確認・下半は摩滅のため調整不明、透孔	上半は欠損のため未確認・下半は摩滅のため調整不明
1 段目 底部	-	-	-	-	タテハケ(やや左上がり)・下半は欠損のため未確認	摩滅のため調整不明・下半は欠損のため未確認
出土調査区	4-2 調査区(中央土坑)		4-2 調査区(中央土坑)		4-2 調査区(中央土坑)	
胎土	やや精良	備考: 1~2 段目の可能性も考えられる	やや粗	備考: 普通円筒埴輪であれば 3~4 段目の可能性も考えられる	やや粗	備考: 普通円筒埴輪であれば 2~3 段目の可能性も考えられる
焼成	良好(硬質)		良好(硬質)		良好(硬質)	
色調	橙灰褐色		灰褐色(肌色)		橙灰褐色	
番号	101		102		103	
法量	残存高 15.7cm	3 段目高 8.4cm 以上 2 段目高 8.0cm 以上	残存高 11.2cm 底径 21.6cm	1 段目高 7.3cm	残存高 15.0cm	2 段目高 7.3cm 以上 1 段目高 9.7cm 以上
調整等	外面	内面	外面	内面	外面	内面
4 段目	上半欠損のため未確認・下半にタテハケ(左上がり)	上半欠損のため未確認・中位にヨコハケ(左上がり)・下部にタテナデ(真上)	-	-	-	-
3 段目	タテナデ(左上がり)・下半は欠損のため未確認、透孔ハケメ 8 本/cm	上半にタテナデ(真上)・タガ裏にユビオサエ、下半は欠損のため未確認	-	-	-	-
2 段目	-	-	上半は欠損のため未確認・下半にタテナデ(左上がり)	上半は欠損のため未確認・下半にタテナデ(左上がり)	上半は欠損のため未確認・下半にタテナデ(真上)、透孔未確認	上半は欠損のため未確認・下半は摩滅のため調整不明
1 段目 底部	-	-	タテナデ(やや左上がり) ハケメ 6~7 本/cm 底面ナデ	タテナデ(左上がり)・下部にユビオサエ	タテナデ(真上)・下半は欠損のため未確認	摩滅のため調整不明・下半は欠損のため未確認
出土調査区	4-2 調査区(中央土坑)		4-2 調査区(中央土坑)		4-2 調査区(中央土坑)	
胎土	やや精良	備考: 普通円筒埴輪であれば 3~4 段目と考えられる	やや良	備考: 1 段目、底部が軽い	やや良	備考: 惣塚の厚さから 1~2 段目と考えられる
焼成	良好(硬質)		不良		不良	
色調	灰褐色(肌色)		橙灰褐色		橙灰褐色	

番 号	104		105		106	
法 量	残存高 7.8cm 底径 14.8cm	1 段目高 7.8cm 以上	残存高 23.8cm 底径 14.4cm	2 段目高 10.2cm 1 段目高 11.1cm	残存高 17.0cm 底径 15.7cm	1 段目高 11.4 ~ 12.2cm
調整等	外面	内面	外面	内面	外面	内面
4 段目	-	-	-	-	-	-
3 段目	-	-	上半は欠損のため未確認・下部にタテハケ(方向不明)、透孔	上半は欠損のため未確認・下部にタテナデ(左上がり)	-	-
2 段目	-	-	タテハケ(やや左上がり)、透孔(下方に配置・タガ上のナデと重複)	タテナデ(右上がり・直上)	上半は欠損のため未確認・下半にタテナデ(右上がり)、透孔(やや下方に配置)	上半は欠損のため未確認・下半にタテナデ(やや右上がり)
1 段目 底 部	上半は欠損のため未確認・下半は厚減のため調整不明 底面ナデ	上半は欠損のため未確認・下半にタテナデ(左上がり)	上半にタテナデ(僅かに左上がり)・下半にタテナデ後板状工具によるナデ(左上がり) ハケメ 6 本/cm 底面未調整	タテナデ(左上がり)・部分的にコナデ	タテナデ(右上がり)・下部にケズリハケメ 7 本/cm 底面未調整(原本の圧痕・粘土帯の接合痕)	タテナデ(やや右上がり)・下部にケズリハケメ 7 本/cm 底面未調整(原本の圧痕・粘土帯の接合痕)
出土調査区	4-2 調査区(中央土坑)		5-2 調査区(埴輪溜り 3)		5-2 調査区(埴輪溜り 2)	
胎 土	やや良		粗		やや粗	備考: 大きく歪む
焼 成	不良		良好(硬質)		不良	
色 調	橙灰褐色		橙褐色		橙褐色	
番 号	107		108		109	
法 量	残存高 13.4cm 底径 17.2cm	1 段目高 11.3cm	残存高 15.7cm 底径 17.4cm	1 段目高 12.4cm	残存高 14.4cm 底径 15.8cm	1 段目高 13.9cm
調整等	外面	内面	外面	内面	外面	内面
4 段目	-	-	-	-	-	-
3 段目	-	-	-	-	-	-
2 段目	-	欠損のため未確認・下部にタテナデ(やや右上がり)、粘土組織み上げ痕跡	-	-	-	-
1 段目 底 部	タテナデ(やや右上がり)・下部にナデハケメ 5 本/cm 底面ナデ(棒状の圧痕)	タテナデ(やや右上がり)・タガ裏にユビオサエ、粘土組織み上げ痕跡	上半は厚減のため調整不明・下部に板状工具による調整 底面ナデ	タテナデ(左上がり)・下部にユビオサエ	厚減のため調整不明 底面コナデ	ナデ(方向不明)・下部にユビオサエ
出土調査区	5-2 調査区(埴輪溜り 3)		5-2 調査区(埴輪溜り 3)		5-2 調査区(埴輪溜り 3)	
胎 土	粗		粗		粗	
焼 成	不良		不良		不良	
色 調	淡黄白色		橙灰白色		淡黄橙色～橙色	

※ 観察表中「-」は、欠損のため確認できなかったことを示す。



第21図 へら記号実測図(1/4)

付表-7 へら記号を持つ円筒埴輪観察表

番号	110		111		112	
	残存高4.3cm	4段目高4.3cm以上	残存高4.9cm	4段目高4.9cm以上	残存高7.6cm	4段目高7.6cm以上
調査等	外面	内面	外面	内面	外面	内面
4段目	タテハケ(やや左上がり)・下半は欠損のため未確認、へら記号「x」ハケメ5本/cm	ヨコナデ・下半は欠損のため未確認	タテハケ(やや左上がり)・下半は欠損のため未確認、へら記号「x」ハケメ4本/cm	ヨコハケ(やや左上がり)・下半は欠損のため未確認	口縁部ヨコナデ・以下にタテハケ(左上がり)・へら記号「x」ハケメ8本/cm	口縁部ヨコナデ・以下にタテハケ(左上がり)
出土調査区	6-2調査区		6-2調査区		7-2調査区(E-5区)	
胎土	やや粗		やや精良		粗	
焼成	良好(硬質)		良好(硬質)		良好	
色調	にぶい褐色		褐色		にぶい褐色	

番号	113		114		115	
法量	残存高 4.1cm	4 段目高 4.1cm 以上	残存高 5.5cm	4 段目高 5.5cm 以上	残存高 5.8cm	4 段目高 3.0cm 以上
調整等	外面	内面	外面	内面	外面	内面
4 段目 口縁部	上半は欠損のため未確認・タテハケ(やや左上がり)・へう記号「×」かハケメ 5 本/cm	上半は欠損のため未確認・タテハケ(方向不明)	上半は欠損のため未確認・タテハケ(左上がり)・へう記号「斜線」(右上がり) ハケメ 6 本/cm	上半は欠損のため未確認・ヨコハケ(僅かに左上がり)	上半は欠損のため未確認・下半にタテハケ(やや右上がり)・へう記号「斜線」(左上がり) ハケメ 8 本/cm	上半は欠損のため未確認・タテハケ(僅かに左上がり)
3 段目	-	-	-	-	タテハケ(やや右上がり)・下半は欠損のため未確認。透孔未確認	タテハケ(僅かに左上がり)・下半は欠損のため未確認
出土調査区	6-2 調査区		7-2 調査区 (E-4 区)		7-2 調査区 (E-5 区)	
胎土	やや精良		精良		粗	備考：へう記号はタガ上のナデと重複
焼成	良好(硬質)		良好		良好	
色調	褐色		ぶい黄褐色		褐色	
番号	116		117		118	
法量	残存高 2.8cm	4 段目高 2.8cm 以上	残存高 2.6cm	4 段目高 2.6cm 以上	残存高 3.8cm	4 段目高 3.8cm 以上
調整等	外面	内面	外面	内面	外面	内面
4 段目	上半は欠損のため未確認・下半にタテハケ(僅かに左上がり)・へう記号「▽」かハケメ 5 本/cm	上半は欠損のため未確認・下半にナデ(方向不明)	上半は欠損のため未確認・下半にタテハケ(やや左上がり)・へう記号「二重斜線」(左上がり) ハケメ 8 本/cm	上半は欠損のため未確認・中位にナデ・下部にタテハケ(左上がり)	上半は欠損のため未確認・下半にタテハケ(やや右上がり)・へう記号「横線」 ハケメ 5 本/cm	上半は欠損のため未確認・下半にナデ(方向不明)
出土調査区	7-2 調査区		7-2 調査区 (D-3 区)		7-2 調査区 (A・B-1・2 区)	
胎土	やや粗		精良		精良	
焼成	良好		良好		良好	
色調	褐色		黄灰色		褐色	
番号	119		120		121	
法量	残存高 8.2cm	4 段目高 2.8cm 以上	残存高 2.9cm	4 段目高 2.9cm 以上	残存高 4.0cm	4 段目高 4.0cm 以上
調整等	外面	内面	外面	内面	外面	内面
4 段目	上半は欠損のため未確認・下半にタテハケ(やや左上がり)・へう記号「斜線」(左上がり) ハケメ 6 本/cm	上半は欠損のため未確認・下半は摩滅のため調整不明	上半は欠損のため未確認・下半にタテハケ(やや左上がり)・へう記号「縦線」 ハケメ 6 本/cm	上半は欠損のため未確認・下半にナデ	上半は欠損のため未確認・下半にタテハケ(僅かに右上がり)か、へう記号「斜線」(右上がり)	上半は欠損のため未確認・下半にナデ(方向不明)
3 段目	タテハケ(やや左上がり)・透孔・下半は欠損	摩滅のため調整不明・下半は欠損のため未確認	-	-	-	-
出土調査区	7-2 調査区 (A-3 区)		5-2 調査区		5-2 調査区	
胎土	やや精良	備考：へう記号はタガ上のナデと重複	やや良		やや良	
焼成	良好		良好		良好	
色調	ぶい黄褐色		淡褐色		淡褐色	
番号	122					
法量	残存高 5.8cm	4 段目高 5.8cm 以上				
調整等	外面	内面				
4 段目	上半は欠損のため未確認・下半にタテハケ(やや左上がり)・へう記号「逆U字形」 ハケメ 7 本/cm	上半は欠損のため未確認・下半にヨコハケ(やや左上がり)とヨコナデ				
3 段目	-	-				
出土調査区	7-3 調査区 (6 区)					
胎土	精良					
焼成	良好					
色調	ぶい褐色					

※ 観察表中「-」は、欠損のため確認できなかったことを示す。

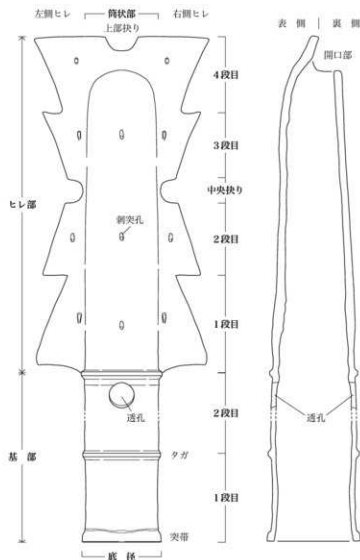
第4節 形象埴輪

形象埴輪は造り出しから西側くびれ部にかけての調査区（6-2、7-2、8-5調査区）で、巫女形などの人物形埴輪、鶏形などの動物形埴輪、寄棟家屋などの家形埴輪、盾や鞆、蓋などの器形埴輪、石見型埴輪など多種多様なものが大量に出土した。形象埴輪はその他の調査区では限られていたが、特異な出土状況を示すのが石見型埴輪である。造り出し周辺はもとより、東側くびれ部から前部東側（4-2、5-2調査区）、前部前面（8-1調査区）や西側（7-3調査区）、そして、後部部北西側の調査区（7-1調査区）でも一定量が認められた。こうした出土状況から石見型埴輪は、普通円筒埴輪や朝顔形円筒埴輪と同様に古墳を巡る埴輪列に配されていたものと考えられる。ただ、井ノ内車塚古墳では段築などが確認されておらず、埴輪列は墳丘裾を巡るものと推定されるが、その正確な位置は明らかでない。

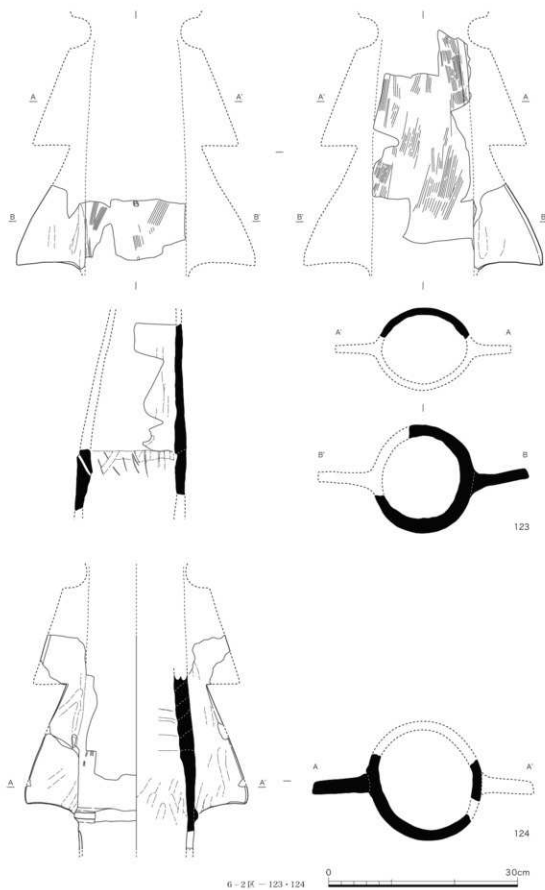
1. 石見型埴輪（第22～29図、附表-8・9、巻頭図版2、図版9～11）

形態と法量（第22図）石見型埴輪は完全な形に復元できるものが無く、詳細な法量や基部の段構成などが明らかでない。推測される基本的な形態は、タガによって区切られた2段以上の基部に筒状部が載せられ、その左右に大きく突出するヒレを付加する。ヒレは4段構成で、2段目と3段目の間には、左右に半円形の袢りを設ける。また、4段目の上辺中央にも半円形の袢りが設けられる。筒状部の平面形態は基部に近い1段目が正円形で、ヒレに対して表裏ともに大きく張り出すが、2段目より上は次第にヒレ方向に長い楕円形となり、4段目の中程で裏側に開口して終わる。

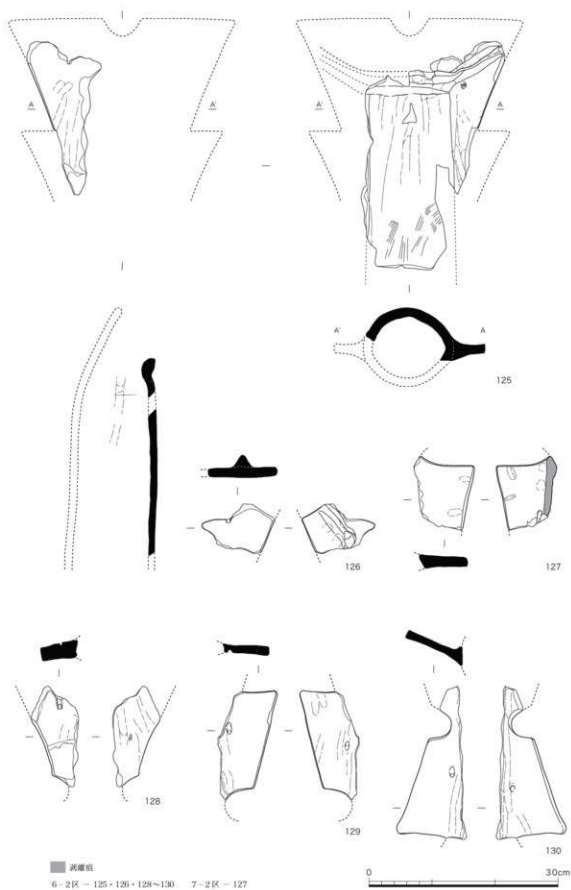
法量は、基部を2段以上とした場合、第2タガまでの基



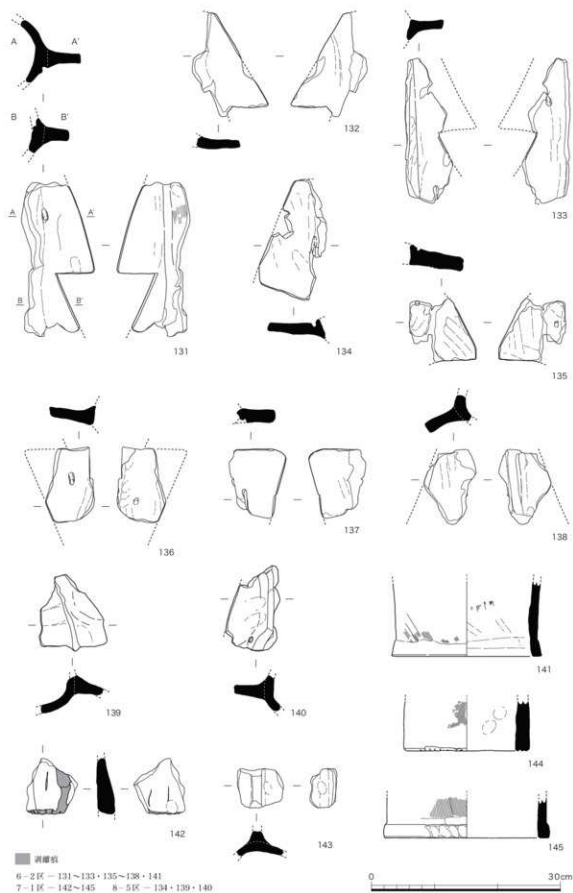
第22図 石見型埴輪模式図



第23图 石見型埴輪実測图1 (1/6)



第24図 石見型埴輪矢頭図2 (1/6)



第25图 石見型埴輪実測图3 (1/6)

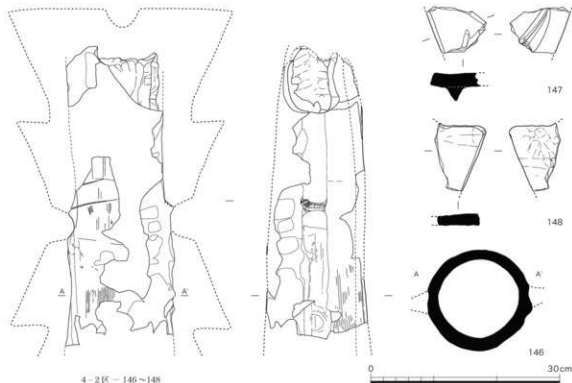
部高が35cm以上、中央挟りを含むヒレ部の高さは約73cmで、全体の器高が1mを超えるものと推定される。また、ヒレ各段の高さや筒状部からの突出幅より、器高及び最大幅に大小の存在を見い出せる可能性がある。なお、中央挟りの上下にある2・3段目のヒレは、1・4段目に比べ、高さ及び筒状部からの突出がともにやや小さく作られる傾向にあった。

調整手法 ヒレ部の調整には基本的にナデが用いられる。とくに筒状部との接合箇所の裏側や、4段目の裏側に見られる開口部から延びる斜め方向の支柱状突帯周辺には強いナデが施される。また、ヒレ部と筒状部の剥離面には接合のための刻み目を施すものが散見された。筒状部の外面調整には、ヒレ部との接合部以外でタテハケを残す個体が多い。一方、筒状部の内面調整は基本的にタテ方向のナデを用いており、多くの個体で粘土紐積み上げ痕が認められた。

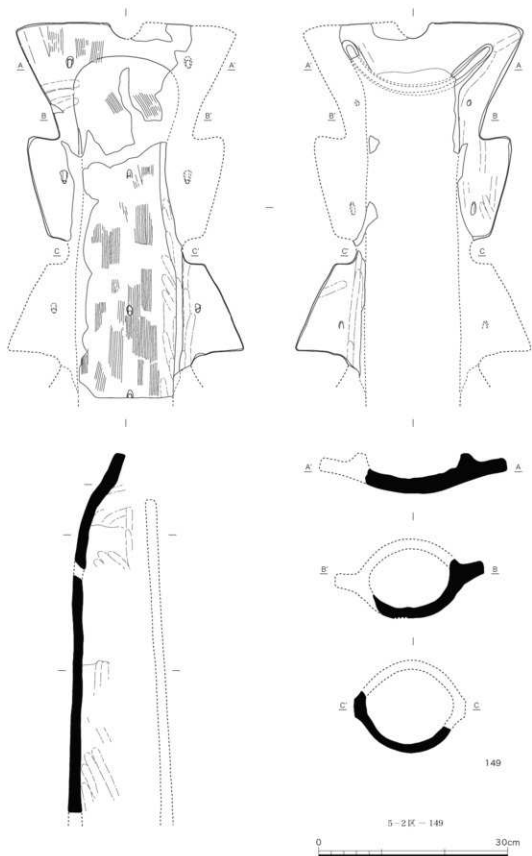
基部の調整は、外面がタテハケで内面にナデを施す。底部外面には幅2cm程の突帯や肥厚が認められ、外面に断続的なナデ、内面にはユビオサエやナデが施される。なお、資料に限られていたため、基部に倒立した円筒埴輪を利用する例は確認できなかった。

刺突孔 4段目の左右ヒレ部に2箇所、1～3段目の左右ヒレ部と筒状部に各3箇所、全体で11箇所の刺突孔を持つものと考えられる。刺突孔は全て表側の斜め上方向から施され、1例(第25図131)を除き裏側の下方へ貫通する。刺突孔以外の装飾的な要素が認められたのは、3段目の筒状部に緩やかな円弧状の線刻2条を施す例(第26図146)だけであった。

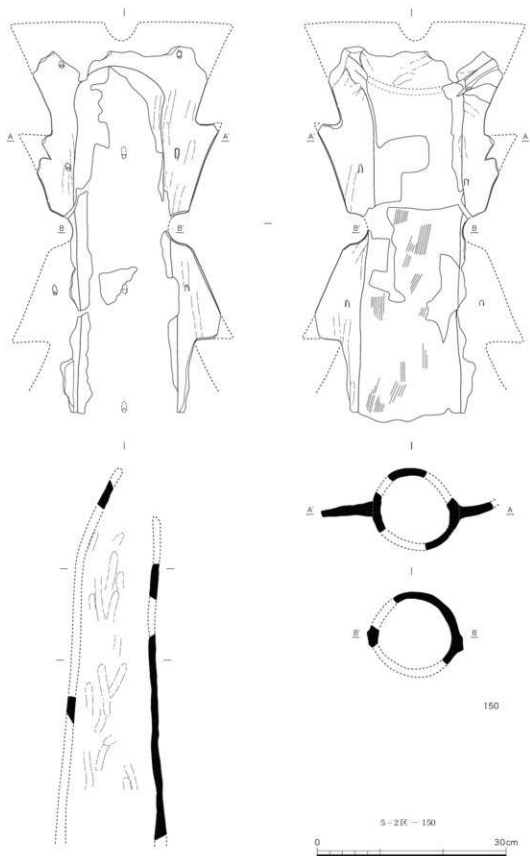
胎土・焼成・色調 胎土は円筒埴輪に比べて選ばれているが、1cmを超える礫を含む個体も認められる。すべて密窯焼成と考えられ、やや軟質に仕上がっているものが主体を占める。外面の色調は橙褐色を呈するものが多い。



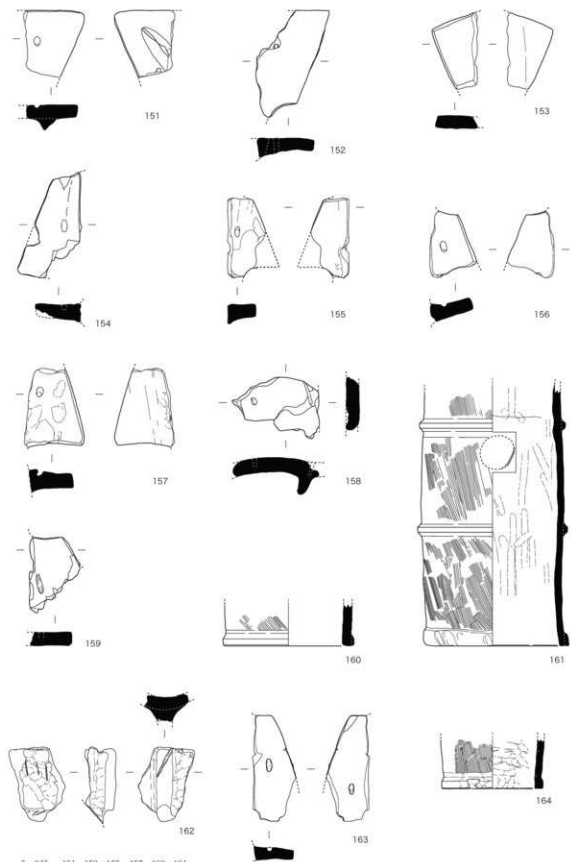
第26図 石見型埴輪実測図4 (1/6)



第27图 石見型埴輪実測图5 (1/6)



第28図 石見型埴輪尖刺圖6 (1/6)



5-2区—151・153・155~157・160・161

7-3区—162~164

8-1区—152・154・158・159

0 30cm

第29图 石見型埴輪実測图7 (1/6)

付表-8 石見型埴輪観察表1

番号	123			124		
法量	残存高 37.0cm ヒレ高さ 2 段目以上不明 1 段目左側 (12.2cm)	最大幅 1 段目 復元幅 38.0cm	筒状部最大径 1 段目 16.0cm	残存高 34.1cm ヒレ高さ 2 段目以上不明 1 段目左側 20.4cm	最大幅 1 段目 復元幅 36.0cm	筒状部最大径 1 段目 18.2cm
調整等	左側ヒレ	筒状部	右側ヒレ	左側ヒレ	筒状部	右側ヒレ
4 段目	-	-	-	-	-	-
3 段目	-	-	-	-	-	-
中央挟り	/	/	/	/	/	/
2 段目	-	外面表：タテハケ、 内面：ナデ	-	表裏：タテナデ	-	-
1 段目	表裏：タテナデ	外面表：タテハケ・ 側突孔、外面裏： タテハケ、内面： タテナデ、ユビオサエ・ 粘土組織み上げ痕	-	表裏：タテナデ・ 側突孔	外面表：タテハケ、 外面裏：-、内面： 上半タテナデ・粘 土組織み上げ痕、 下半タテナデ	ヒレ裏面痕跡
基部	-	-	-	外面：調整不明、 台形のタガ、透孔、 内面：タテナデ	-	-
出土調査区	6-2 調査区 (埴輪 A 群他)			6-2 調査区		
胎土	やや精良	備考：側突孔は 1 段目筒状部の 1 箇所のみ確認		やや不良	備考：側突孔は 1 段目左側ヒレの 1 箇所のみ確認	
焼成	良好 (軟質)			良好 (軟質)		
色調	淡橙褐色			黄褐色		

番号	125			141	144	145
法量	残存高 36.2cm ヒレ高さ 4 段目 左側 (13.7cm) 3 段目以下不明	最大幅 4 段目 左側 (30.2cm) ヒレ突出 4 段目 左側 (8.5cm) 3 段目以下不明	筒状部最大径 3 段目 13.8cm	残存高 11.9cm 底部径 23.8cm 底部に高さ 2.5cm の肥厚	残存高 7.9cm 残存径 20.0cm	残存高 6.4cm 底部径 26.2cm
調整等	左側ヒレ	筒状部	右側ヒレ	ヒレ・筒状部	ヒレ・筒状部	ヒレ・筒状部
4 段目	表：タテナデ・側 突孔、裏：タテナデ、 ユビオサエ・筒状 部の開口部から延 びる斜め方向の支 柱状突帯	外面表：調整不明、 外面裏：タテナデ、 ユビオサエ・開口 部端部肥厚、内面： 粘土組織み上げ痕	-	-	-	-
3 段目	表：タテナデ、裏： タテナデ	外面表：調整不明、 外面裏：上半タテ ナデ・下半タテハ ケ	-	-	-	-
中央挟り	/	/	/	/	/	/
2 段目	-	-	-	-	-	-
1 段目	-	-	-	-	-	-
基部	-	-	-	外面：タテハケ・ 内面：ユビオサエ、 下方裏面部に接合 時の規み痕跡	-	外面：タテハケ・ 底部付近に突帯貼 り付け時の断線ナ デ、底面：未調整、 内面：ナデ
出土調査区	6-2 調査区			6-2 調査区	7-1 調査区 (3 区 埴輪集中部)	7-1 調査区
胎土	やや粗	備考：側突孔は 4 段目左側ヒレの 1 箇所のみ確認		やや精良	やや精良	やや粗
焼成	良好 (軟質)			良好	良好	良好
色調	橙褐色			灰白褐色	橙色	にぶい橙色

番 号	146			149			
	残存高 49.0cm	最大幅 2 段目 15.9cm	筒状部最大径 2 段目 15.9cm	残存高 59.6cm	最大幅 2 段目 復元幅 37.5cm	筒状部最大径 2 段目 15.9cm	
法 量	ヒレ高さ不明	ヒレ突出不明	上部挟り不明 中央挟り部残存高 4.5cm 基部不明	ヒレ高さ 4 段目 左側 18.0cm 3 段目左側 16.5cm 2 段目右側 16.0cm 1 段目不明	ヒレ突出 3 段目 左側 (8.5cm) 2 段目右側 9.7cm	上部挟り復元幅 5.2cm 中央挟り部 復元高 4.5cm 基部不明	
	調整等	左側ヒレ	筒状部	右側ヒレ	左側ヒレ	筒状部	右側ヒレ
4 段目	-	外面表：調整不明、 外面裏：調整不明、 開口部、内面：ナデ、 粘土組織み上げ痕	-	表：タテハケ・ヨ コナデ・刺突孔、裏： ナデ・筒状部開口 部から延びる斜め 方向の支柱状突起	外面表：タテハケ・ 上部挟り、外面裏： ナデ・開口部、内面： ナデ・粘土組織み 上げ痕	表：調整不明、裏： ナデ・筒状部の開 口部から延びる斜 め方向の支柱状突 起	-
3 段目	ヒレ剥離痕跡	外面表：タテハケ・ 緩い弧線 2 条、外 面裏：-、内面：ナデ、 粘土組織み上げ痕	ヒレ剥離痕跡	表：ナデ・刺突孔、 裏：ナデ	外面表：タテハケ・ ナデ・刺突孔、外 面裏：-、 内面：タテナデ	-	-
中央挟り	外面表：タテハケ、 外面裏：- 内面：ナデ	/	/	外面表：タテハケ・ ナデ、外面裏：- 内面：タテナデ、 粘土組織み上げ痕	/	/	/
2 段目	ヒレ剥離痕跡	外面表：タテハケ、 外面裏：- 内面：ナデ、粘土 組織み上げ痕	ヒレ剥離痕跡	-	外面表：タテハケ・ ナデ・刺突孔 内面裏：- 内面：タテナデ	表：ナデ・刺突孔、 裏：ナデ	-
1 段目	-	-	-	ヒレ剥離痕跡	外面表：タテハケ・ ナデ・刺突孔 外面裏：- 内面：タテナデ	ヒレ剥離痕跡	-
基 部	-	-	-	-	-	-	-
出土調査区	4-2 調査区			5-2 調査区 (埴輪溜まり 3)			
敷 土	やや粗	備考：刺突孔未確認、3 段目の筒状部に 緩やかな円弧の線刻 2 条		やや粗	備考：刺突孔は筒状部の 1～3 段目、ヒ レ部の 2～4 段目で 6 箇所確認		
焼 成	良好 (軟質)			良好 (軟質)			
色 調	橙灰褐色			橙褐色			

番 号	150			160	161	164
	残存高 58.0cm	最大幅 2 段目 復元幅 35.5cm	筒状部最大径 2 段目 15.5cm	残存高 6.5cm 底部径 20.8cm	残存高 41.5cm 底部径 23.1cm	残存高 7.9cm 底部径 16.0cm
法 量	ヒレ高さ 4 段目 右側 (12.0cm) 3 段目右側 14.0cm 2 段目右側 14.5cm 1 段目不明	ヒレ突出 3 段目 右側 (9.0cm) 2 段目右側 (7.0cm)	上部挟り不明 中央挟り部復元高 5.5cm 基部不明	底部に高さ 1.5cm 前後の突起	タガ 3 段目 6.2cm 以上 2 段目 16.5cm 1 段目 18.8cm (底部に高さ 2.0cm 前後の突起)	底部に高さ 1.5cm 前後の突起
	調整等	左側ヒレ	筒状部	右側ヒレ	ヒレ・筒状部	ヒレ・筒状部
4 段目	表：ナデ・刺突孔、 裏：ナデ・筒状部 開口部から斜め方 向の支柱状突起	外面表：ナデ、外 面裏：ナデ・開口部、 内面：ナデ	表：ナデ・刺突孔、 裏：ナデ・筒状部 開口部から斜め方 向の支柱状突起	-	-	-
3 段目	表：タテナデ・刺突 孔、裏：タテナデ	表：調整不明、裏： ナデ	表：タテナデ・刺突 孔、裏：タテナデ	-	-	-
中央挟り	外面表：ナデ、外 面裏：タテハケ、 内面：タテナデ	/	/	-	-	-
2 段目	ヒレ剥離痕跡	外面表：調整不明、 刺突孔、外面裏： タテハケ、内面： タテナデ	表：タテナデ・刺 突孔、裏：タテナ デ	-	-	-
1 段目	ヒレ剥離痕跡	外面表：調整不明、 外面裏：タテハケ、 内面：タテナデ	表：調整不明、裏： タテナデ	-	-	-
基 部	/	/	/	外面：タテハケ・底 部付近に突起貼り 付け時のナデ、底 面：工具痕跡、内面： 調整不明	外面：タテナデ・底 部付近に突起貼り 付け時の断続ナデ、 内面：タテナデ、 粘土組織み上げ痕	外面：タテナデ・底 部付近に突起貼り 付け時の断続ナデ、 底面：ナデ、内面： ヨコナデ・底部付 近ユビオサエ、粘 土組織み上げ痕
出土調査区	5-2 調査区 (埴輪溜まり 3)			5-2 調査区 (埴輪溜まり 2-3 地)	5-2 調査区 (埴輪溜まり 3 地)	7-3 調査区 (4 区)
敷 土	やや粗	備考：刺突孔は筒状部の 2 段目、ヒレ部 の 2～4 段目で 6 箇所確認		やや粗	やや粗	精良
焼 成	良好 (軟質)			良好 (軟質)	良好 (軟質)	良好
色 調	橙褐色			橙灰色	橙褐色	灰色

※ 観察表中「-」は、欠損のための確認できなかったことを示す。

付表-9 石見型埴輪観察表2

番号	部位	法量 (cm)		調整等	出土調査区	胎土	焼成	色調
		残存高	残存幅					
126	4段目右側ヒレの上部	7.8	11.6	ヒレ表：ナデカ・刺突孔（4段目ヒレ）、ヒレ裏：斜め方向の支柱状突起・ユビオサエ	6-2調査区	やや粗	良好（軟質）	橙褐色
127	3段目右側ヒレの上半部	11.7	9.6	ヒレ表：ナデ・刺突孔（3段目ヒレ）、ヒレ裏：ナデ・筒状部との剥離痕跡	7-2調査区	やや粗	良好	にぶい橙色
128	3段目左側ヒレの下半部～左側中央決りの上半部	15.9	7.5	ヒレ表：タテナデ・刺突孔（3段目ヒレ）、ヒレ裏：タテナデ・筒状部との剥離痕跡	6-2調査区（西くびれ部東平地山直上）	粗	良好（軟質）	橙褐色
129	3段目右側ヒレ～右側中央決りの上半部	17.9	9.4	ヒレ表：ナデ・刺突孔（3段目ヒレ）、ヒレ裏：タテナデ・筒状部との剥離痕跡	6-2調査区（埴輪A群）	やや粗	良好（軟質）	橙褐色
130	3段目左側ヒレの下半部～左側中央決り～2段目左側ヒレ	24.3	10.7	ヒレ表：調整等不明、ヒレ裏：ナデ・表かしの刺突孔（2段目ヒレ）・筒状部との剥離痕跡	6-2調査区（埴輪A群他）	やや精良	良好（軟質）	淡黄褐色
131	2段目右側ヒレ・筒状部の下半部～1段目右側ヒレ・筒状部の下半部	24.4	11.6	ヒレ表：ナデ・刺突孔（2段目ヒレ・貫通せず）、ヒレ裏：タテナデ・筒状部外面表：ナデ、筒状部外面裏：タテハケ・ナデ、筒状部内面：調整不明	6-2調査区	やや粗	良好（軟質）	橙褐色
132	2段目右側ヒレ	16.4	12.2	ヒレ表：ナデ、ヒレ裏：ナデ	6-2調査区（埴輪A群）	やや粗	良好（硬質）	にぶい橙色
133	2段目右側ヒレの下半部～1段目右側ヒレの上半部	23.0	7.6	ヒレ表：ナデ・刺突孔（2・1段目ヒレ）、ヒレ裏：ナデ・筒状部との剥離痕跡	6-2調査区（埴輪A群他）	やや粗	良好（軟質）	淡橙褐色
134	2段目左側ヒレ	19.1	10.8	ヒレ表：ユビオサエ・刺突孔（2段目ヒレ）、ヒレ裏：ナデ・筒状部との剥離痕跡	8-5調査区（Y-3区 埴輪集中部）	やや精良	良好	橙褐色
135	2段目ないし1段目右側ヒレの下部	10.2	10.6	ヒレ表：ナデ・刺突孔、ヒレ裏：ナデ	6-2調査区（埴輪B群他）	やや粗	良好（軟質）	黄褐色
136	3段目左側ヒレの上半部	12.0	7.8	ヒレ表：ナデ・刺突孔（3段目ヒレ）、ヒレ裏：ナデ・筒状部との剥離痕跡	6-2調査区	やや粗	良好（軟質）	橙褐色
137	3段目右側ヒレの上半部	11.0	9.0	ヒレ表：調整不明・刺突孔（3段目ヒレ）、ヒレ裏：調整不明	6-2調査区（埴輪B群他）	やや精良	良好（軟質）	橙褐色
138	2段目ないし1段目左側ヒレの中央部～筒状部	11.9	8.4	ヒレ表：ナデ、ヒレ裏：ナデ、筒状部外面裏：調整不明、筒状部内面：ナデ	6-2調査区	やや粗	良好（軟質）	橙褐色
139	4段目右側ヒレ～筒状部か	12.1	10.8	ヒレ表：ユビオサエ、ヒレ裏：調整不明、筒状部外面裏：調整不明、筒状部内面：ユビオサエ	8-5調査区（Y-2区 埴輪集中部）	精良	良好	橙色
140	2段目ないし1段目左側ヒレの上半部～筒状部	13.6	8.6	ヒレ表：ユビオサエ・刺突孔（ヒレ）、ヒレ裏：調整不明、筒状部外面裏：ハケメ、筒状部内面：調整不明	8-5調査区（Y-3・4区 域）	精良	良好	橙色
142	基部上の筒状部裏側	8.9	7.7	外面：ハケ・縞線状の縦筋、内面：ナデ、縞線状の縦筋、下方剥離面に接合時の筋み痕跡	7-1調査区（3区 埴輪集中部）	やや精良	良好	橙色
143	段数・左右不明のヒレ～筒状部	6.1	7.3	ヒレ表：ナデ、ヒレ裏：ナデ、筒状部内面：ナデ	7-1調査区（3区 埴輪集中部）	粗	良好	橙色
147	4段目左側ヒレの上部	7.3	9.6	ヒレ表：調整不明・刺突孔（4段目ヒレ）、ヒレ裏：斜め方向の支柱状突起・ユビオサエ	4-2調査区	やや粗	良好	橙色
148	3段目右側ヒレの上半部	10.8	8.1	ヒレ表：ナデ、ヒレ裏：ナデ・ユビオサエ	4-2調査区	やや粗	良好	橙灰褐色
151	4段目右側ヒレの上半部	10.6	9.6	ヒレ表：ナデ・刺突孔（4段目ヒレ）、ヒレ裏：ナデ・斜め方向の支柱状突起・ユビオサエ	5-2調査区（埴輪沼まり2）	やや粗	良好	乳灰白色
152	3段目右側ヒレ～右側中央決りの上半部	16.9	11.7	ヒレ表：調整不明・刺突孔（3段目ヒレ）、ヒレ裏：タテナデ・筒状部との剥離痕跡	8-1調査区（2-3区アゼ）	やや精良	良好	橙色

番号	部位	法量 (cm)		調整等	出土調査区	胎土	焼成	色調
		残存高	残存幅					
153	段数・左右不明のヒレ	12.1	7.3	ヒレ表裏：ナデ	5-2 調査区 (埴輪留まり3)	やや粗	良好	乳橙灰白色
154	2段目左側ヒレ	16.7	10.2	ヒレ表：タテナデ・刺突孔(2段目ヒレ)、 ヒレ裏：調整不明・筒状部との剥離痕跡	8-1 調査区 (3区 東西溝)	精良	良好	橙色
155	1段目右側ヒレ	12.7	5.9	ヒレ表：ナデ・刺突孔(1段目ヒレ)、 ヒレ裏：ナデ・筒状部との剥離痕跡	5-2 調査区 (埴輪留まり2)	やや粗	良好	乳橙灰白色
156	2段目右側ヒレの上半部	10.5	7.4	ヒレ表：ナデ・刺突孔(2段目ヒレ)、 ヒレ裏：ナデ・筒状部との剥離痕跡	5-2 調査区 (埴輪留まり2)	やや粗	良好	乳橙灰白色
157	2段目ないし1段目右側ヒレの下半部	12.5	9.5	ヒレ表：ナデ・刺突孔(ヒレ)、ヒレ裏： ナデ・筒状部との剥離痕跡	5-2 調査区 (埴輪留まり2)	やや粗	良好	乳橙灰白色
158	4段目ヒレか	9.8	13.8	ヒレ表：調整不明・刺突孔(ヒレ)、 ヒレ裏：ナデ・斜め方向の支柱状突起部 か・ユビオサエ	8-1 調査区 (4区 東西溝)	やや精良	良好	橙色
159	2段目右側ヒレの上半部	12.0	8.1	ヒレ表：調整不明・刺突孔(2段目ヒレ)、 ヒレ裏：調整不明	8-1 調査区 (2-3区 アゼ)	やや精良	良好	橙色
162	1段目左側ヒレ～基部上の筒状部	11.8	9.0	ヒレ表：ナデ・刺突孔(1段目ヒレ)、 ヒレ裏：調整不明・筒状部内面；ナデ・ ユビオサエ・上下剥離面に接合時の刻 み痕跡	7-3 調査区 (4区)	やや粗	良好	にぶい橙色
163	2段目右側ヒレ	16.8	6.8	ヒレ表：ナデか・刺突孔(2段目ヒレ)、 ヒレ裏：ナデか・筒状部との剥離痕跡	7-3 調査区 (4区)	やや精良	良好	黄橙色

2. 人物形埴輪 (第30図、附表-10、巻頭図版2、図版12)

人物形埴輪でその種別を推測できるものは、巫女形とした165に限られる。その他の人物形埴輪には、頭部から首部(166～168・172)、胴部(169・177)、肩から腕部(174～176・178～180)の他、装飾の種類から人物形埴輪の一部と考えた破片(170・171・173)がある。いずれも西側造り出し周辺の調査区から出土したものであり、その他の調査区では認められなかった。また、造り出し周辺でも前方部側である南半部に多く見られた。

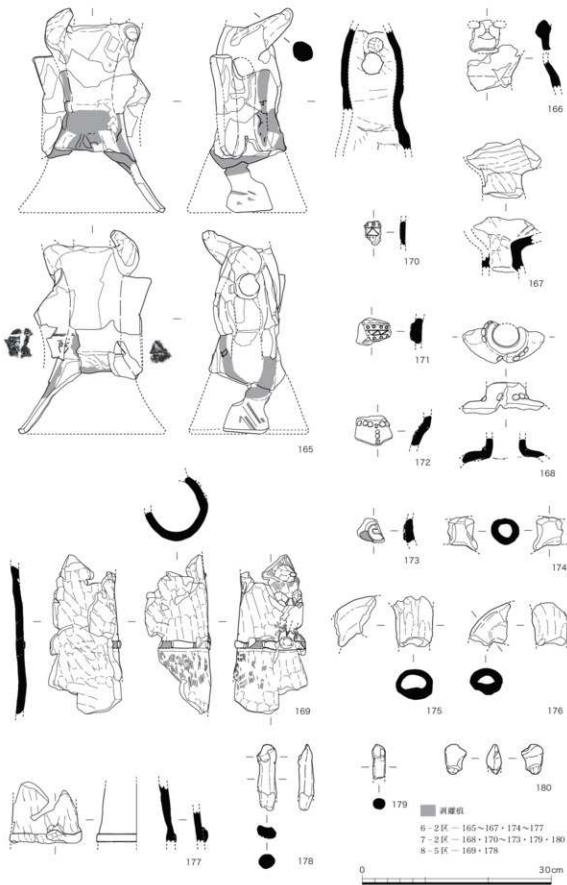
165の巫女形埴輪は、両手を頭部の前に掲げた形態を取るものと考えられ、腰より下の裾部はスカート状に広がる。背中側には両脇の下から腰部にかけて板状の装飾が付加されているが、剥離痕跡から同様の板状装飾が胸側にも付くものと考えられる。背中側の板状装飾には、腰部近くに竹管文や鋸歯文・直線文が施されていた。頭部は失われているが、頭部の大きさや形態から中空と考えられる。また、腕部は、肩から肘部近くまでが中空で、肘より先が中実で作られていた。166は、頭部の顔面下半にあたるもので、目と口を透孔で表現し、鼻は低く隆起させる。168は頸部から肩部にあたり、頸部には小さな円形の粘土塊を連続して貼り付けて首飾りの玉を表現する。169・177は、いずれも腰部に着衣の紐と上方向の結び目が粘土帯で表現されていた。169の上部には腕部を取り付けるための突起が残されており、巫女形の165とは異なった腕部の接続方法であったことが分かる。170～173では、線刻による竹管文や鋸歯文・直線文(170・171)、粘土の小塊による円形や勾玉状の浮文(172・173)が見られた。施文の種類や破片の形状から、171は冠などの一部、172・173は首飾りの一部と推測される。

3. 動物形埴輪 (第31～33図、附表-10、巻頭図版2、図版13)

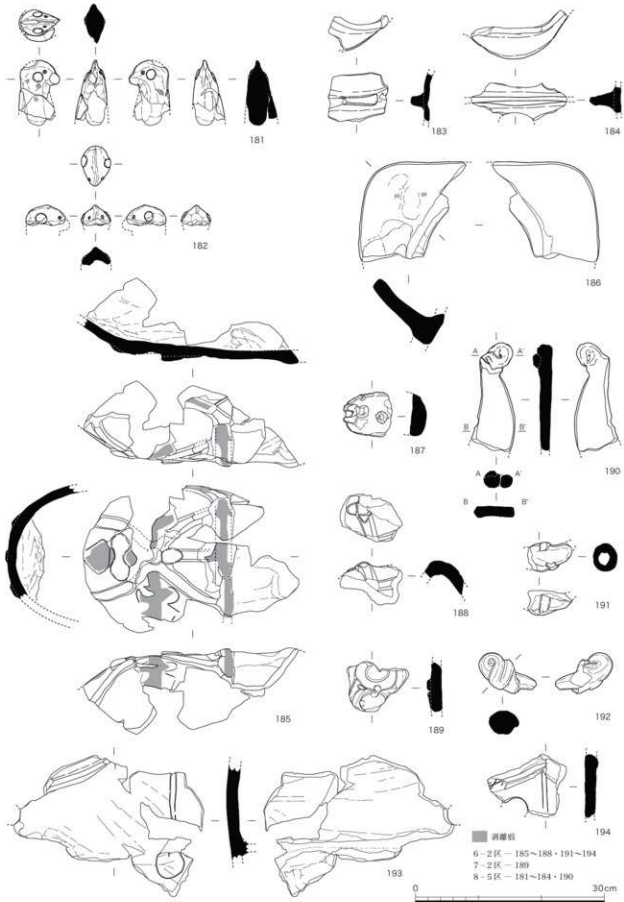
動物形埴輪の出土調査区も、人物形埴輪と同様に西側造り出し周辺に集中する。確認できた動物形埴輪には、鶏形埴輪(181・182)と鳥形埴輪の基部(183・184)、馬形埴輪(185～194)、牛形埴輪(195)がある。また、種別不明の尻尾片(196)や脚部片(197～211)もあることから、さらに多くの動物形埴輪が存在したのと考えられる。種別毎の出土傾向として、鶏形埴輪および鳥形埴輪基部は造り出し周辺の後円部側、馬形埴輪や牛形埴輪などは前方部側である南半部に集中していた。

鶏形埴輪には、雄鳥の181と雌鳥の182がある。両者を比較した場合、法量上の差異はほとんど認められないが、181では肉髯の剥離痕が認められるとともに、鶏冠が明瞭に表現されていた。また、目と耳の間隔を狭めることで、頭部から頸部がより直立的な形態をとるものと考えられる。頭部の状況も異なっており、181が中実であるのに対し182は中空で作られていた。183・184は、鈎が円筒部の円弧と一致せず大きく膨らむことから、鳥形埴輪の基部と考えた。184では、鈎最大径の下に透孔が認められる。先述した鶏以外の種類を確認していないことから、鶏形埴輪の基部である可能性が高い。

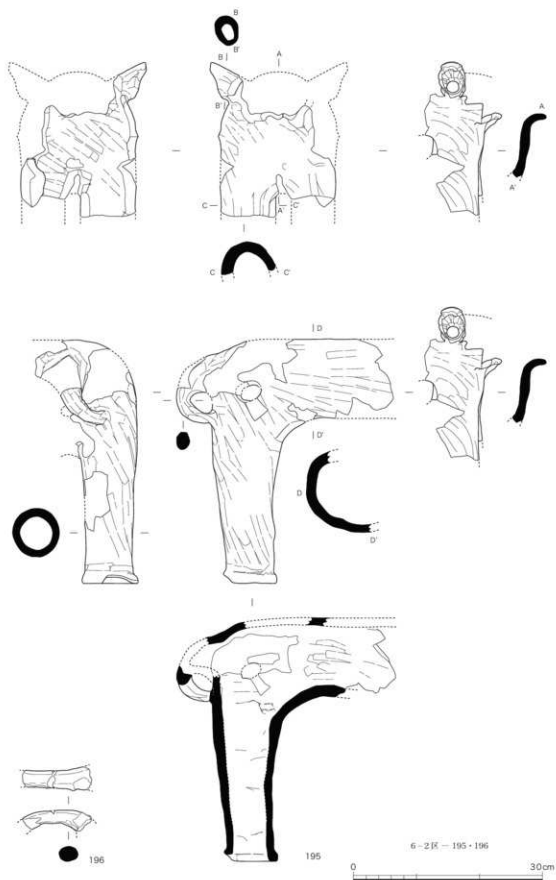
馬形埴輪と考えたものには、鞍部から尻尾(185)、前輪ないし後輪の一部(186)、馬具飾り(187～189)、鬣(190)、尻尾(191・192)、障泥の一部と考えられるもの(193)の他、部位不明ながら胴部と考えられるもの(194)がある。185は、鞍部の中央部が僅かに窪み、



第30图 人物形填輪実測图 (1/6)



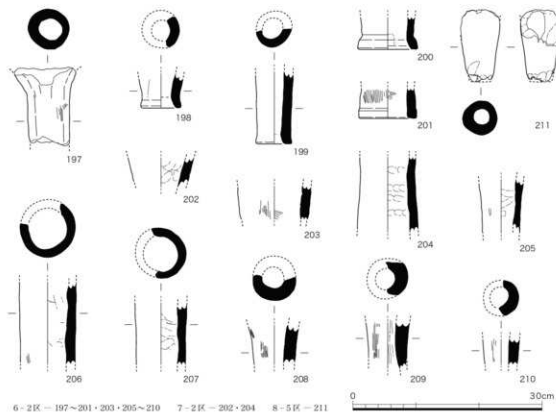
第31図 動物形埴輪実測図I (1/6)



第32图 動物形填輪実測図2 (1/6)

その後ろに後輪の剥離痕跡が認められる。尾部には粘土帯によって交差する革網が表現され、飾り金具や尻尾が剥離した痕跡を見ることができる。186は、前輪ないし後輪の一部と考えたが、胴部との接続関係が明らかでないことから障泥など他の部位である可能性を残す。193は、平滑に整えられた面に線刻によって垂加された鍔が表現されている。粘土帯による革網の表現、透孔の位置などから左側の障泥と考えたが、前脚の上部に推定される透孔と鍔の間には、段差や突帯による障泥の縁取りが認められない。飾り金具の内、188には辻金具、189には杏葉などの表現を見ることができる。187は、楕円形を呈しており、長軸の端に半円形の小さな粘土塊が付加されている。190は鬣を表現したものと考えられ、弯曲気味に先へ向かって細く延び、その先端には捩りが加えられている。尻尾には、尾を束ねる紐が表現されたもの(191)と短く巻かれた尾を表現するもの(192)がある。192は、尻尾を臀部に差し込んで接続するもので、185の貼り付けによる接続形態とは異なっていた。

牛形埴輪(195)は、右耳を含む頭部から前脚の一部、胴部の右側から尻尾、右後ろ脚が残存していた。内外面ともに丁寧なナデによって仕上げられており、ハケメは全く看取されない。頭部は、別造りの耳を耳孔が貫通するように接続している。口上半および目を含む頭部上半が失われているが、頭部は水平から僅かに上を向くものと考えられる。右後ろ脚は遺存状態が良く、脚底部の踵部分は半楕円形に抉られていた。臀部には中実で棒状の尻尾が付き、尻尾の先端は右後ろ脚の付け根付近に接続されている。牛形埴輪は、石見型埴輪以外で唯一、全体の法量を知ることができる個体である。右後ろ脚の底面から腰部までの高さ約39cm、頭頂部まで



第33図 動物形埴輪実測図3 (1/6)

の推定高は44cm程度、口先から尻尾までの長さが60cm前後と推定される。

動物形埴輪の脚部は15個体(197～211)を図示した。いずれも円筒形を呈し、197が胴体との付け根部分、198～201が脚底面を含む破片である。脚底面では、底面近くを外側へ屈曲させるもの(198～200)、底面近くがやや肥厚するもの(200・201)が見られた。外面調整にはナデが多用されているが、197・201などハケメを残すものも散見される。

4. 家形埴輪(第34・35図、附表-10、巻頭図版2、図版14)

家形埴輪も西側造り出し周辺の調査区に集中し、後円部側である造り出し周辺の北半部に多く認められた。また、極めて少量ではあるが、東側くびれ部(4-2調査区)、そして、横穴式石室(9調査区)でも出土している。家形埴輪として図示したのは、堅魚木を含む屋根部(212～225・235)、壁および基部(226～234)であり、屋根部分を含む破片が目立つ。

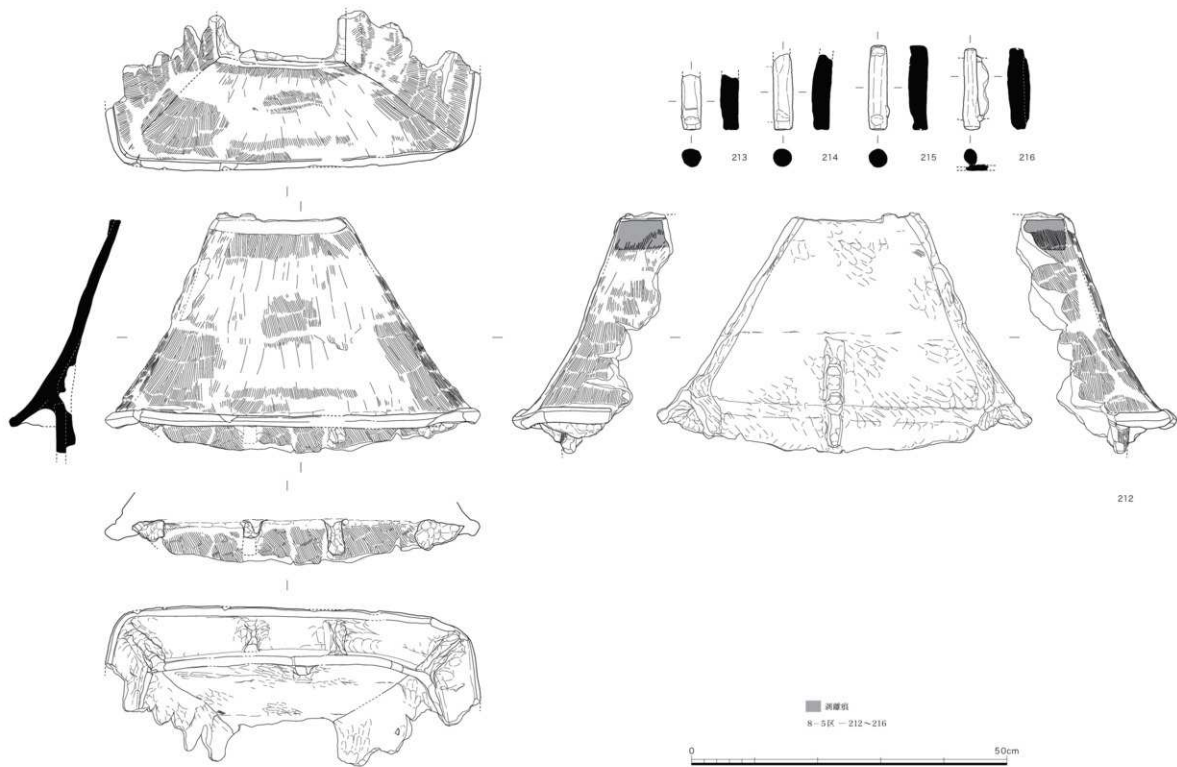
寄棟建物の212は、棟頂部から軒先、壁の一部を残し、残存高38.2cmで、屋根の高さ約33cm、軒先の幅59.5cmを測る。棟頂部には、隣接する取り上げ区画から出土した堅魚木(213～216)を載せるものと考えられる。寄棟屋根の頂部は、幅20cm程を縁取りし、その内側が開いていた。開口部には堅魚木が載せられるが、堅魚木の215などに見られる窪みから、開口部が奥行き10cm程度の長方形であったことが分かる。棟両側の屋根には幅5cm程の剥離痕跡が認められた。堅魚木の216から、この部分には棟両端の堅魚木を付けた板状装飾が付加されたものと考えられる。屋根の軒先はやや肥厚させており、軒先の両側と中央部の4箇所には壁から延びる支柱が見られた。寄棟建物の外面調整は、粗いハケメを主体とし部分的にナデが施されるが、棟頂部付近と肥厚させた軒先から軒先の裏側はナデのみで調整している。内面調整は、強いナデによってハケメがほとんど消されていた。内面の中央部には、壁付近から屋根の中程にかけて縦方向の支柱が見られた。支柱上端の上には、横方向の明瞭な粘土積み上げ体止線が認められることから、支柱は成形過程の屋根下半が内側へ変形することを防ぐための補強材と考えられる。なお、寄棟建物212では、壁面に扉などの開口部や柱の表現は認められなかった。また、屋根には棟頂部の堅魚木以外に、刺突孔や突帯などの装飾は施されていない。

切妻建物の218～225は、屋根に関連する破片である。屋根には横方向および縦方向の突帯が付加され、220・221・223には破風の表現、220の棟頂部と221の屋根中程には装飾に用いる刺突孔が認められた。なお、切妻建物の家形埴輪では屋根の規模を復元できなかった。

その他の家形埴輪(226～234)では、壁や基部に突帯を付加するものが散見されたが、入り口などの開口部を残すものは認められなかった。

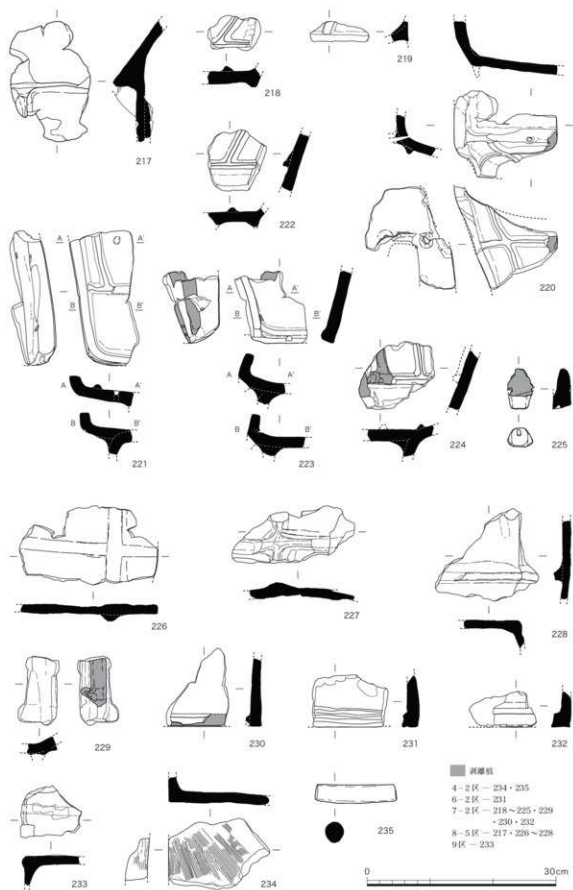
5. 器形埴輪(第36・37図236～252、附表-10、巻頭図版2、図版15)

器形埴輪と考えたものには、盾形埴輪(236～238)、靱形埴輪(239～246)、靱形埴輪(247)、太刀形埴輪(248)、蓋形埴輪(249～252)があり、盾形埴輪の237を除く全てが、西側造り出し周辺の調査区から出土した。種別毎の出土調査区では、盾形埴輪と靱形埴輪が造り出し周辺の後円部側に多い傾向がある。

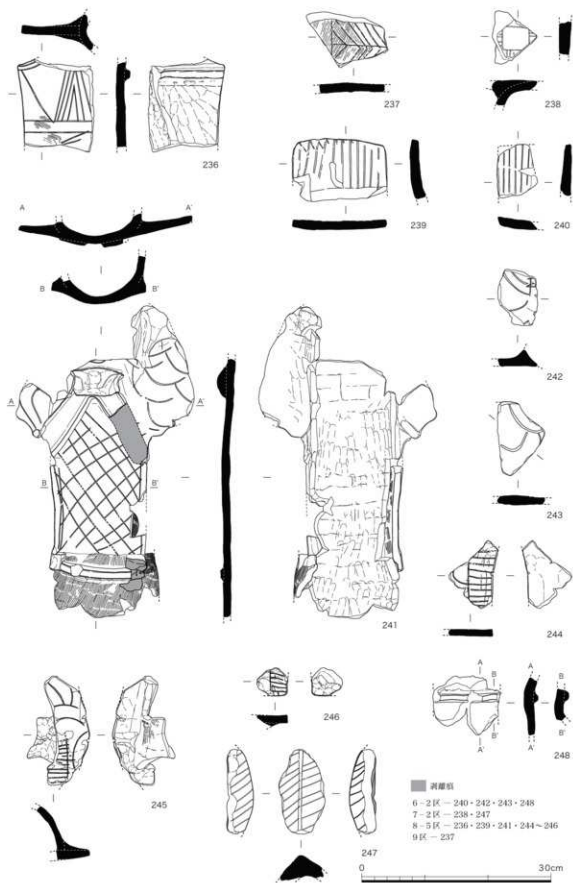


212

第34图 冢形埴輪夾脚圖1 (1/6)



第35図 家形埴輪実測図2 (1/6)



第36图 器形填輪实测图(1/6)

盾形埴輪の236は、盾面上部の左側にあたり、線刻による山形文と直線文などが見られる。237・238は、盾面中央部と考えられ、237に綾杉文、238には格子文の周囲に柳歯文を施している。

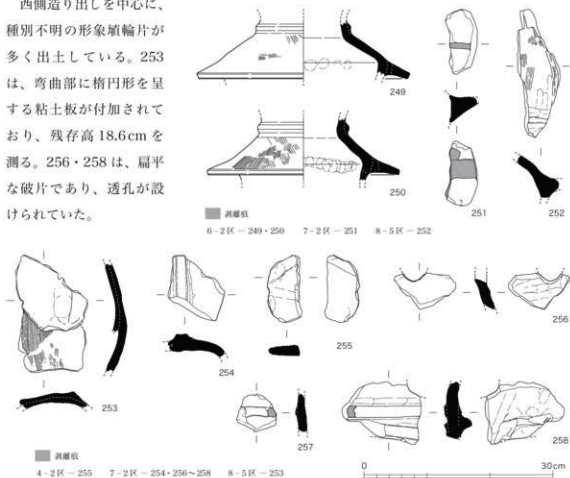
靱形埴輪の239・240は、弓矢の鉄身を縦線で表現し、239には鉄の先端が斜め線で描かれる。靱形埴輪とした241は、上部に横方向の剝離痕があり、239が接続するものと考えた。残存高50.3cmで、筒状部の幅15cm前後を測る。筒状部の外面は粗い斜格子文が施され、上部の両側には円弧文を伴った板状装飾が付加される。筒状部の両側面から延びる斜め方向の粘土帯は、背負い紐を表現したものと考えられ、中央部上方の結び目状の隆起に接続していた。242～246は、円弧文や柳歯文を施した装飾部が板状を呈することから靱形埴輪の一部と考えた。

靱形埴輪(247)と太刀形埴輪(248)は、いずれも破片数が少なく、どのような形態になるのかなど詳細が判然としない。

蓋形埴輪の249・250は、基部から笠部が残るもので、笠部の直径が33.8cmと30.6cmを測る。251・252は、円弧を描く破片の形状などから蓋形埴輪の一部と考えたが、動物形埴輪など他の形象埴輪である可能性を残す。

6. 種別不明の形象埴輪 (第37図 253～258、付表-10)

西側造り出しを中心に、種別不明の形象埴輪片が多く出土している。253は、弯曲部に楕円形を呈する粘土板が付加されており、残存高18.6cmを測る。256・258は、扁平な破片であり、透孔が設けられていた。



第37図 器形埴輪・種別不明埴輪実測図 (1/6)

付表-10 形象埴輪観察表 (石見型埴輪は付表-8・9に掲載)

番号	種類	部位	法 量 (cm)			調整等	胎土 焼成 色調		
			残存高	残存幅	厚さ		出土調査区		
165	人形形	巫女形 胴部	32.2	21.5	1.2 ~ 1.7	外面: (胸部) ナデ、(胴部) ナデ・ヘラ調整・線刻-副歯文・竹管文・透孔2箇所4.1cm ~3.8cm、(裾部) ナデ・ハケ・ヘラ調整 内面: ナデ・粘土組織み上げ後ナデ、(裾部) ハケ	やや精良	良好 (硬質)	乳褐色
							6-2調査区 (埴輪B群)		
166	人形形	頭部	12.2	8.5	1.5 ~ 2.2	外面: 調整不明 内面: 調整不明	やや精良	良好 (硬質)	乳肌色
							6-2調査区 (埴輪B群)		
167	人形形	頭部か	9.3	11.7	1.1 ~ 2.1	外面: (上部) 横方向のナデ、(下部) タテ 方向のナデ 内面: 粘土組織み上げ痕	やや粗	良好 (硬質)	肌色
							6-2調査区 (埴輪B群)		
168	人形形	首部	5.1	13.0	0.9 ~ 1.4	外面: ナデ・珠状装飾の貼り付け 内面: ナデ・粘土組織み上げ痕	やや精良	良好	にぶい黄褐色
							7-2調査区 (C-5区)		
169	人形形	胴部	25.3	11.5	0.9 ~ 1.4	外面: (胴部) ナデ・帯状の貼り付け時のナ デ、(裾部) ハケ・ナデ 内面: ナデ	粗	良好	にぶい褐色
							8-5調査区 (H-3・4区)		
170	人形形 か	不明の 装飾	3.8	2.7	0.9	外面: 竹管文・刺突文・線刻-副歯文 内面: ナデ	精良	良好	にぶい褐色
							7-2調査区 (E-3区)		
171	人形形 か	不明の 装飾	4.4	5.6	2.1	外面: ナデ・竹管文・線刻-副歯文 内面: ナデ	やや精良	良好	にぶい褐色
							7-2調査区 (D-4区)		
172	人形形	首部か	4.7	5.9	1.1	外面: ナデ・珠状装飾の貼り付け 内面: ナデ	やや精良	良好	褐色
							7-2調査区 (B-4区)		
173	人形形 か	不明の 装飾	3.8	3.9	1.1 ~ 1.7	外面: 装飾貼り付け時のナデ 内面: ナデ	精良	良好	にぶい黄褐色
							7-2調査区 (G-4区)		
174	人形形	腕部	5.4	6.5	0.8 ~ 1.2	外面: ナデ 内面: 調整不明	やや精良	良好	浅黄褐色
							6-2調査区 (埴輪B群)		
175	人形形	腕部	7.9	6.5	0.9 ~ 1.9	外面: ナデ 内面: 調整不明	精良	良好 (硬質)	明黄褐色~ 浅黄褐色
							6-2調査区 (埴輪B群)		
176	人形形	腕部	7.0	5.8	1.0 ~ 2.4	外面: ナデ 内面: 調整不明	精良	良好 (硬質)	にぶい褐色
							6-2調査区 (埴輪B群)		
177	人形形	胴部~ 基部	9.5	11.0	0.8 ~ 2.1	外面: ナデ・帯状の貼り付け後ナデ 内面: ナデ	精良	良好 (硬質)	淡茶褐色
							6-2調査区 (埴輪B群)		
178	人形形	腕部	10.5	3.1	1.5 ~ 2.5	外面: ナデ	やや精良	良好	にぶい褐色
							8-5調査区 (C・D-1・2区)		
179	人形形	腕部	5.5	1.9	1.3 ~ 1.7	外面: ナデ	やや粗	良好	褐色
							7-2調査区 (E-3区)		
180	人形形	腕部	4.7	3.4	最大 2.4	外面: 調整不明	精良	良好	にぶい黄褐色
							7-2調査区 (C-5区)		
181	鳥形 (雄鳥)	頭部	10.8	6.5	最大 5.0	外面: ユビオサエ後ナデ・ハケ・耳部貼り 付け・肉髯調整・首部への差し込み痕跡	精良	良好	にぶい褐色
							8-5調査区 (Z-1区 埴輪集中部)		
182	鳥形 (雌鳥)	頭部	3.3	4.7	最大 2.0	外面: ユビオサエ後ナデ・耳部貼り付け 内面: 調整不明	やや粗	良好	にぶい褐色
							8-5調査区 (Y-3区 埴輪集中部)		
183	鳥形か	基部	7.8	9.5	0.8 ~ 2.9	外面: 突帯貼り付け時のナデ 内面: 斜め方向のナデ	やや精良	良好	褐色
							8-5調査区 (Y-3区)		
184	鳥形か	基部	5.9	15.2	0.8 ~ 4.9	外面: ハケメ・ナデ・透孔 内面: 調整不明	やや精良	良好	褐色
							8-5調査区 (Z-4区)		

番号	種類	部位	法 量 (cm)			調整等	胎土	焼成	色調
			残存高	残存幅	厚さ				
185	馬形	鞍部～ 尻尾	13.2	34.6	1.8～ 2.6	外面：ヨコナデ・鞍や辻金具などの馬具を 表現 内面：ナデ・強いユビオサエ	やや精良	良好(軟質)	乳褐色
186	馬形	前輪な いし後 輪	15.2	15.1	1.4～ 4.0	外面：[表] ハケ後ナデか、[裏] ナデ 内面：ナデ	やや精良	良好(軟質)	橙褐色
187	馬形	馬具飾 りの一 部	7.1	7.7	最大 2.5	外面：ナデ・突起貼り付け	やや精良	良好(硬質)	にぶい橙色
188	馬形	馬具飾 りの一 部	6.9	9.6	2.1～ 3.1	外面：ナデ・辻金具を表現 内面：ユビオサエ後ナデ	粗	良好	褐色
189	馬形	馬具飾 りの一 部	8.0	9.9	最大 2.4	外面：ナデ・飾り金具を表現・装飾貼り付 け時のナデ 内面：ナデ	やや精良	良好	褐色
190	馬形	鬣か	17.2	6.8	1.3～ 3.1	外面：[表・裏] ナデ・ユビオサエ	精良	良好	褐色
191	馬形	尻尾	3.8	7.1	0.8～ 1.2	外面：ナデ 内面：調整不明	やや精良	良好	褐色
192	馬形	尻尾	6.5	9.7	最大 3.7	外面：ナデ・臀部への差し込み痕跡	やや粗	良好	褐色～黄褐色
193	馬形か	蹄泥の 一部か	19.0	29.9	1.8	外面：ナデ・線刻・直線と凹弧・透孔・突 帯貼り付け 内面：ナデ	精良	良好(硬質)	乳肌色
194	馬形か	胴部か	10.1	12.8	1.5～ 2.0	外面：ナデ・線刻・透孔・突帯貼り付け 内面：ナデ	やや粗	良好(軟質)	褐色
195	牛形	頭部～ 前脚部	24.4	18.3	最大 1.5	外面：(耳～顔、胴部) ナデ・透孔1箇所、(脚 部) ナデ・ケズリ 内面：ナデ	やや精良	良好(硬質)	褐色
196	動物形	胴部・ 尻尾～ 後脚部	38.8	35.4	最大 1.8	外面：(胴部～尻尾) ナデ、透孔1箇所、(脚 部) ナデ、ケズリ 内面：ナデ	やや精良	良好(硬質)	褐色
197	動物形 か	尻尾	3.7	11.0	1.9～ 3.0	外面：ナデ	精良	良好	にぶい褐色
198	動物形 か	脚部か	12.5	9.9	1.0～ 1.7	外面：ナメ～タテハケ 内面：調整不明	やや粗	良好(軟質)	褐色
199	動物形 か	脚部か	5.4	7.0	最大 1.3	外面：ヨコナデ 内面：調整不明	やや粗	良好(軟質)	橙褐色
200	動物形 か	脚部か	11.5	6.0	最大 1.4	外面：ハケか・ナデ 内面：縦方向のナデ	やや粗	良好(軟質)	橙褐色
201	動物形 か	脚部か	5.1	9.5	最大 1.2	外面：ナデか 内面：ヨコナデ・ユビオサエ後ナデ	精良	良好(軟質)	にぶい褐色
202	動物形 か	脚部か	4.8	9.2	最大 1.4	外面：タテハケ・ヨコナデ 内面：ヨコハケ・ナデ	やや粗	良好(軟質)	浅黄褐色
203	動物形 か	脚部か	4.7	10.4	1.3	外面：ナデか 内面：ユビオサエ	精良	良好	にぶい褐色
204	動物形 か	脚部か	5.3	11.5	1.3	外面：タテハケ後ナデ 内面：ヨコハケ	粗	良好(軟質)	褐色
204	動物形 か	脚部か	11.9	9.7	1.2	外面：ナデか 内面：ナデ	やや精良	良好	褐色

番号	種類	部位	法 量 (cm)			調整等	土 質 成 色 調		
			残存高	残存幅	厚さ		出土調査区		
205	動物形か	脚部か	8.6	7.1	最大 1.2	外面：タテハケ 内面：ナデ	やや精良	良好(軟質)	橙褐色
							6-2調査区		
206	動物形か	脚部か	13.0	9.0	最大 1.4	外面：タテハケ 内面：ナデ・粘土組織み上げ痕	粗	良好(軟質)	橙褐色
							6-2調査区		
207	動物形か	脚部か	9.9	8.2	最大 1.2	外面：調整不明 内面：粘土組織み上げ痕、(上方)：右下方 向のナデ、(下方)：左下方向のナデ	やや粗	良好(軟質)	橙褐色
							6-2調査区		
208	動物形か	脚部か	6.4	7.9	1.7	外面：タテハケ後ナデ 内面：縦方向のナデ	やや精良	良好(軟質)	橙褐色
							6-2調査区(基輪B群)		
209	動物形か	脚部か	7.3	7.0	最大 2.0	外面：タテハケ後ナデ 内面：ナデ・殺り痕	精良	良好(硬質)	洗灰褐色
							6-2調査区		
210	動物形か	脚部か	4.1	5.8	1.5	外面：タテハケ後ナデ 内面：ナデ	粗	良好(軟質)	橙褐色
							6-2調査区		
211	動物形か	脚部か	11.5	6.2	最大 1.7	外面：ナデか 内面：ナデ	やや精良	良好	浅黄褐色
							8-5調査区(造り出し)		
212	家形 (背棟)	屋根～ 壁部	38.2	59.5	1.2～ 3.0	外面：ハケ・ナデ・上側面に方形の調離痕 内面：粘土組織み上げ痕・ナデ・貼り付け 時のナデ	やや粗	良好	橙褐色
							8-5調査区(Y-3区 基輪集中部)		
213	家形	堅魚木	2.9	3.1	2.9	外面：ナデ・端部近くが浅く窪む 家形植輪212のものか	やや粗	良好	橙褐色
							8-5調査区(Z-2区 基輪集中部)		
214	家形	堅魚木	2.8	3.1	2.8	外面：ナデ・端部近くが浅く窪む、側面に 調離痕跡 家形植輪212のものか	やや精良	良好	橙褐色
							8-5調査区(Z-2区 基輪集中部)		
215	家形	堅魚木	2.9	3.4	2.9	外面：ナデ・側部近くが浅く窪む 家形植輪212のものか	やや粗	良好	橙褐色
							8-5調査区(Z-2区 基輪集中部)		
216	家形	堅魚木	3.5	4.1	0.8～ 3.5	外面：ナデ・片側に板状の部分が残る 家形植輪212のものか	やや粗	良好	橙褐色
							8-5調査区(Z-2区 基輪集中部)		
217	家形	屋根～ 壁部	19.2	12.8	1.3～ 3.5	外面：調整不明 内面：横方向のユビオサエ・貼り付け時の ナデ	やや精良	良好	橙褐色
							8-5調査区(Y-2・3区)		
218	家形 (切妻 か)	屋根部	5.6	8.5	最大 3.3	外面：ナデ・ユビオサエ・突帯貼り付け時 のナデ 内面：ナデ	精良	良好	にぶい橙褐色
							7-2調査区(E-4区)		
219	家形 (切妻 か)	屋根部	3.2	9.4	最大 2.9	外面：ナデ・突帯 内面：ナデ	やや精良	良好	浅黄褐色
							7-2調査区(H-4区)		
220	家形 (切妻)	屋根部	16.2	16.4	最大 2.0	外面：ナデ・上部に穿孔・突帯、(破風部) ナデ 内面：ナデ・貼り付け時のナデ	精良	良好	橙褐色
							7-2調査区(D-4区)		
221	家形 (切妻)	屋根部	21.4	10.2	最大 2.5	外面：ナデ・突帯貼り付け時のナデ・穿孔、 (破風部) ナデ 内面：ナデ	やや精良	良好	橙褐色
							7-2調査区(D-4区)		
222	家形 (切妻 か)	屋根部	9.7	9.4	最大 2.0	外面：ナデ・突帯貼り付け時のナデ、(破 風部) ナデ 内面：ナデ	粗	良好	浅黄褐色
							7-2調査区(H-4・5区)		
223	家形 (切妻)	屋根部	10.4	10.9	最大 3.2	外面：ナデ・穿孔、(破風部) ナデ・穿孔 内面：ナデ	やや精良	良好	浅黄褐色
							7-2調査区(D-5区)		
224	家形 (切妻 か)	屋根部	10.7	12.0	最大 2.5	外面：ナデ・突帯貼り付け時のナデ 内面：ナデ	やや精良	良好	浅黄褐色
							7-2調査区(D-5区)		
225	家形 (切妻 か)	棟先柱	3.9	3.4	3.0	外面：調整不明	やや精良	良好	浅黄褐色
							7-2調査区D-4区		
226	家形	壁部	12.6	22.0	1.1～ 2.7	外面：突帯・突帯調離痕 内面：調整不明	粗	良好	橙褐色
							8-5調査区(Z-3区)		
227	家形	壁部	9.0	18.6	1.3～ 2.3	外面：突帯 内面：調整不明	精良	良好	橙褐色
							8-5調査区(X・Y-3区)		

番号	種類	部位	法 量 (cm)			調 整 等	胎 土	焼 成	色 調
			残存高	残存幅	厚さ				
228	家形	壁部～基部	14.7	16.5	1.2～2.6	外面：貼り付け時のヨコナデ 内面：ナデ	やや粗	良好	橙色
229	家形	壁部か	10.9	6.5	最大2.2	外面：ナデ 内面：ナデ	やや精良	良好	浅黄褐色
230	家形	基部か	11.4	9.9	2.6	外面：ナデ・突帯貼り付け時のナデ 内面：ナデ	やや粗	良好	橙色
231	家形	基部か	12.6	8.3	1.2～2.6	外面：突帯 内面：調整不明	やや粗	良好	黄褐色
232	家形	基部か	5.6	10.7	最大3.2	外面：ナデ・ユビオサエ 内面：ナデ	やや精良	良好	にぶい黄褐色
233	家形	壁部	8.3	9.6	0.9～1.5	外面：突帯剥離痕 内面：粘土組織み上げ痕	精良	良好	橙色
234	家形	壁部	11.3	16.0	最大1.8	外面：ハケ 内面：ナデ	やや粗	良好	橙灰褐色
235	家形	豎魚木	3.2	12.8	最大3.2	外面：ナデ	やや粗	良好	橙灰褐色
236	盾形	盾部 上半	14.6	12.0	最大6.2	外面：[表] ハケ・ナデ・線刻-山形文・直線文、[裏] ナデ・貼り付け時のナデ 内面：ナデ・ユビオサエ	やや粗	良好	橙色
237	盾形	盾部 中央	8.8	13.0	1.2	外面：ハケ・線刻-縹杉文 内面：調整不明	精良	良好	橙色
238	盾形	盾部 中央	8.5	7.1	最大3.9	外面：ナデ・線刻-格子文・縹曲文 内面：ナデ・貼り付け時のナデ	精良	良好	橙色
239	軀形	矢先	10.0	15.0	1.1～1.7	外面：[表] 線刻-縹身を表現、[裏] -	やや精良	良好	にぶい橙色
240	軀形	矢先	8.1	6.3	1.5	外面：[表] ナデ・線刻-縹身を表現、[裏] ナデ	やや粗	良好	橙色
241	軀形か	背負具	50.3	28.2	1.0～3.0	外面：[表] (上部両側面) ナデ・線刻-円弧文、(筒状部上) ナデ・帯状突帯・線刻-斜格子文、(筒状部下) ハケ・貼り付け突帯、[裏] ナデ 内面：ナデ・粘土組織み上げ痕	精良	良好	にぶい橙色
242	軀形か	裝飾部	8.6	6.3	1.1～3.4	外面：[表] ナデ・線刻-円弧文、[裏] ナデ	粗	良好	橙色
243	軀形か	裝飾部	11.7	7.5	1.5	外面：[表] ナデ・線刻-円弧文、[裏] ナデ	やや粗	良好	橙色
244	軀形か	裝飾部	10.7	7.8	1.2	外面：[表] ナデ・線刻-円弧文・縹曲文、[裏] ナデ	精良	良好	にぶい黄褐色
245	軀形か	裝飾部	17.4	10.0	最大3.0	外面：[表] ナデ・線刻-円弧文・縹曲文、[裏] ナデ・ハケ・貼り付け時のナデ・ユビオサエ 内面：ナデ・ユビオサエ	やや精良	良好	にぶい黄褐色
246	軀形か	裝飾部	4.5	5.0	1.8	外面：[表] ナデ・線刻-縹曲文、[裏] ナデまたはオサエ	精良	良好	にぶい黄褐色
247	軀形か	裝飾部	13.4	7.3	4.2	外面：ナデ・線刻-斜線文 内面：ユビオサエ	やや精良	良好	橙色
248	太刀形か	裝飾部	9.4	10.5	1.2～1.5	外面：ナデ・突帯貼り付け時のナデ 内面：ナデ	精良	良好(軟質)	橙褐色
249	蓋形	笠部	笠部径33.8	最大2.8	外面：タテハケ・ヨコハケ・突帯 内面：ナデ・胴部貼り付け時のユビオサエ	粗	良好(軟質)	橙褐色	
									6-2調査区 (埴輪B群)

番号	種類	部位	法 量 (cm)			調整等	胎土	焼成	色調
			残存高	残存幅	厚さ				
250	蓋形	笠部	10.2	笠部径 30.6	最大 2.4	外面：タテハケ・ナデ・突帯 内面：ナデ・肩部貼り付け時のユビオサエ	粗	良好(軟質)	橙褐色
251	蓋形か	笠部か	4.6	10.0	4.8	外面：ナデ	やや精良	良好	橙色
252	蓋形か	笠部か	6.8	20.3	1.3～ 2.6	外面：ハケ・ナデ 内面：ナメ方向のナデ・貼り付け時のヨ コナデ	精良	良好	にぶい黄褐色
253	不明		18.6	11.5	1.0～ 2.2	外面：ハケ、(貼り付け部) ユビオサエ 内面：調整不明	精良	良好	橙色
254	不明		10.4	9.0	最大 3.6	外面：ナデか・突帯 内面：ナデ	精良	良好	にぶい橙色
255	不明		10.7	5.1	1.5	外面：[表] 縦刻-斜線、[裏] 縦刻-斜線	やや粗	良好(軟質)	橙灰褐色
256	不明		5.8	9.7	3.2	外面：ナデ・透孔 内面：ナデ	やや精良	良好	にぶい黄褐色
257	不明		6.0	6.3	1.9	外面：ナデ・突帯貼り付け時のナデ 内面：ナデ・ユビオサエ	精良	良好	にぶい黄褐色
258	不明		9.9	12.6	4.3	外面：[表] ナデ・透孔か・突帯貼り付け 時のナデ、[裏] ナデ・突帯貼り付け時の ナデ	やや精良	良好	にぶい黄褐色

第5節 土製品

土製品には、陶棺の破片1点と用途が不明な個体が少量ある。

1. 陶棺 (第38図、付表-11、図版16)

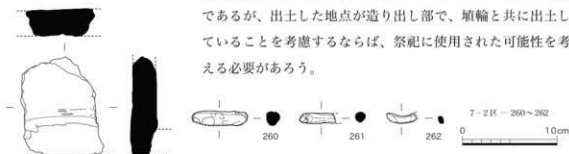
6-1調査区付近の墳丘上において採集したものである。長さ約8cm、幅約10.4cm、厚さ約2.9cmの大きさがある小さな破片で、須恵質家形四注式陶棺と考えられる棺身の底部片であると判断した。

須恵器の場合と同じく、タタキ技法によって成形しており、棺の外面は最終的に横方向の粗いハケメ調整、内面はナデを加えて仕上げているが、タタキの残痕が一部で認められた。底部の外面はナデによる調整であるが、わずかに同心円文の当て具痕がわずかに残っていた。さらに、円筒形とみられる脚部を貼り付ける際に施されたナデの痕跡を円弧状にとどめていることを観察できた。胎土には、チャートや黒色粒子などを多く含み、堅密(須恵質)に焼成されており、色調は暗灰色を呈していた。

2. 用途不明土製品 (第39図、付表-11、図版16)

西造り出し部に設定した7-2調査区から出土した小型の土製品が3点ある。いずれも手づくねによって作られた棒状の製品であるが、262は直線的ではなく、少し湾曲していた。完形品とみられる260は、長さ5.9cm、径1.4~1.6cm、破損品の261は残存長3.8cm、径1.1~1.4cmほどの大きさがあり、いずれも胎土にチャートや赤色粒子を含み、土師質に焼成され、

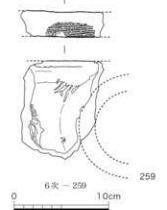
浅い黄橙色を呈する。何に使用されたものなのか用途は不詳であるが、出土した地点が造り出し部で、埴輪と共に出土していることを考慮するならば、祭祀に使用された可能性を考える必要がある。



第39図 土製品実測図 (1/4)

付表-11 陶棺・土製品観察表

番号	種類	法量 (cm)			調整等	胎土	焼成	色調
		残存長	残存幅	厚さ				
259	陶棺	8.0	10.4	2.9	外面:ハケメ、(底部)タタキ・円筒形脚部貼り付け時のナデ 内面:ナデ・同心円当て具痕	やや精良	良好(須恵質)	暗灰色
260	土製品	5.9	1.6	1.4	外側:ナデ	精良	良好	黄橙色
261	土製品	3.8	1.1	1.4	外側:ナデ	精良	良好	黄橙色
262	土製品	3.2	1.1	0.6	外側:ナデ	精良	良好	黄橙色



第38図 陶棺実測図 (1/4)

第4章 古墳時代以外の遺物

第1節 長岡京期・平安時代の土器

墳丘裾部の再堆積層や周辺の溝から、土師器、須恵器、緑軸陶器と、灰白色の緻密な胎土の陶器片などが出土している（第40図、附表-12）。

土師器は、椀（263）、甕（266）がある。263は、復元口径16cm。口縁端部は内側に肥厚しており、器壁は比較的薄い。外面は、ヘラケズリ調整する。266は、復元口径14.6cm。口縁部内面に横方向のハケメ調整、口縁端部は内側に肥厚する。

須恵器は、杯の口縁部片（264・265）と、杯・椀・壺などの底部片（267～285）がある。264は、復元口径13.4cm。器壁は下端が厚く内側に曲がることから、底面に近いと考えられる。内外面は、付着物で変色する。265は、復元口径13.4cm。口縁部外面は、部分的に自然軸が付着する。

底部の形態は、貼り付け輪高台（267～270・272）、平高台（271）、削り出しの蛇の目高台（273～276）と輪高台（277～285）に分類される。267～269は、杯B。270は、壺。内面と高台外面に自然軸が付着する。猿投産。271は、底部をヘラ切り調整する。貼り付け輪高台の杯と壺については、概ね長岡京期を中心とする時期に比定される。

273～285は、器形と製作技法が緑軸陶器と共通する緑軸陶器の素地である。硬質焼成。内面に、輪状の重ね焼き痕跡をとどめるものが多い。蛇の目高台は、円く掻き取るもの（273・274）と、高台中央を円形に凹ませたもの（275・276）がある。276は、底部内外面に一本線のヘラ記号を施す。

緑軸陶器は、椀（286）がある。高台内面を除いて全面施軸する。削り出し輪高台。軟質焼成。施軸されたものは僅かである。

軟質陶器は、椀（287）がある。細い高台を貼り付けた椀形の器形は、内外面が摩滅しており調整不明。胎土は精良で、灰白色を呈する。特徴的な胎土と形態を有する遺物は、この他に見当たらない。施軸は確認できないが、緑軸陶器の可能性も考えられる。

これらの遺物は、概ね小型化する土師器と須恵器の食器類は長岡京期を中心とする時期に、緑軸陶器とその素地は洛西大原野地域で量産化された9世紀後半代の時期に分類される。後者は、本市域の発掘調査でも所々で出土しており、廃都後の土地利用を窺い知ることができる資料となっている。

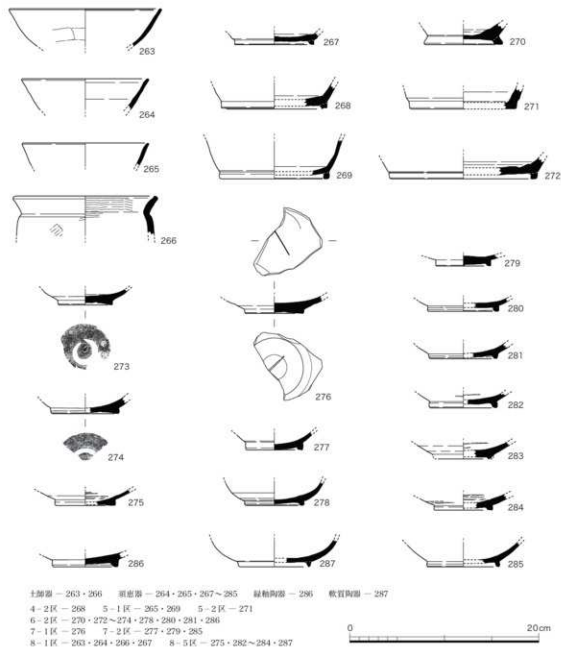
第2節 中世以降の土器

墳丘裾部の土坑と再堆積層などから、土師器、須恵器、瓦器、輸入白磁などが出土している。

1. 中世前期の土器・陶磁器（第41・42図288～316、附表-12、図版16）

土師器は、皿(305)と羽釜(308)がある。305は、胎土に砂粒を含み、表面はやや粗い。器形は深めで、底部は平らである。底部外面には、乾燥時に内面を押圧した際に付いた植物の圧痕が残る。内面見込みには、平行線ふうの線刻が施されており、皿の焼成後にわざわざ手を加えて器内面を彫り刻むのは特異な事例と思われるが、類例については不明である。308は、内傾する口縁部に一周する鐙を貼り付ける。これらは、13世紀代に比定される。

瓦器は、椀(288～303)、皿(304)、羽釜(309)、羽釜の三足(310～314)がある。椀は、小片が多いなか、復元口径では15cm台(288～291)、14cm台(292～298)、13cm台(299～302)、12cm台(303)に分類される。口径の最頻値は14cm台であるが、小振りの303については時期が下ると思われる。瓦器椀は、5-1調査区の土坑SK01のほかには包含層と再

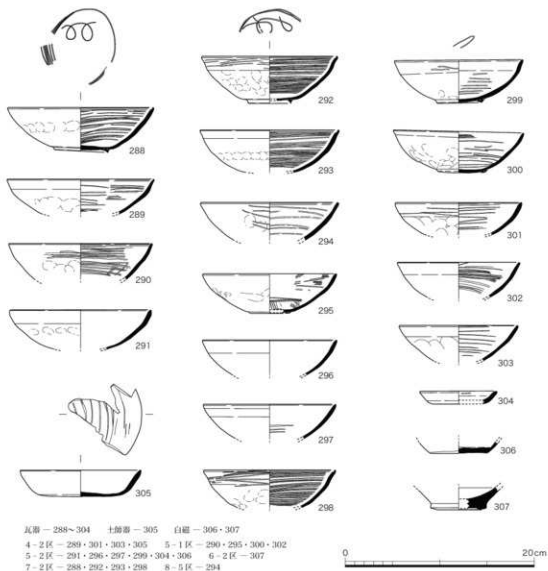


第40図 長岡京期・平安時代の土器実測図(1/4)

堆積層から出土している。口縁部外面の暗文の有無、見込みの暗文密度、高台の形状などについて若干の差異が認められるが、概ね楠葉型Ⅲ期を中心とする時期に比定される。309は、内傾する口縁部に一周する鈎を貼り付ける。羽釜の三足は、一周する鈎の下に3本の細い足を貼り付ける。これらの瓦器は、楠葉産の瓦器碗と同時期のものと考えられる。この他に、鍋の小片が出土している。

須恵器は、鉢(315・316)がある。東播産の片口鉢。口縁端部外面は、部分的に暗灰色を呈する。底部は、糸切り調整。316の内面は、使用により擦り減る。

輸入磁器は、白磁の皿(306)と碗(307)がある。306は、底部と体部の境に段を有する。底部外面は施軸されない。白磁皿Ⅴ類。307は、削り出し高台で、内面に沈線を有する。内面のみ施軸する。形態から、口縁部を玉縁にする白磁碗Ⅳ類に相当する。これらの白磁は、11世紀後半～12世紀前半に比定されるが、今回出土した他の土器類とは時期差が認められる。伝



第41図 中世以降の土器実測図1 (1/4)

世された輸入磁器が中世墓に副葬された可能性も想定される。

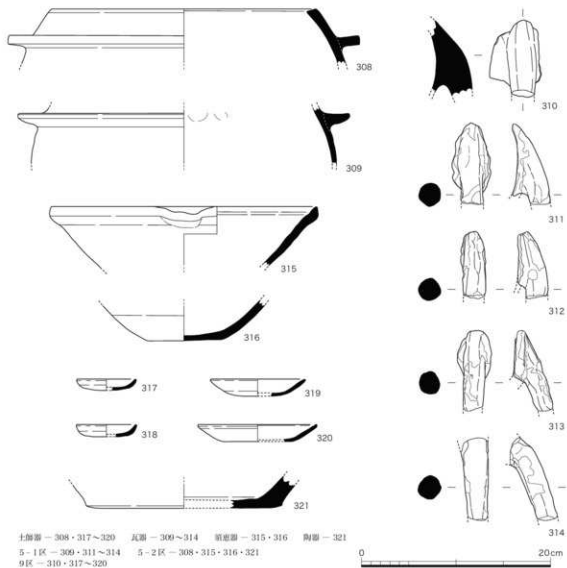
2. 中世後期の土器・陶磁器 (第42図 317～321、附表-12、図版16)

土師器は、皿 (317～320) がある。317・318は、最小クラスの皿。317～319は、胎土に微砂粒を含む。乙訓地域で出土する一般的な在地系の皿。320は、底部周縁がわずかに凹む。京都系の白色皿。16世紀中頃を中心とする時期に比定される。

陶器は、壺底部 (321) がある。体部内面は、底部の周縁を幅広くナデ調整しており、わずかに凹む。堅緻な焼き締めである。

第3節 石製品

石製遺物は、縄文時代以前の石鏃、翼状剥片、剥片と、中世以降の石鍋、砥石、五輪塔の火輪がある (第43図、附表-12、図版16)。



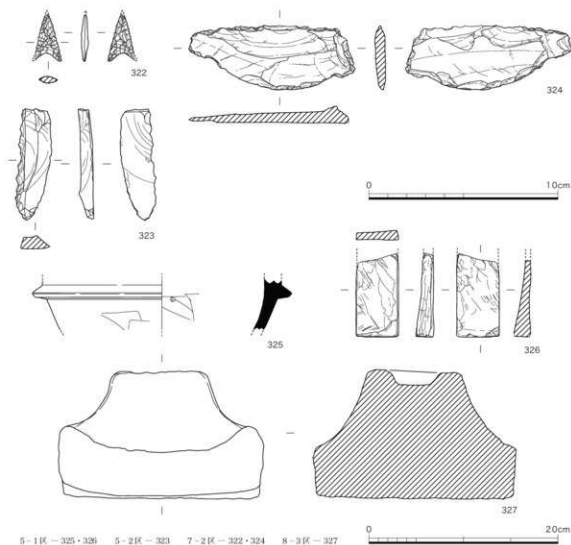
第42図 中世以降の土器実測図2 (1/4)

322は、凹基式の打製石鏃。サヌカイト製。縄文時代。323は、サヌカイト製。旧石器時代。324は、粘板岩製。縄文時代。325は、石鍋。口縁部直下に断面三角形の鏝を削り出している。10点余りの破片の中には、煤が付着するものがある。滑石製。13世紀代と考えられる。326は、砥石。摩耗して薄くなったところが欠損している。短冊形に定型化された製品で、断面は層状を呈する。珪質頁岩・粘板岩製とみられる。327は、五輪塔の火輪。笠形の頂部中央に円形の柄穴を穿っている。花崗岩製。古墳に建てられたかは不明である。

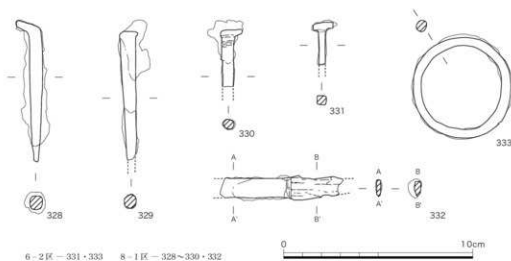
第4節 金属製品

金属製品には、鉄釘、刀子、不明鉄製品がある（第44図、付表-12、図版16）。

鉄釘（328～331）は8-1調査区で検出した木棺墓の緊結金具、刀子はその副葬品である可能性が考えられる。鉄釘は、断面が角形で、頭部を折り曲げている。錆がすすみ、先端は欠損する。刀子（332）は、柄の木質が残存し、先端を樹皮で締めた痕跡が残る。両端は欠損する。



第43図 石製品実測図 (1/2・1/4)



第44図 金属製品実測図(1/2)

付表-12 古墳時代以外の土器・石製品・金属製品観察表

種類	器形	番号	法 量 (cm)			色 調	調 整	出土調査区	備 考
			器高(実)	口径(実)	底径(厚)				
土器器	杓	263	(4.0)	16.0	-	にぶい橙	外面:ケズリ 内面:ナデ	8-1調査区	-
		264	(3.3)	13.4	-	灰白色	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	8-1調査区	-
須恵器	杯	265	(2.4)	13.4	-	灰色	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	5-1調査区	-
土器器	盃	266	(4.2)	14.6	-	にぶい黄褐色	外面:ヨコナデ 内面:ハケ後ヨコナデ	8-1調査区	-
須恵器	杯	267	(1.3)	-	高台径 8.4	灰白色	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	8-1調査区	-
		268	(2.8)	-	高台径 11.2	青灰色	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	4-2調査区	-
		269	(4.1)	-	高台径 11.6	灰色	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	5-1調査区	-
	壺	270	(2.2)	-	高台径 8.3	灰色	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	6-2調査区	内面と高台外面に自然釉
		271	(2.3)	-	11.2	灰白色	外面:ロクロナデ、(底部)へう切り調整 内面:ロクロナデ	5-2調査区	-
	杓	272	(2.4)	-	高台径 15.6	灰色	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	6-2調査区	-
		273	(1.7)	-	高台径 5.8	灰色	外面:ロクロナデ、蛇の目高台 内面:ヘラミガキ、重ね焼き痕	6-2調査区	緑釉陶器素地
		274	(1.8)	-	高台径 7.2	にぶい黄褐色	外面:ロクロナデ、蛇の目高台 内面:ヘラミガキ、重ね焼き痕	6-2調査区	緑釉陶器素地
		275	(1.7)	-	高台径 6.2	灰色	外面:ロクロナデ、蛇の目高台 内面:ヘラミガキ、重ね焼き痕	8-5調査区	緑釉陶器素地
		276	(1.9)	-	高台径 6.3	灰色	外面:ロクロナデ、蛇の目高台、線刻 内面:ヘラミガキ、線刻	7-1調査区	緑釉陶器素地 底部内外面に線刻
		277	(1.9)	-	高台径 6.0	灰色	外面:ロクロナデ、丁寧な調整、削り出し高台 内面:ヘラミガキ	7-2調査区	緑釉陶器素地
		278	(2.6)	-	高台径 6.3	明青灰色	外面:ロクロナデ、削り出し高台 内面:ヘラミガキ	6-2調査区	緑釉陶器素地 マーブル模様
279	(1.2)	-	高台径 5.8	灰白色	外面:ロクロナデ、丁寧な調整、削り出し高台 内面:ヘラミガキ	7-2調査区	緑釉陶器素地		

種類	器形	番号	法 量 (cm)		色 調	調 整	出土 調査区	備 考			
			器高(度)口径(幅)	底径(厚)							
須恵器	椀	280	(1.4)	-	高台径 7.6 灰色~浅 黄色	外面: ロクロケズリ、丁寧な調整、削り出し高台 内面: ヘラミガキ、重ね焼き痕	6-2 調査区	緑釉陶器未地			
		281	(1.6)	-	高台径 7.2 灰白色	外面: ロクロケズリ、削り出し高台 内面: ヘラミガキ、重ね焼き痕	6-2 調査区	緑釉陶器未地			
		282	(1.5)	-	高台径 7.0 灰白色	外面: ロクロケズリ、削り出し高台 内面: ヘラミガキ	8-5 調査区	緑釉陶器未地			
		283	(1.8)	-	高台径 6.2 にぶい黄 橙色	外面: ロクロケズリ、丁寧な調整、削り出し高台 内面: ヘラミガキ	8-5 調査区	緑釉陶器未地			
		284	(1.7)	-	高台径 6.2 灰色	外面: ロクロケズリ、丁寧な調整、削り出し高台 内面: ヘラミガキ、重ね焼き痕	8-5 調査区	緑釉陶器未地			
		285	(2.7)	-	高台径 7.7 灰黄色	外面: ロクロケズリ、丁寧な調整、削り出し高台 内面: ヘラミガキ、重ね焼き痕	7-2 調査区	緑釉陶器未地			
緑釉陶器	椀	286	(1.5)	-	高台径 7.0 (素地) 浅 黄橙色~ にぶい黄 橙色	外面: 施釉により不明、底部外面は施釉しない 内面: 施釉により不明	6-2 調査区	-			
		287	(2.9)	-	高台径 7.2 灰白色	外面: 剥離のため調整不明 内面: 剥離のため調整不明	8-5 調査区	-			
瓦 器	椀	288	4.8	15.3	高台径 5.7 暗灰色	外面: ユビオサエ、貼り付け高台 内面: ヘラミガキ、口縁部に沈線、見込みに暗文	7-2 調査区	-			
		289	(3.7)	15.6	-	黒色	外面: ユビオサエ 内面: ヘラミガキ、口縁部に沈線	4-2 調査区	-		
		290	(3.8)	15.2	-	黒灰色	外面: ユビオサエ 内面: ヘラミガキ、口縁部に沈線	5-1 調査区	-		
		291	(4.2)	15.0	-	黒灰色	外面: ユビオサエ、口縁部ヨコナデ 内面: 摩滅する	5-2 調査区	-		
		292	5.0	14.4	高台径 4.5 暗灰色	外面: ユビオサエ、口縁部外面にヘラミガキ 内面: ヘラミガキ、口縁部に沈線、見込みに暗文	7-2 調査区	-			
		293	(4.5)	14.8	-	暗灰色	外面: ユビオサエ、摩滅により調整不明 内面: ヘラミガキ、口縁部に沈線	7-2 調査区	-		
		294	(4.0)	14.5	-	灰色	外面: 摩滅により調整不明 内面: ヘラミガキ、口縁部に沈線	8-5 調査区	-		
		295	4.2	14.2	高台径 4.2 黒灰色	外面: 摩滅により調整不明 内面: ヘラミガキ	5-1 調査区	-			
		296	(3.7)	14.2	-	黒灰色	外面: 摩滅により調整不明 内面: 摩滅により調整不明	5-2 調査区	-		
		297	(3.7)	14.0	-	黒灰色	外面: 摩滅により調整不明 内面: 摩滅により調整不明	5-2 調査区	-		
		298	(4.0)	14.0	-	暗灰色	外面: ユビオサエ、口縁部ヘラミガキ 内面: ヘラミガキ、口縁部に沈線	7-2 調査区	-		
		299	4.6	13.6	高台径 4.8 明黒灰色	外面: ユビオサエ 内面: ヘラミガキ	5-2 調査区	-			
		300	4.6	13.8	高台径 5.3 黒灰色	外面: ユビオサエ 内面: ヘラミガキ	5-1 調査区	-			
		301	(3.5)	13.4	-	黒色	外面: ユビオサエ、口縁部外面にヘラミガキ 内面: ヘラミガキ	4-2 調査区	-		
		302	(3.7)	13.0	-	黒灰色	外面: 摩滅により調整不明 内面: ヘラミガキ	5-1 調査区	-		
		303	(3.8)	12.6	-	黒色	外面: ユビオサエ 内面: ヘラミガキ	4-2 調査区	-		
		Ⅲ	304	1.3	8.2	5.5 黒灰色	外面: ヨコナデ 内面: ヘラミガキ	5-2 調査区	-		
		土 器	Ⅲ	305	2.8	12.8	-	褐色	外面: ユビオサエ、口縁部ヨコナデ、底部に圧痕 内面: ナデ、縁部あり	4-2 調査区	-
		白 磁	Ⅲ	306	(1.2)	-	6.0 灰白色	外面: 底部外面は施釉しない 内面: 施釉により不明	5-2 調査区	-	

種類	器形	番号	法 量 (cm)			色 調	調 整	出土 調査区	備 考
			器高(灰)	口径(脚)	底径(厚)				
白磁	甕	307	(2.1)	-	高台径 5.9	灰白色	外面：施釉しない 内面：施釉、沈線	6-2 調査区	-
土器	羽釜	308	(5.7)	28.0	跨部径 37.2	灰を帯び た肌色	外面：ナデ 内面：ナデ	5-2 調査区	跨下面にスス 付着
		309	(6.0)	跨部径 35.1	-	一部は黒 灰色	外面：摩滅により調整不明 内面：ナデ	5-1 調査区	-
瓦器	羽釜	310	(8.1)	-	脚部径 0.5～ 2.5	灰色	外面：ナデ	9 調査区	-
		311	(8.7)	-	脚部径 2.4	黒灰色	外面：ナデ	5-1 調査区	-
		312	(7.1)	-	脚部径 2.4	黒灰色	外面：ナデ	5-1 調査区	-
		313	(8.5)	-	脚部径 2.8	黒灰色	外面：ナデ	5-1 調査区	-
		314	(8.8)	-	脚部径 2.5	淡褐色	外面：ナデ	5-1 調査区	-
		315	(6.2)	28.4	-	灰色	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	5-2 調査区	-
		316	(4.3)	-	8.0	灰色	外面：ロクロナデ、(底部) 糸切り 内面：ロクロナデ	5-2 調査区	-
土器	皿	317	1.2	6.2	-	浅黄褐色	外面：(口縁部) ヨコナデ、(底部) ユビオサエ 内面：ヨコナデ	9 調査区	-
		318	1.3	6.2	-	浅黄褐色	外面：ヨコナデ、(底部) ユビオサエ 内面：ヨコナデ	9 調査区	-
		319	1.8	10.1	-	にぶい橙 色	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	9 調査区	-
		320	1.8	12.6	-	にぶい橙 色	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	9 調査区	-
陶磁器	壺	321	(3.4)	-	20.8	黄褐色	外面：ナデ 内面：ロクロナデ	5-2 調査区	-
石製品	石鏃	322	長さ (2.5)	幅(1.4)	厚さ 0.4	-		7-2 調査区	サマカイト製 重さ 0.9 g
		323	5.9	1.6	0.7	-		5-2 調査区	サマカイト製
	磨片	324	長さ 3.4	幅 8.8	厚さ 0.9	-		7-2 調査区	粘板岩製 重さ 23.6 g
		325	(5.2)	跨部径 27.4	厚さ 1.0～ 1.9	銀灰色	外面：ケズリ成形 内面：ケズリ成形	5-1 調査区	滑石製
	砥石	326	(8.9)	4.5	厚さ 1.2～ 1.9	淡桃灰色	外面：[表] 使用により片減りする [側] 平滑 内面：[裏] 剥離面か	5-1 調査区	瑠璃頁岩 ・粘板岩製
		327	13.7	21.7	5.4～ 13.6	-		8-3 調査区	全面風化 花崗岩
	金属製品	釘	328	7.5	1.8	0.6	-		8-1 調査区
329			(7.4)	1.7	0.6～ 0.7	-		8-1 調査区	鉄 重さ 10.7 g
330			(3.5)	1.9	0.5	-		8-1 調査区	鉄 重さ 6.2 g
331			(2.4)	0.5～ 0.6	0.5	-		6-2 調査区	鉄
刀子		332	1.3	6.5	0.2	-		8-1 調査区	鉄、木質 重さ 7.7 g
不明		333	(径 5.2 ～ 5.3)	0.5	0.7	-		6-2 調査区	鉄

第5章 まとめ

井ノ内車塚古墳は、平成28年度までの発掘調査によって、主軸をほぼ南北に向けた全長約40mの前方後円墳であり、後円部の西側に造り出しを付加し、周囲に浅い溝を巡らせることが明らかになった。古墳の外表施設として埴輪を有するものの、葺石は無く、段築は確認されていない。後円部では東くびれ部へ向かって開口する横穴式石室が確認され、石室は右片袖式で玄室長約4mと推定された。

後円部および前方部裾の第3次調査で整理箱にして4箱、東側くびれ部を主とする第4次調査で8箱、前方部東側の第5次調査で15箱、西側造り出し南辺から西側くびれ部の第6次調査で22箱、西側造り出しの前面を主とする第7次調査で16箱、西側造り出しより後円部側を主とする第8次調査で25箱、横穴式石室の第9次調査で7箱、合計97箱の遺物が出土している。出土遺物の大半が埴輪であり、出土量は造り出し周辺が突出するものの、東側くびれ部から前方部東側にも多く、後円部北西や前方部前面でも一定量が出土している。

ここでは、横穴式石室の副葬品である須恵器をはじめとした土器類、最も多くの出土量があった埴輪類、そして、陶棺について概観しまとめとした。

第1節 古墳時代の須恵器

1. 横穴式石室出土の須恵器

石室内からは、杯身、杯蓋、無蓋高杯、短頸壺、広口壺、有蓋脚付壺、甕、器台、甕などの器種が出土しているが、後世に石室が破壊されていることを考慮すれば、その種類や数量はさらに多かったことは間違いないであろう。

まず、杯類の特徴を見てみると、杯蓋は口縁部と天井部との境に稜があり、口縁端部内面に段を有している。杯身は、口縁部が内傾気味にそれほど立ち上がらず、口縁端部は丸くおさめられている。法量については、杯身が口径11.5cm前後・器高4.4cm前後、杯蓋が口径13.7cm前後・器高が4.4cm前後であり、いずれも大きな個体差を認めることは出来ない。また、外面に施されたヘラケズリの範囲は天井部や底部の半分程度であり、回転の方向が反時計回りであることも共通している。こうした諸特徴を、陶器の型式による編年観に照らし合わせてみるとTK10型式に相当するものと考えることができる。ただし、杯蓋の稜がさほど突出しておらず、また杯身の立ち上がりも比較的短いことなどを考慮すれば、TK10型式でも新相に比定することができるであろう。

次に、無蓋高杯は、形態や法量などからTK10型式期に相当するものと考えられ、つまみが付いた小型の蓋についても、同じくTK10型式に属する可能性が強いと推察できる。また、特殊な部類に属する有蓋脚付壺は、必ずしも類例は多くはないが、同じ乙訓地域に所在する物集女車塚古墳から5個体も出土していることは注目できる。形態や施文が物集女車塚古墳出土例¹⁹⁹

と類似しており、それらがTK10型式に属していると報告されていることから、同じ時期のものと考えてよいであろう。

以上のように、石室から出土した須恵器のほとんどがTK10型式に位置付けられ、より新しい型式に属す個体を含んでいない可能性の強いことが明らかになった。これらを初葬時に伴う可能性が高い副葬品と考えてよければ、井ノ内車塚古墳の時期については、物集女車塚古墳をはじめ、近接して築造されている井ノ内稲荷塚古墳⁽²³⁾や長法寺七ツ塚3号墳・4号墳、それに井ノ内1号墳などと概ね同時期、すなわち6世紀前半の時期であると考えることができる。ただし、上記の状況をもって追葬が無かったとは即断できず、墳丘から時期の下る須恵器が出土していることから、追葬があった可能性を否定するものではない。

2. 墳丘出土の須恵器

墳丘から出土した須恵器のうち最も古いと推察できるものは、後門部の5-1調査区で出土した杯身(第10図24)である。石室から出土した杯身に比べて口縁部の立ち上がりが高く、口縁部に段を有し、回転ヘラケズリの範囲も広いことなど、TK10型式期のうちでもやや古相に属するものと考えることができる。一方、最も新しいと考えられるものは、5-1調査区から出土した杯G蓋(第10図23)と5-2調査区出土の杯G身(第10図26)であろう。これらの個体は、23が杯H身、26が杯H蓋の可能性があると言え、形態や法量の特徴などから見て、ともにTK217型式、飛鳥・藤原地域での編年案でいえば飛鳥Ⅱ期～Ⅲ期に相当するものと考えられる。この時期は、同じく墳丘から出土している須恵質陶棺の年代観と大きな齟齬がないことは注意すべきであろう。この他の個体の時期については、杯蓋(第10図21)が天井部と口縁部の境に稜がないことによりTK43～TK209型式に属するものと見ることができ、杯蓋(第10図22)は、形態的な特徴や法量が石室出土のものに類似していることから見て、TK10型式でも新相に比定することができ、また広口壺(第10図31)も概ねTK10型式に比定することができそうである。

これまで見てきたように、墳丘から出土した古墳時代の須恵器は、概ね6世紀前半にあたるTK10型式の古相段階から7世紀前半代に比定されるTK217型式(飛鳥Ⅱ期～Ⅲ期)の範囲内に含まれていることが判明した。

ところで、乙訓地域に所在する古墳時代後期の古墳のうち、井ノ内車塚古墳と同時期と考えられる井ノ内稲荷塚古墳や長法寺七ツ塚3号墳・4号墳においては、墳丘上に供献されたと思われる多くの須恵器が出土している。井ノ内稲荷塚古墳では、須恵器の杯身・無蓋高杯・有蓋高杯・同蓋・高杯形器台と土師器の高杯などが、また長法寺七ツ塚3号墳では須恵器の杯身・杯蓋・短頸壺・甕などが、そして長法寺七ツ塚4号墳で須恵器の杯身・脚付短頸壺・甕などが確認されている。こうした点を考慮すると、井ノ内車塚古墳においても、墳丘上に土器を供献する行為のあった可能性を否定することはできず、たとえば8-5調査区から出土している広口壺(第10図31)や器台(第10図32)などは、西造り出し部での祭祀行為に用いられた可能性も十分に考えておく必要がある。

第2節 埴輪

1. 円筒埴輪

井ノ内車塚古墳の円筒埴輪は、原位置を保つものが無く、いずれも埴丘から転落して埋没した資料である。埴丘には段築が認められないため、西側造り出しを除くものは、埴頂部ないし埴丘裾に配列されていたと考えられる。ただ、埴丘表土にほとんど埴輪が含まれないことなどから、埴丘裾に配列されていた可能性が高い。

普通円筒埴輪は、器高に39.6～50.8cmの幅があるが、段構成は3条4段以外を確認できず、2個一対の透孔を2・3段目に直交して配する。調整は、基本的に外面を一次調整のタテハケで終え、部分的なナデを加えるものが希にある。内外面調整の種類では、外面調整のタテハケが左上がり、内面調整の口縁部上半にハケ、以下をナデとするものが多数を占める。一方で、外面調整に右上がりのタテハケを施す一群があり、この一群では内面調整の口縁部下半より下にタテハケが多用される。底部下半の外面調整には板状工具による調整やケズリ、そして、強いナデを加えるものが認められた。窯窯焼成と考えられ、焼き上がりには外面が茶褐色を呈する硬質なものや軟質の二者が見られる。なお、タガには断続ナデ技法は認められなかった。

朝顔形円筒埴輪は、器高が73cm前後、段構成は6条7段で、2個一対の透孔を2～4段目に直交して配する。内外面調整や焼成には、普通円筒埴輪と違いが認められない。以上のように、井ノ内車塚古墳の円筒埴輪は、埴輪編年のV期の特徴を有するもので、6世紀前半の時期に比定できる。

井ノ内車塚古墳の近接地域には、芝古墳、井ノ内稲荷塚古墳があり、本墳を含めた前方後円墳3基が相次いで築造されている。先行する時期の芝古墳は埴丘長約32mで、乙訓地域において最初に導入された横穴式石室を有し、形象埴輪が確認されていないものの一定量の円筒埴輪が出土している。後出する井ノ内稲荷塚古墳は埴丘長約46mで、これまでのところ埴輪は確認されていない。これまでの調査研究によって、3基は一つの在り首長墓系譜として把握され、埴丘や石室の規模など、芝古墳から本墳を経て井ノ内稲荷塚古墳へ至る発展的な要素が窺われる。

しかし、芝古墳と井ノ内車塚古墳の円筒埴輪を比較した場合、円筒埴輪の配列状況や、段構成、法量、内外面調整に多くの相違点を見出すことができる。芝古墳では、円筒埴輪の樹立が両ぐびれ部や前方部前面、横穴式石室の開口部など部分的なものや想定され、普通円筒埴輪は基本的に4条5段構成で、外面調整に右上がりのタテハケを主体とし、底部調整における板横圧の少なさが指摘されている⁽²³⁾。極めて近接する時期、距離の両古墳に見られる相違から、少なくとも埴輪生産については古墳毎に編成された可能性が指摘できる。また、造り出しの有無を含め、外表要素としての埴輪の位置付けに明らかな相違が見られることは、古墳の築造プランに関わる事柄でもあり、より多角的な検討を行う必要があるだろう。

2. 形象埴輪

井ノ内車塚古墳の形象埴輪には、巫女などの人物形埴輪、鶏・馬・牛などの動物形埴輪、竈・家屋・切妻家屋の家形埴輪、盾や鞆・蓋などの器財形埴輪、石見型埴輪など多種多様なものがある。なかでも井ノ内車塚古墳の形象埴輪を特徴付けるのが石見型埴輪である。石見型埴輪は、西側造り出し周辺の調査区はもとより、東側くびれ部から前方部、そして後円部などの調査区でも出土しており、量の多さも相まって、普通円筒埴輪や朝顔形円筒埴輪とともに古墳裾部と推定した埴輪列に配されていた可能性を指摘できる。

乙訓地域における石見型埴輪の出土例には塚本古墳、物集女車塚古墳の資料がある。そのうち塚本古墳は、井ノ内車塚古墳に先行する時期の前方後円墳であり、全長 30 m を測る墳丘は削平されているが周溝から多彩な形象埴輪が出土している⁽²⁶⁾。塚本古墳の石見型埴輪は、全容を推定できるものが 8 個体程度あり、倒立させた円筒埴輪で基部を作り、その上に 4 段構成のヒレと中央抉りを備える基本形態は井ノ内車塚古墳のものと変わらない。しかし、基部が非常に高く、ヒレ部の形状は幅広く、筒状部からのヒレの突出が大き。また、裏面の開口部は 3 段目ヒレに近い位置にあり、井ノ内車塚古墳の資料に見られる、開口部から延びる斜め方向の支柱状突帯を備えたものがない。支柱状突帯は、筒状部より上の 4 段目ヒレを支持するため付加されたと考えられ、その有無は石見型埴輪の製作過程における大きな差異と見ることができる。また、装飾的な要素として、塚本古墳では 4 段目ヒレ最上辺に粘土帯や横方向の断続した強いナデを施す例が多く、中央抉り付近の横線間に斜格子文を帯状に施している。さらに、各段に半円形の弧文を描くものも見られる。井ノ内車塚古墳の石見型埴輪では、横線文を施したものが一例認められるだけであり、塚本古墳の例に比べ装飾的に退化した段階のものとも見ることができる。

後円部西側の造り出し上には、普通円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪、石見型埴輪に加え、人物形埴輪や動物形埴輪、家形埴輪、器財形埴輪など多種多様な形象埴輪が配されていたと考えられるが、その配列状況を復元することは困難である。造り出しの平坦面は幅 4 m、奥行き 2 m 強程度と推定され、その場合、各種の埴輪は非常に密な状態で配されることになる。造り出しの平坦面上だけでなく、後円部側、西くびれ部側の裾部の一定範囲にも形象埴輪が配されていた可能性も考慮しなければならないだろう。

前述したように井ノ内車塚古墳に先行する時期の芝古墳では、形象埴輪の確実な出土例がなく、多彩な形象埴輪を有する本墳とは様相が異なる。一方、井ノ内車塚古墳の南東約 300 m で発見された井ノ内 3 号墳では、円筒埴輪の他に人物形埴輪、馬形埴輪、盾形埴輪が出土している。井ノ内 3 号墳は一辺 17 m を測る古墳時代中期末頃の小規模方墳であるが、こうした小規模古墳の例を含め形象埴輪の特徴や保有種別、配列状況などを検討する必要がある。

第3節 須恵質陶棺

桂川右岸流域に位置する乙訓地域は、京都盆地において陶棺の密度が極めて多いことが知られているが、その大半は須恵質家形四注式陶棺であって、土師質亀甲形や須恵質亀甲形は極め

て乏しい状況である。⁽²⁰⁾井ノ内車塚古墳出土の陶棺は、先に述べたように、小さな棺身の破片が1点のみであって、そこから得られる情報量は決して多いとはいえないが、須恵質に焼成されていること、底部に円筒形の脚を貼り付けていること、須恵器と同じタタキ技法で成形した後、ナデやハケメで調整していることなどから、須恵質陶棺のなかでも類例の乏しい亀甲形ではなく、家形四注式陶棺とみて間違いないであろう。この陶棺が、本来井ノ内車塚古墳に埋葬されたものなのか、或いは他所から持ち込まれたものなのかを判断する手掛かりはほとんどなく、現状では不詳と言わざるを得ないが、若干の検討を加えておきたい。

乙訓地域で出土している須恵質家形四注式陶棺は、概ね6世紀末から7世紀の前半代に比定される小規模な古墳に埋葬されている場合がほとんどで、首長墳からの出土例はこれまでのところ認められない。また、埋葬方法については、墳丘に墓壇を穿って直葬するもの（光明寺古墳⁽²¹⁾・北平尾1号墳⁽²²⁾・長野岡田古墳⁽²³⁾）と横穴式石室に納める場合（芝12号墳⁽²⁴⁾・石見上里古墳⁽²⁵⁾）の二者があり、さらに北平尾1号墳と長野岡田古墳では、成人の改葬骨を埋納していることなどが知られている。このような陶棺が、6世紀前半の首長墳である井ノ内車塚古墳から出土している理由を検討する上に示唆的なのは、陶棺と同時期とみられる須恵器の杯類（第10図23・26）が墳丘から出土していることであろう。つまり、これらの須恵器杯類を陶棺の副葬品と仮定する考えであって、その可能性は十分にありうることである。この仮定が認められるならば、古墳が築造されたから約1世紀近くも後になって追葬されたことになるが、はたして横穴式石室内に追葬されたものなのか、あるいは大きく攪乱を受けている前方部などの墳丘内に直葬されたものなのか、そのいずれかを判断することはあまりにも情報不足であり、これ以上推測することを差し控えたい。

ところで、井ノ内車塚古墳の西側に展開する芝古墳群中で、12号墳から須恵質家形四注式陶棺が出土していることも注目すべきであろう。この芝12号墳は古くに破壊されていて、地元の伝承によると、径10m程度の円墳の横穴式石室から2個体分の陶棺が出土したというが、明確な所在地はもとより出土状況や副葬品の有無などの詳細は全く不明である。陶棺は、大きさに若干の相違があるものの、ともに底部に3行24本の脚を備え、外面をハケメ調整する須恵質家形四注式陶棺であることが報告されており、井ノ内車塚古墳例とは最終の調整技法が類似していることを指摘しておきたい。

以上のように、長岡京市の北部にあたる井ノ内地区において、須恵質家形四注式陶棺を埋葬する古墳が複数存在したことが明らかになった意義は大きく、乙訓地域の後期から終末期の古墳の動向を検討する上に貴重な情報になるであろう。

注1) 「乙訓古墳群調査報告書」京都府教育委員会 2015年

2) 都出比呂志「首長系譜変動パターン論序説」「古墳時代首長系譜変動パターンの比較研究」大阪大学 1999年
 福島孝行「研究略史」『乙訓古墳群調査報告書』京都府教育委員会 2015年

- 3) 熊井亮介『芝古墳(芝1号墳)調査総括報告書～乙測における後期首長墓の調査～』京都市文化市民局
平成29年度 2018年
- 4) 杉井 健他『井ノ内稲荷塚古墳の調査成果』『長岡京市における後期古墳の調査』『長岡京市報告書』第44冊
2002年
- 5) 山本輝雄他『井ノ内古墳群の調査成果』『長岡京市における後期古墳の調査』『長岡京市報告書』第44冊
2002年
- 6) 堤主三郎・高橋美久二『向日丘陵地周辺分布遺跡調査概要』『京都府概報』1968 1968年
- 7) 『古墳時代首長系譜変動パターンの比較研究』大阪大学 1999年
- 8) 清家 章他『井ノ内車塚古墳第3次調査概要』『長岡京市報告書』第41冊 2000年
- 9) 山本輝雄『井ノ内車塚古墳第4次調査概要』『長岡京市報告書』第61冊 2012年
- 10) 山本輝雄『井ノ内車塚古墳第5次調査概要』『長岡京市報告書』第64冊 2013年
- 11) 山本輝雄『井ノ内車塚古墳第6次調査概要』『長岡京市報告書』第66冊 2014年
- 12) 中島哲夫『井ノ内車塚古墳第7次調査概要』『長岡京市報告書』第68冊 2015年
- 13) 中島哲夫『井ノ内車塚古墳第8次調査概要』『長岡京市報告書』第69冊 2016年
- 14) 中島哲夫『井ノ内車塚古墳第9次調査概要』『長岡京市報告書』第70冊 2017年
- 15) 橋本久和『中世考古学と地域・流通』真陽社 2009年
- 16) 山本信夫『第1節 中世前期の貿易陶磁器』『新版概説 中世の土器・陶磁器』日本中世土器研究会編
2022年
- 17) 注16と同じ
- 18) 田辺昭三『須恵器大成』1981年
- 19) 秋山浩三他『物業女車塚』『向日市報告書』第23集 1988年
- 20) 注4と同じ
- 21) 山本輝雄『長法寺七ツ塚古墳群の調査成果』『長岡京市における後期古墳の調査』『長岡京市報告書』第44冊
2002年
- 22) 注5と同じ
- 23) 奈良文化財研究所・歴史土器研究会『飛鳥時代の土器編年再考』2019年
- 24) 川西宏幸『円筒埴輪論』『考古学雑誌』第64巻 第25号 1979年
- 25) 注3と同じ
- 26) 木村泰彦『長岡京跡右京第106次調査概要』『長岡京市センター報告書』第1集 1984年
- 27) 注5と同じ
- 28) 吉岡博之・木村泰彦『北平尾古墳発掘調査報告』『長岡京跡研究所報告書』第1集 1979年
- 29) 注28と同じ
- 30) 注28と同じ、山本輝雄『北平尾古墳群』『長岡京市史 資料編1』1991年
- 31) 中塚 良『長野丙古墳群第2次発掘調査概要』『向日市報告書』第46集 1998年
- 32) 注28と同じ
- 33) 注28と同じ。石見上里古墳において陶棺は、横穴式石室内に組合式石棺とともに埋納されていたと考えられているが、近年、宇野隆志氏は埋葬施設が横穴式石室ではなく、横口式石塚である可能性を指摘している。(宇野隆志『向日丘陵西方に分布する古墳の築造意義』『第22回京都府埋蔵文化財研究会発表資料集』2015年)
- 34) 外面にハケメ調整する陶棺は、芝12号墳(2棺)と井ノ内車塚古墳の他に、光明寺古墳と長野岡田古墳、さらに走田8・9号墳間で出土したものが知られる。(山本輝雄『走田古墳群第1次 海印寺跡第3次調査概要』『長岡京市報告書』第36冊 1997年)
- 35) 注28の報文の中で、井ノ内地区には芝12号墳の他にも「井ノ内宮山古墳」という古墳から陶棺が出土したとの伝承を記している。両古墳から陶棺が出土したことは、ともに伝承によるものであって、石室から2個の陶棺が出土したという共通した内容であるということは、両者が混同されていた可能性が濃厚で、同一のものと考えらるべきであろう。

付表-13 報告書抄録

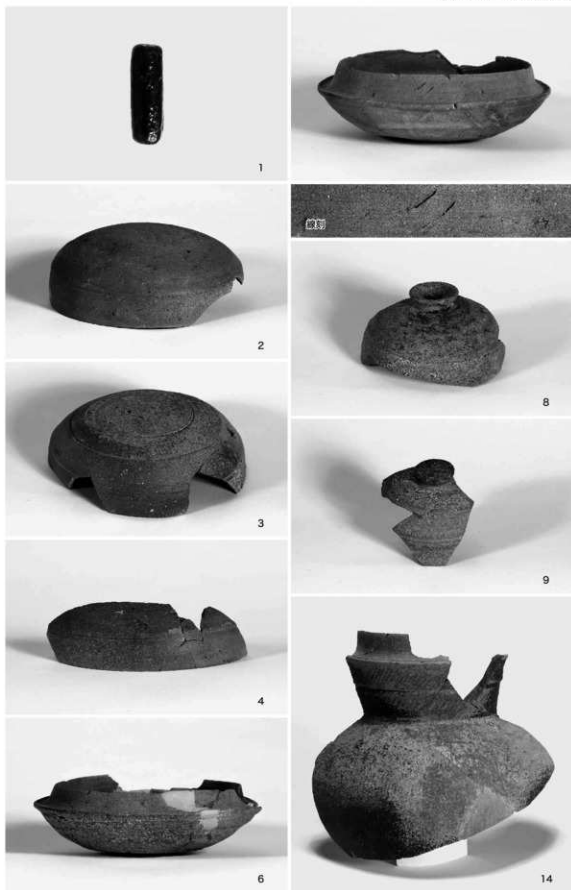
ふりがな	くにしせき おとくにこふんでん いのうちのるまづかこふんのちようき いぶつへん
書名	国史跡 乙訓古墳群 井ノ内車塚古墳の調査 ～遺物編～
副書名	
シリーズ名	長岡京市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 82 冊
編著者名	山本輝雄、原秀樹、中島啓夫
編集機関	公益財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター
所在地	〒617-0853 京都府長岡京市奥海印寺東条 10 番地の 1

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡						
井ノ内車塚古墳 (長岡京跡 (石京 二条四坊十五町))	長岡京跡 井ノ内 向 いぶつへん 井之 4	26209	2	34°56'39"	135°40'51"	第 3 次	19990719 ＼ 19990817	35㎡	範囲 確認
						第 4 次	20110914 ＼ 20111026	38㎡	範囲 確認
						第 5 次	20120709 ＼ 20120917	87㎡	範囲 確認
						第 6 次	20130807 ＼ 20131002	63㎡	範囲 確認
						第 7 次	20140828 ＼ 20141017	78㎡	範囲 確認
						第 8 次	20150820 ＼ 20151125 20160222・23	148㎡	範囲 確認
						第 9 次	20161003 ＼ 20161221	53㎡	埋葬施 設確認

※緯度、経度の測点は井ノ内車塚古墳後門部の最高所で、国土座標の世界測地系を使用している。

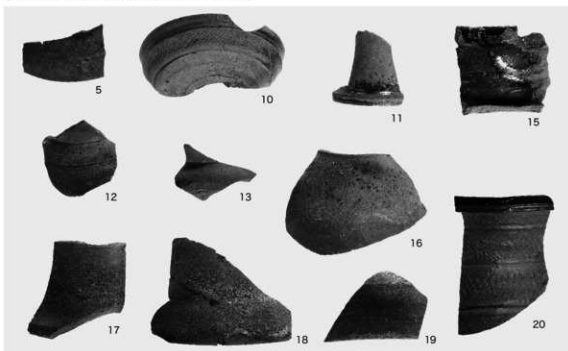
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
井ノ内車塚古墳 (第 3 次) 長岡京跡 (石京第 647 次)	古墳 都城	古墳時代 平安時代	後門部斜面・前方部斜面・周溝	埴輪(動物形含む)・須恵器	井ノ内車塚古墳における最初の発掘調査。埴土盛土・基部の地山・周溝を検出。
井ノ内車塚古墳 (第 4 次) 長岡京跡 (石京第 1028 次)	古墳 都城	古墳時代 平安時代	後門部斜面・前方部斜面・後門部墳丘外の土坑	埴輪(家形・石見型含む)・土師器・須恵器・韓式系土師器・須恵器瓦器・黄伏調片	埴土盛土・基部の地山を検出。後門部南東側から埴輪が多く出土。
井ノ内車塚古墳 (第 5 次) 長岡京跡 (石京第 1045 次)	古墳 都城	古墳時代 平安時代	後門部斜面・前方部斜面・前方部墳丘外の土坑	埴輪(石見型含む)・須恵器・須恵器瓦器・黄伏調片	埴土盛土・基部の地山を検出。前方部墳丘外から石見型埴輪を含む大量の埴輪が出土。
井ノ内車塚古墳 (第 6 次) 長岡京跡 (石京第 1068 次)	古墳 都城	古墳時代 平安時代	後門部～前方部の墳頂平坦面・前方部斜面・造り出し・周溝	埴輪(蓋・人物・馬・牛・人物形・石見型含む)・須恵器・須恵質陶器・須恵器緑釉陶器・白磁・鉄釘	埴土盛土・基部の地山を検出。後門部南西側で造り出しと考えられる盛土を確認。大量の埴輪が出土。
井ノ内車塚古墳 (第 7 次) 長岡京跡 (石京第 1092 次)	古墳 都城	古墳時代 平安時代	後門部斜面・前方部斜面・造り出し・周溝	埴輪(家・馬形・石見型含む)・須恵器・須恵器瓦器・石籠・調片	埴土盛土・基部の地山を検出。後門部南西側二造り出しが付加されることを確認。大量の埴輪が出土。
井ノ内車塚古墳 (第 8 次) 長岡京跡 (石京第 1119 次)	古墳 都城	古墳時代 平安時代	後門部斜面・前方部斜面・造り出し・小穴・周溝	埴輪(家・盾・鞍・馬・馬形・石見型含む)・須恵器・ガラス製管玉土師器・須恵器・刀子・鉄釘 陶器・瓦器・五輪塔 石材抜き取り穴	埴土盛土・基部の地山を検出。造り出しの全貌を確認。大量の埴輪が出土。後門部で須恵器・赤色顔料が出土し、横穴式石室存在の可能性が高まる。地中探査実施。
井ノ内車塚古墳 (第 9 次) 長岡京跡 (石京第 1145 次)	古墳 都城	古墳時代 平安時代	横穴式石室 石材抜き取り穴	埴輪(家・盾形含む)・須恵器 土師器・瓦器	右片袖式と考えられる横穴式石室を確認。土製磚と車輪状の基礎石材・石材抜き取り穴を検出。横穴式石室基部の構造を確認。

圖 版



管玉と須恵器

横穴式石室の副葬品と墳丘出土の土器



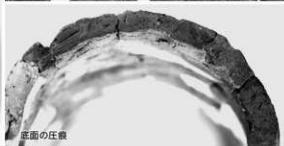
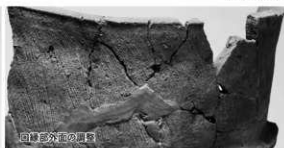
(1) 横穴式石室出土の須恵器



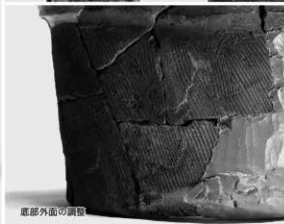
(2) 墳丘出土の土器



38



41



円筒埴輪

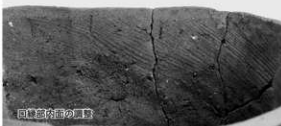
図版四



43



口縁部外側の調査



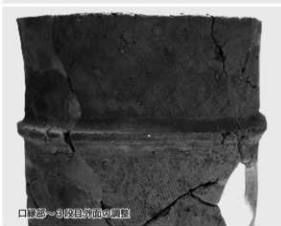
口縁部内側の調査



底部外面の調査



51

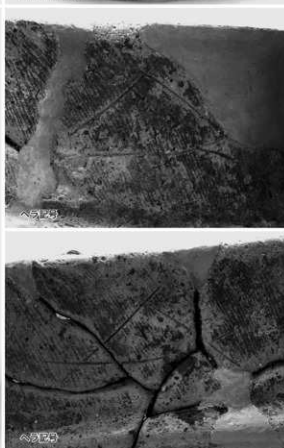


口縁部～3段目外側の調査



口縁部～3段目内側の調査

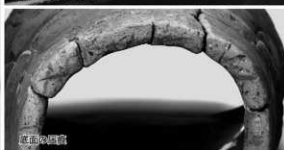
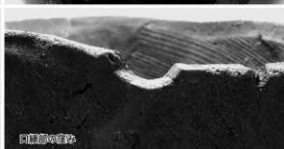
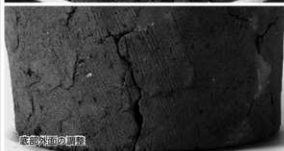
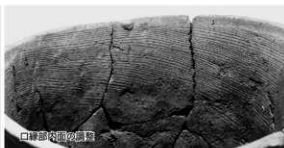
普通円筒埴輪



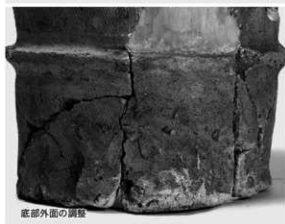
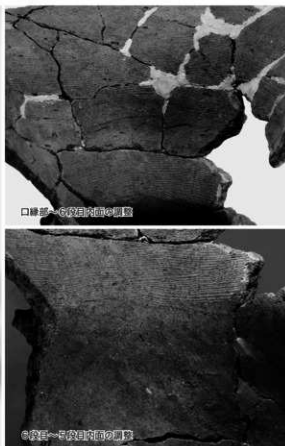
普通円筒埴輪

円筒埴輪

図版六

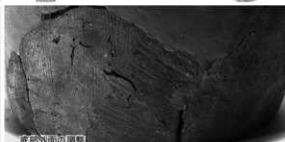
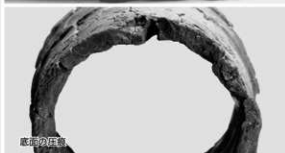


普通円筒埴輪



朝顔形円筒埴輪

円筒埴輪

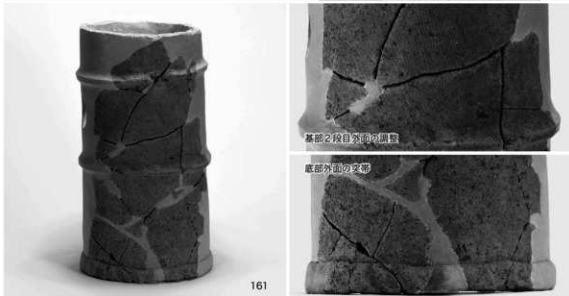
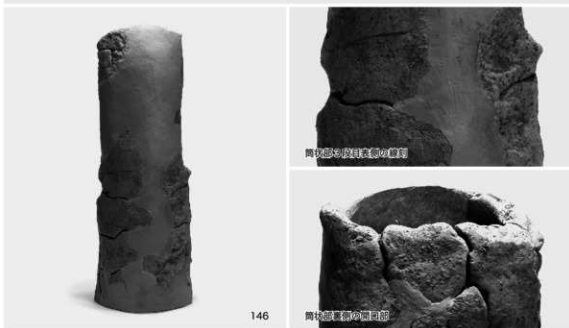


円筒埴輪

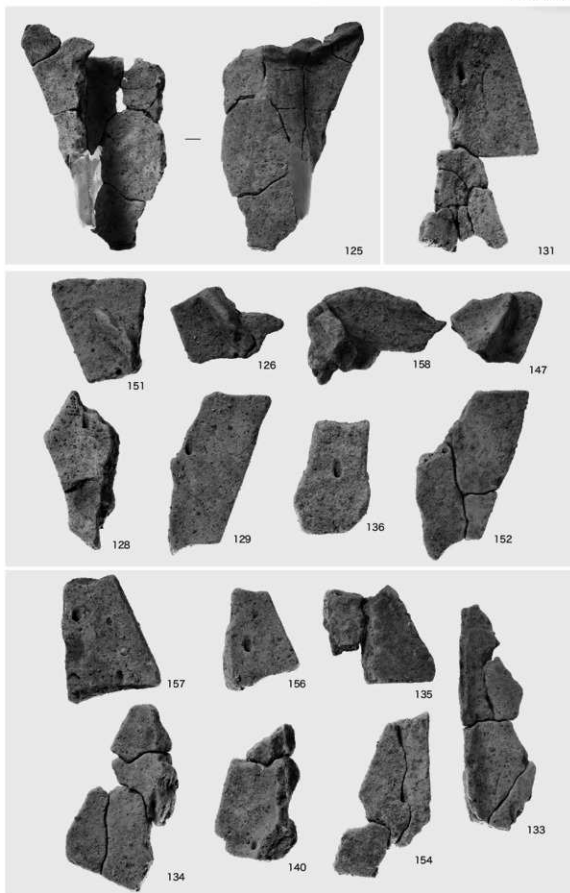


石見型埴輪

形象埴輪



石見型埴輪



石見型埴輪

形象埴輪

図版十二



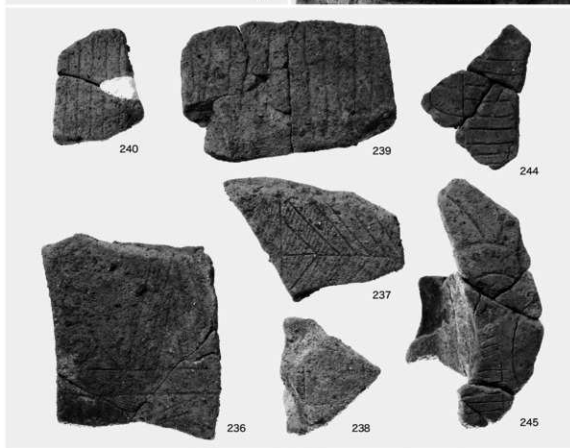
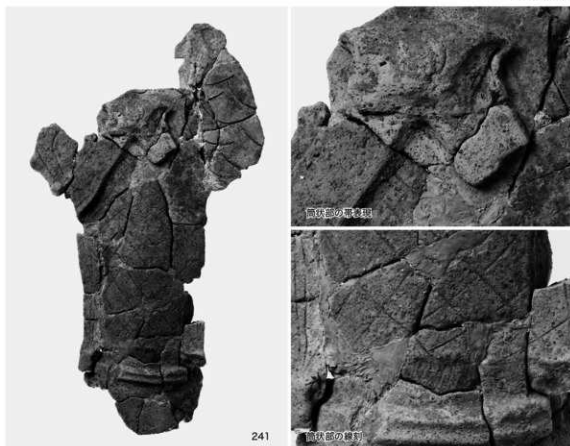
人物形埴輪



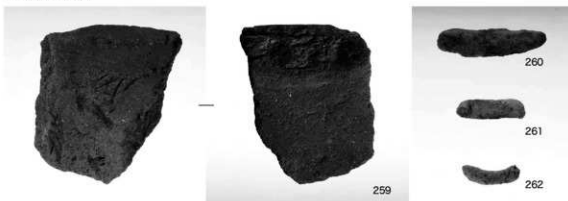
形象埴輪



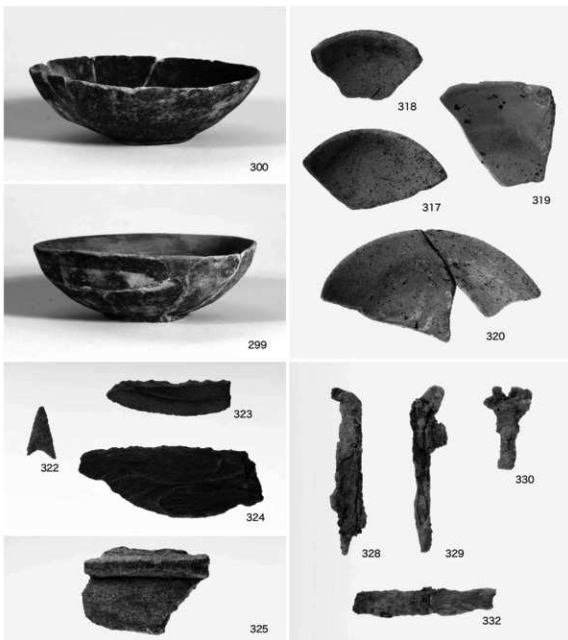
家形埴輪



その他の遺物



(1) 墳丘出土の土製品



(2) 古墳時代以外の主な遺物

長岡京市文化財調査報告書 第 82 冊

令和 6 (2024) 年 3 月 25 日 発行

- 編 集 公益財団法人 長岡京市埋蔵文化財センター
〒 617 - 0853 京都府長岡京市奥海印寺東条 10 番地の 1
電話 075 - 955 - 3622 FAX 075 - 951 - 0427
- 発 行 長岡京市教育委員会
〒 617 - 0851 京都府長岡京市開田一丁目 1 - 1
電話 075 - 951 - 2121 (代)
- 印 刷 山代印刷株式会社
〒 602 - 0062 京都府京都市上京区寺之内町通小川西入
宝鏡院東町 588 番地
電話 075 - 441 - 8177 FAX 075 - 441 - 8179

